

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡 VII

— 第12次発掘調査概報 —

2023年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会



宮ノ浦遺跡Ⅱ区18トレンチ1号墓（北より）

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡 VII

— 第12次発掘調査概報 —

2023年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

序 文

上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のはほぼ中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されています。瀬戸内海国立公園区域内にあり、穏やかな海と多島美からなる景観が町の大きな魅力です。令和4年3月20日に上島架橋「岩城橋」の供用が開始され、「ゆめしま海道」が全線開通しました。「ゆめしま海道」は、地域の人々にとっての夢の架け橋であると同時に、町内外の人々を結ぶ架け橋でもあります。町内の島々が橋で結ばれ、地域間交流が進み、新たな歴史文化が育まれることが期待されています。

上島町にある国の史跡に指定された弓削島荘遺跡は、中世の荘園遺跡です。伊予国弓削島荘は、中世に塩を東寺（教王護国寺）に貢納したことから、塩の荘園として知られています。一方、町内各所では、様々な時代の塩業遺跡が存在しています。町内にある佐島、生名島、岩城島は中世には石清水八幡宮の荘園であった歴史をもち、これら島々も弓削島と同じく塩の荘園でした。特に佐島の宮ノ浦海岸での塩業遺跡の発見は、その後の弓削島荘総合調査事業実施の契機となりました。

上島町では、平成25年度から上島町内遺跡発掘調査等事業として、文化庁、愛媛県教育委員会のご指導ご助言を賜りながら、塩業遺跡の発掘調査、弓削島荘の総合調査および埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査を進めて参りました。宮ノ浦遺跡の発掘調査は、愛媛大学法文学部考古学研究室の皆様のご尽力を賜り継続して実施しています。

本報告書は、令和4年度に実施された宮ノ浦遺跡の第12次の発掘調査の成果を中心に報告するものです。今次の調査では、佐島周辺の瀬戸内海に海水が流入する縄文海進以前の縄文土器群が出土する文化層、古墳時代から中世にかけての生産活動の解明を目的に調査を進めました。調査の終盤では、宮ノ浦遺跡では初めてとなる埋葬址の発見がありました。検出された人骨は遺存状態が極めて良好なため、今後の分析・研究によって多くの知見が得られることでしょう。

このように宮ノ浦遺跡は、郷土の歴史を理解し復元するために必要な多くの情報をもった貴重な遺跡です。本報告書が文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究、郷土史研究の基礎資料として広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査事業を実施するにあたり、懇切なるご指導ご助言を賜りました諸先生方、そして、多大なるご理解とご協力を賜りました関係機関および地元住民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和5年3月

愛媛県上島町教育委員会

教育長 清水 伸

序 文

宮ノ浦遺跡の発掘調査も12年目を迎えた。今回は、新型コロナ感染拡大の影響でできなかった合宿調査を3年ぶりに行うことができた。ただ合宿経験のある学生は大学院生2名のみであり、学部生にはまったくその経験がない。はたして集団活動が成り立つのかどうか、事前はかなり不安であったが、なんとか無事に調査終了を迎えることができた。考えてみると、民宿に分宿しての調査ではあったが、昨年3月、長崎県対馬市のオテカタ遺跡にほとんどの学生が参加しており、そのときの経験が活かされたとみられる。とはいえ、3年前の夏と同じような集団活動ができたわけではなく、コロナ禍によって失われたものはかなり大きいと感じる。復元にはもう少し時間が必要である。

さて、第12次調査は、第9次調査終了間際に発見した縄文時代包含層を広く調査することを目的とした。第10次・第11次調査でも同じ目的を掲げたものの、合宿が許されなかったことと思うように発掘が進まなかった。今回は5トレンチで生産活動に関わる遺構の一部を検出し、また18トレンチでは巻頭写真にもあるような中世人骨を発見した。さらには過去の調査で確認できなかった古代の製塩土器包含層を18トレンチで確認した。これらの発見によって縄文包含層に達した面積が今回も限られることとなったが、宮ノ浦遺跡の豊富さ、素晴らしさを改めて強く実感した。

そして調査の一方で進める地形探査も遺跡の成り立ちを考えるうえで興味深い成果を挙げつつある。宮ノ浦湾に小舟を浮かべて行う探査は、海面下約10mに底があり、広大な平野が広がっている様子をみせてくれる。また東の元見山から遺跡にいたる岩盤調査は、地表ではわからない細くのびる丘陵が眠り、海が北側から入っていたことを想起させる。縄文時代のみならず、古墳時代、古代、中世における人々の活動もその地形に影響を受けていたことがわかりつつあり、探査を担う関係者に謝意を表したい。

今回の調査での大きな出来事は18トレンチでの人骨の発見である。驚き、喜びとともに、その良好な遺存状況ゆえに、骨考古学研究に耐えうる検出・記録の必要性に重圧を感じた。この難局を早速来跡いただいた九州大学の舟橋京子先生に救っていただいた。舟橋先生の人骨取り上げを食い入るようにみつめ、また作業を補助した学生達にもいい経験であったと思う。舟橋先生には衷心より感謝の意を表します。

いよいよ来年度は宮ノ浦遺跡の最後の発掘調査となり、第12次調査の課題をすべて解決できるよう万全の準備を図りたい。

令和5年3月

愛媛大学考古学研究室

村 上 恭 通

例 言

1. 本書は、愛媛県越智郡上島町弓削佐島に所在する宮ノ浦遺跡の第12次発掘調査の概要報告書である。なお、国庫補助事業「上島町内遺跡発掘調査等事業」として実施した。
2. 遺跡における発掘・記録作業は第2章2に記載した参加者が行った。
3. 遺物の整理作業は次のメンバーが行った。
青木聡志〈愛媛県埋蔵文化財センター〉、鄭宗鎬〈愛媛大学大学院博士課程〉、大塩啓一郎、ブズレン・サミ、松澤樹生〈以上、愛媛大学大学院修士課程〉、永田權、藤田一希、古江七海、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥、江本晃季〈以上、愛媛大学学部生〉
4. 図のトレースは鄭、大塩、ブズレン、松澤、永田、藤田、古江、伴井、福本、益田、江本が担当した。
5. 遺物の写真撮影は安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、福本が行った。
6. 文責については各担当者の氏名を文末に記した。
7. 第4章の出土人骨に関する予察については舟橋京子、足立達朗、中野伸彦（以上、九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、米元史織（九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）が担当した。
8. 第4章については、各執筆者の意向を尊重して、一部の表現や体裁をあえて統一してない。
9. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に依拠した。
10. 本文中における緯度、経度は国土地理院の地図情報データに基づいている。
11. 図中の方位の北は図2・図5を除き、すべて真北である。
12. 本文中の遺物番号と巻末写真図版の遺物番号は対応している。
13. トレンチごとに遺構番号を付している。
14. 本概報には整理途中の資料や知見が含まれており、また来年度も発掘調査が継続されることから、その内容に変更が生じる場合がある。その際は正式報告書における記述を最終的な見解としたい。
15. 本報告書の作成に当たり、次の方々よりご指導、ご協力いただいた。
柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）、柴田昌兎（愛媛大学埋蔵文化財調査室）、神野恵（奈良文化財研究所）、兵頭勲（愛媛県教育委員会）、福永将大（九州大学総合研究博物館）、松本安紀彦（愛南町教育委員会）
16. 本書の編集は村上恭通の監修のもと有馬啓介、大塩啓一郎が行った。

宮ノ浦遺跡Ⅶ

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

	頁
第1章 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
第2章 調査の経緯・体制・経過	7
1. 調査の経緯と目的	7
2. 調査の体制	8
3. 調査の経過	9
第3章 発掘調査成果	11
1. 調査区の設定	11
2. 各トレンチの成果	11
(1) 5 トレンチ	11
(2) 17 トレンチ	30
(3) 18 トレンチ	40
第4章 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨に関する予察	67
1. はじめに	67
2. 考古学的分析：出土状況	67
3. 形質人類学的分析：形質的特徴	68
4. Sr同位体比・Ca/Sr分析	68
5. 結語	68
第5章 成果と課題	71

図 版 目 次

図版 1	1. 宮ノ浦遺跡遠景（西から）	7. 18トレンチⅡ－5層製塩土器出土状況（北から）
	2. 全景（南から）	
図版 2	1. 5トレンチ3号遺構（北から）	図版 5 5トレンチ出土縄文土器（表面）、5トレンチ出土縄文土器（裏面）
	2. 5トレンチⅣ層縄文土器出土状況（北から）	図版 6 5トレンチ遺構出土遺物、5トレンチ包含層出土遺物 1
	3. 5トレンチ東壁・北壁（一部）	図版 7 5トレンチ包含層出土遺物 2
	4. 5トレンチⅣ層縄文土器出土状況（東から）	図版 8 17トレンチ出土縄文土器 1（表面）、17トレンチ出土縄文土器 1（裏面）
図版 3	1. 17トレンチ北壁	図版 9 17トレンチ出土縄文土器 2（表面）、17トレンチ出土縄文土器 2（裏面）
	2. 17トレンチ南壁	図版 10 17トレンチ出土縄文土器 3、17トレンチ出土石器、17トレンチ出土遺物
	3. 17トレンチ東壁	図版 11 18トレンチ 1号墓副葬品、18トレンチ 1号墓埋土出土遺物、18トレンチ 1号遺構出土遺物、18トレンチ出土脚台式製塩土器、18トレンチ包含層出土遺物 1
	4. 17トレンチ西壁	
	5. 17トレンチⅢ層古式土師器・製塩土器（西から）	図版 12 18トレンチ包含層出土遺物 2
	6. 17トレンチⅣ層縄文土器出土状況（東から）	図版 13 18トレンチ包含層出土遺物 3、18トレンチ出土製塩土器 1
図版 4	1. 18トレンチ北壁	図版 14 18トレンチ出土製塩土器 2・土錘
	2. 18トレンチ東壁（一部）	
	3. 18トレンチ南壁	
	4. 18トレンチ 1号墓（西から）	
	5. 18トレンチ 1号墓副葬土器（西から）	
	6. 18トレンチⅡ－5層製塩土器出土状況（北から）	

図 目 次

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 図1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図 | 図19 II区17トレンチ出土石器 |
| 図2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図 | 図20 II区17トレンチ出土土器 |
| 図3 佐島遺跡分布図 | 図21 II区18トレンチ平面図・土層図 |
| 図4 II区第12次調査地点 | 図22 II区18トレンチ1号墓平面図・断面図 |
| 図5 II区トレンチ配置図 | 図23 II区18トレンチ1号墓副葬品1 |
| 図6 II区5トレンチ平面図・土層図 | 図24 II区18トレンチ1号墓副葬品2 |
| 図7 II区5トレンチII-3層上面遺構配置図・断面図 | 図25 II区18トレンチ1号墓埋出土土器 |
| 図8 II区5トレンチ出土縄文土器 | 図26 II区18トレンチ1号遺構出土石器 |
| 図9 II区5トレンチ遺構出土土器 | 図27 II区18トレンチ出土脚台式製塩土器 |
| 図10 II区5トレンチ出土脚台式製塩土器 | 図28 II区18トレンチ包含層出土土器1 |
| 図11 II区5トレンチ包含層出土土器1 | 図29 II区18トレンチ包含層出土土器2 |
| 図12 II区5トレンチ包含層出土土器2 | 図30 II区18トレンチ包含層出土土器・土製品 |
| 図13 II区5トレンチ包含層出土土器・土製品 | 図31 II区18トレンチ出土製塩土器1 |
| 図14 II区5トレンチ出土石器 | 図32 II区18トレンチ出土製塩土器2 |
| 図15 II区5トレンチ出土鍛冶関連遺物 | 図33 II区18トレンチ出土土錘 |
| 図16 II区17トレンチ平面図・土層図 | 図34 II区18トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物 |
| 図17 II区17トレンチ出土縄文土器1 | 図35 愛媛県内出土の古代製塩土器 |
| 図18 II区17トレンチ出土縄文土器2 | |

写 真 目 次

- | | |
|-------------|--------------------|
| 写真1 発掘調査風景 | 写真3 製塩土器内面の布目痕拡大写真 |
| 写真2 現地説明会風景 | |

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

瀬戸内海の西部に位置する芸予諸島は、広島県（安芸）と愛媛県（伊予）にかけて所在する島々を指している。その北部には広島県に属する向島、因島、生口島などがあり、それに愛媛県の上島諸島が連なる。上島諸島は越智郡上島町に所属し、弓削島、佐島、生名島、岩城島、赤穂根島、津波島などで構成されている。これら瀬戸内海の島々は、西南日本内帯の領家帯に属する花崗岩類を基岩としており、その海域は、第四紀更新世ごろ、地球規模の海水面低下により草原地帯であったと考えられている。その後、完新世の気温上昇により引き起こされた氷解が海水面の上昇をもたらし、現在のような景観を生み出した。

弓削島の南西に位置する佐島は、南北方向に細長い島であり、南北約3.5km、東西約2km、面積は約2.67km²を測る。島の脊梁を幅の広い丘陵が占め、平地は海岸沿いにわずかにある程度である。島の北東部と南部は山や小丘陵がそのまま海に没し、海面近くには波蝕崖が形成されている。そして、島の東部は小規模で浅い湾と波蝕崖とが交互に連なっており、その湾のうちの一つが宮ノ浦湾と呼ばれ、宮ノ浦遺跡はそれに面して立地している（図1）。

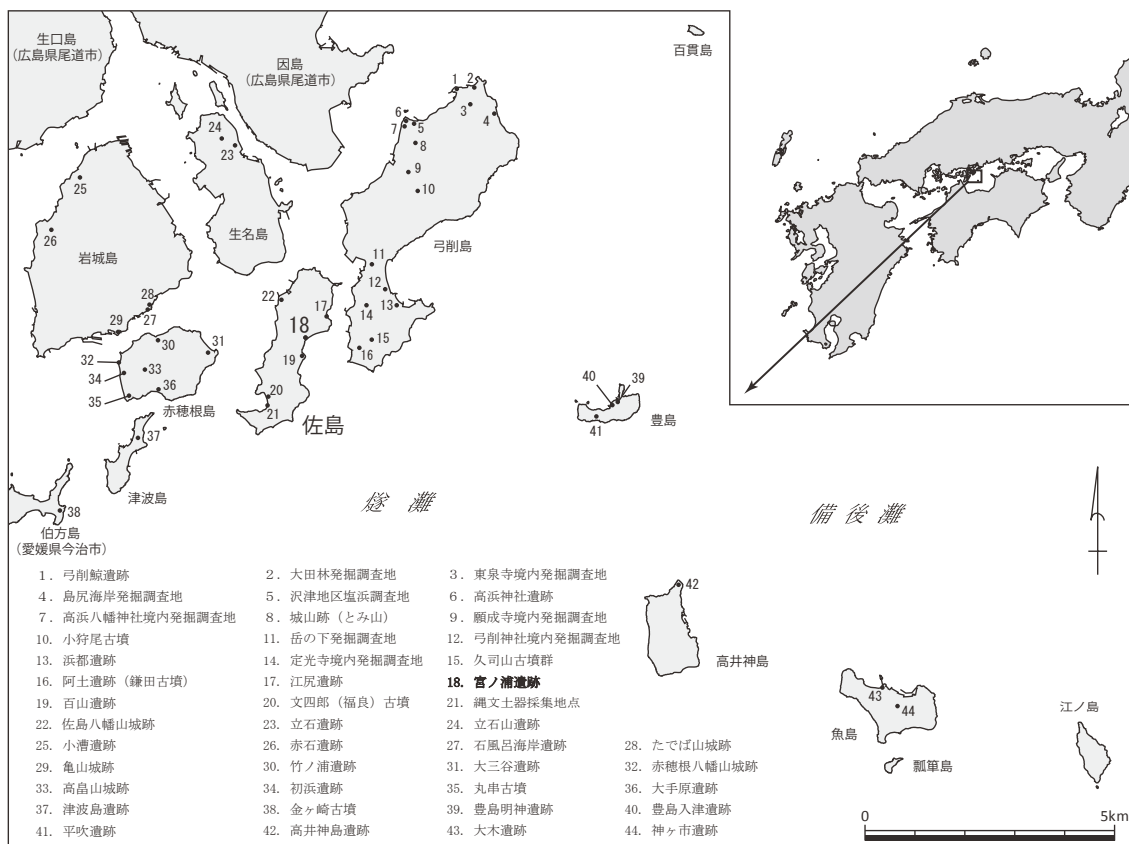


図1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 地理的環境

宮ノ浦遺跡は、上島町弓削佐島2232番地外に所在し、北緯34度14分42秒、東経133度11分30秒（Ⅰ区地点）に位置する。海岸線が東西約400mにわたって湾曲しながら伸びており、それに平行して形成された浜堤は、北側背後にある丘陵から南側に伸びる低い舌状丘陵を境に、二つの浜堤に分かれている。遺跡は主に浜堤上に立地しており、西側浜堤を中心とした地域と東側浜堤を中心とした地域に分けられ、第7次調査以降、西側をⅠ区、東側をⅡ区と呼ぶこととした（図2）。

Ⅰ区とその周辺は、海側から砂浜、浜堤、後背湿地、そして標高約30m～50mの小丘陵で構成されている。後背湿地において第6次調査で実施したボーリング調査の結果、現湿地面から約11m掘っても岩盤には到達せず、また約9m下から検出された木炭が年代測定の結果 $15828 \pm 40\text{BP}$ を示すことから、最終氷期以前のこの一帯が崖錐地形であることが判明した〔パリノ・サーヴェイ株式会社2018〕。つまり、もともと谷のように深く落ち込んでいた地形を呈し、そこに陸、海から土砂が供給されることで現在の地形が形成されたのである。一方、Ⅱ区は類似した地貌を呈してはいるものの、第10次・第11次調査で、浜堤堆積物の下に縄文時代早期前半の土器を含む花崗岩の風化層と、さらにその下から花崗岩の風化礫層が確認された。このことは海成砂層の下に埋没丘陵があることを示しており、その丘陵が東側の元見山から伸びていた様子を想定できるようになった。この想定は第12次調査において、北側への傾斜面を確認したことによりさらに鮮明にすることができた。仮に海水がないものと想像して、宮ノ浦湾側から北を見るならば、元見山から西に低丘陵が伸び、その西側に高い崖が連なる景観を復元することができよう。なお、調査区最奥部の2トレンチでは、標高1m以下は水性堆積層が深く形成されていることがわかり、元見山の北にある江尻浜の

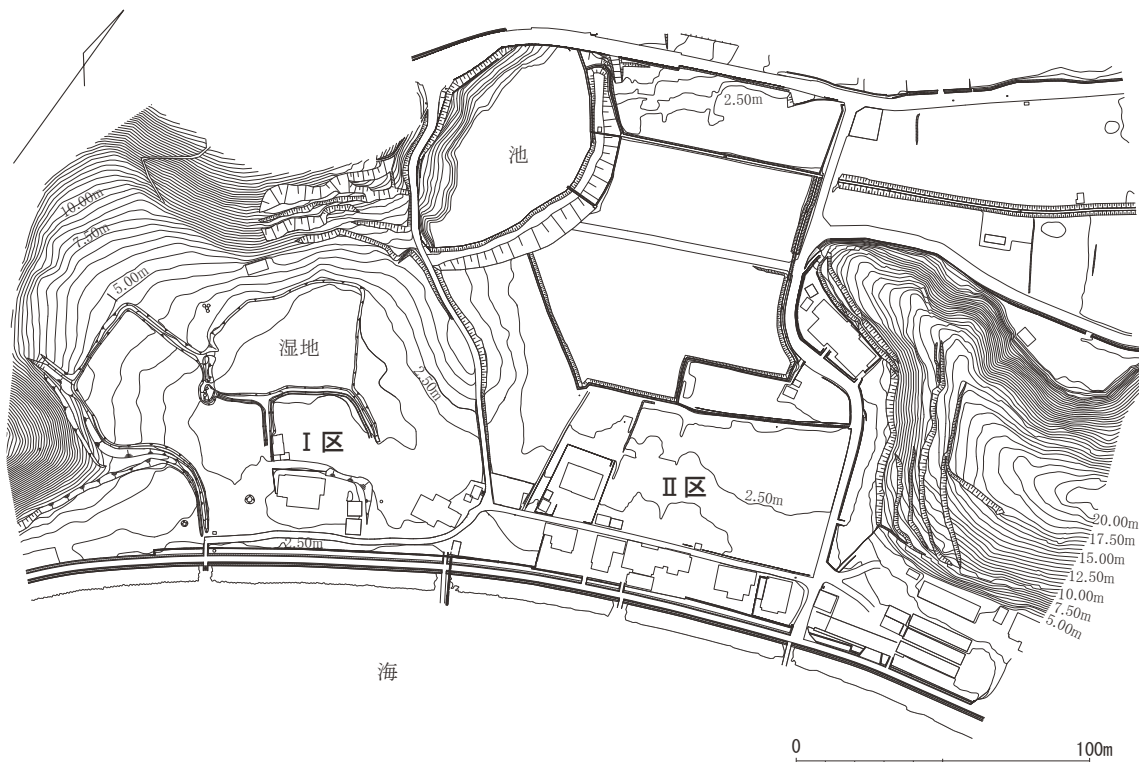


図2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図

方から海が湾入し、その後、湿地化して現況にいたったと考えられる。

(松澤樹生)

2. 歴史的環境

宮ノ浦遺跡から海岸に沿って南へ500m離れた場所に、東に向かって突出した小丘陵がある。その標高約30mの比較的平坦な丘陵上には旧石器時代の遺跡である百山遺跡があり、サヌカイト製のナイフ形石器が採集されている〔長井2008〕。

縄文時代の遺跡については、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の遺物包含層で、撚糸文、刺突文、条痕文をもつ縄文土器が確認され、早期前半に遡ると報告されている〔有馬・青木編2021、有馬・品川編2019、有馬・馬編2022〕。特に第10次・第11次調査で確認された撚糸文土器には、第9次調査出土品には見られなかった厚手で、密な撚糸文や刺突文を伴う口縁部が含まれている。宮ノ浦遺跡ではこれら以外にもⅠ区やⅡ区で前期、後期、晩期の土器が出土した。また、佐島南西部にある福良地区や北東部の江尻地区の砂浜海岸においても前期や後期の縄文土器片が採集されている（図3）。

弥生時代の遺跡については、佐島ではまだ周知されている例は少なく、宮ノ浦遺跡で土器数点が確認されている程度である〔有馬・八木編2016〕。隣島の生名島では、その北部にあり、水道を見下ろす山頂に立石山遺跡がある〔長井・土居1979、生名村史編纂委員会編2004〕。標高約140mに位置しており、山頂あるいはやや下った岩陰周辺で中期末葉の凹線文土器や磨製蛤刃石斧が確認されている。また、岩城島のほぼ中心にそびえる標高369.6mの積善山山頂でも凹線文土器が採集されている〔愛媛県史編さん委員会編1982〕。岩城島では、この山頂から南へ派生する丘陵上の標高70～80mにある空久保遺跡でも中期中葉の土器が採集されており、この時期から丘陵や山頂へ居住域が徐々に展開するものと思われる。全体的に低平な佐島では、このようないわゆる「高地性集落」に適した地形はない。しかし、江尻地区において、砂浜海岸の北にある標高約20mの小丘陵傾斜面から凹線文を有する甕や壺の口縁部片が採集されており、当時の生活域である可能性が考えられる。立石山遺跡や積善山遺跡に比較すれば、はるかに標高は低いものの、海を見下ろす立地は同じである。この選地は、浜堤上の宮ノ浦遺跡において凹線文期の中期末葉における生活址が全く発見されないことと密接な関係があると考えられる。

古墳時代の遺跡としては、福良湾の北にある丘陵上に文四郎（福良）古墳が古くから知られている〔弓削町誌編集専門委員会編1986〕。1970（昭和45）年10月、農道工事中に花崗岩製の箱式石棺墓が発見され、棺内から頭蓋骨片や骨盤片のほか、長さ約1mの鉄刀が出土した。その後、人骨について調査した結果、被葬者が成年男子であることがわかり〔田中2014〕、さらに頭蓋骨から抽出したコラーゲンを試料として自然科学的な年代測定を実施した結果、3世紀中葉の年代が得られた〔今治市村上水軍博物館編2014〕。この年代は、宮ノ浦遺跡で製塩が盛んに行われた時期に相当し、生産活動が活発な段階において箱式石棺に埋葬された佐島の有力者の存在を垣間見ることができる。そして脚台式製塩土器が使用されたこの時期の製塩遺跡として、岩城島の石風呂海岸遺跡、

2. 歴史的環境

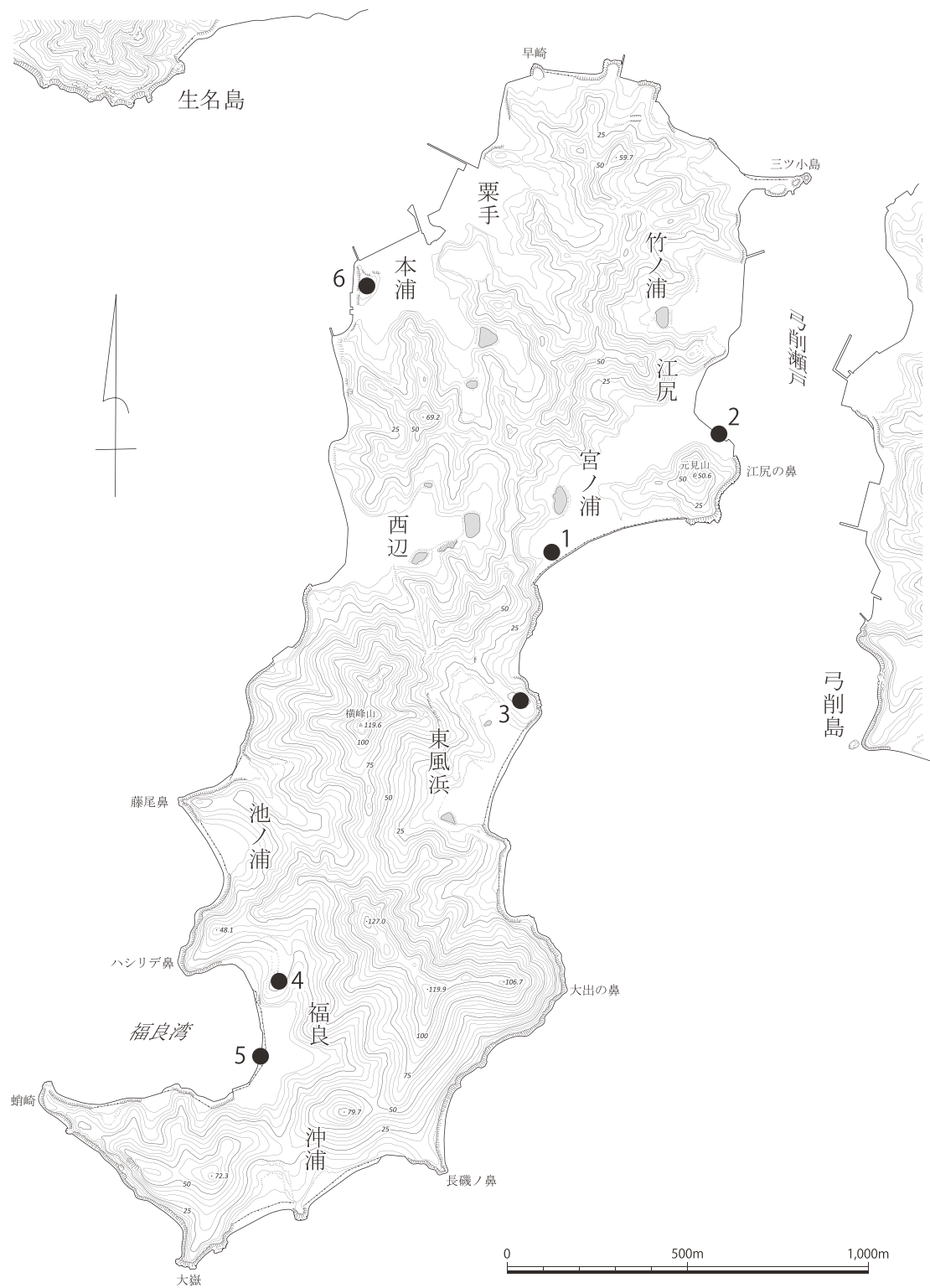


図3 佐島遺跡分布図

1. 宮ノ浦遺跡 2. 江尻遺跡 3. 百山遺跡 4. 文四郎（福良）古墳 5. 縄文土器採集地点 6. 佐島八幡山城跡

赤石遺跡、長江遺跡〔有馬編2018〕、赤穂根島の大三谷遺跡、竹ノ浦遺跡、大手原遺跡、初浜遺跡が知られており〔野口編1992〕、上島諸島各地で製塩が行われていたことがわかる。

製塩活動が一旦低調となる古墳時代中期には、瀬戸内各地の島に祭祀の痕跡がのこされているが、上島諸島では魚島の大木遺跡がそれを代表する著名な遺跡である〔長井1975〕。稀少なコップ形製塩土器、ミニチュア土器、小型仿製鏡、鉄鋌を含む鉄器類が採集されている。鉄器類は時を経て再整理され、鉄鋌に複数の種類があることや小型鉄剣の存在が判明した。なおこのような製塩土器を伴う祭祀遺跡が脚台式の段階、つまり前期にまで遡ることを豊島明神遺跡の発掘調査が示している〔村上編2016〕。

古墳時代後期を迎えると、製塩活動は小規模ではあるが復調をみせ、宮ノ浦遺跡や岩城島の石風呂海岸遺跡、船越遺跡にその痕跡が確認されている。後期から終末期にかけては、上島諸島でも横穴式石室を主体部とする古墳が築造されており、弓削島下弓削の久司山古墳群、上弓削の小狩尾古墳が知られている〔弓削町誌編集専門委員会編1986〕。生名島東岸にも、工事で滅失してしまったが、完形の須恵器や土師器がのこされた厳島古墳が存在した〔生名村誌編纂委員会編2004〕。現在までのところ、佐島では後期古墳の存在は知られていない。製塩活動が各島で行われたのに対し、古墳築造を可能とした島は限定される傾向が読みとれる。

宮ノ浦遺跡では、これまでの発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての土器、陶磁器が出土している。I区N15グリッドでは、鍛冶滓、鍛造剥片という鍛冶関連遺物がまとまって出土し、うち1点の鍛冶滓に噛み込んだ木炭を年代測定した結果、calAD779~984の年代が得られた〔大澤・パリノ・サーヴェイ株式会社2021〕。この時期、海に面した浜堤上に鍛冶屋を備えた漁村の存在が想定できるようになった。

古代の様相を礎に、海との関わりは中世をむかえてますます強くなっていくものと考えられる。とくに京都の東寺領荘園であった弓削島は、年貢として塩を納めた「塩の荘園」として知られている〔清水1975〕。2015（平成27）年10月に世界の記憶（ユネスコ記憶遺産）に登録された「東寺百合文書」には、弓削島荘に関する記録が400通ほど残されている。また2016（平成28）年より始まった「弓削島荘総合調査」の一環で、この文書にも登場する高浜八幡神社や大田林で発掘調査が行われ、当時の塩田の浜床が確認され〔有馬・曾根編2020、村上編2020〕、塩田の構造や景観も捉えやすくなったといえよう。2015年の赤穂根島の丸串古墳の調査では、頭蓋骨や歯といった人骨の一部が確認された〔有馬編2018〕。この人骨は中世のものと考えられている。

さて東寺百合文書では、「弓削御庄」の名が1150（久安6）年の記録に初めて現れるが、それと時をほぼ同じくする1158（保元3）年の石清水八幡宮文書によると、佐島は生名島、岩城島、味酒郷（愛媛県松山市）とともに京都の石清水八幡宮領荘園となっている。第10次・第11次調査では槽状遺構から和泉型瓦器碗を多数含む一括性の高い土器群が確認された。土器群は12世紀中葉と考えられ、まさにその時期に位置付けられる。この時期の宮ノ浦遺跡が単なる漁村、海村ではなく、荘園に関わる機能を有していた可能性はきわめて高いといえよう。

その後、14世紀を迎えると、弓削島では小早川氏や小泉氏の出現により東寺の荘園経営が困難に

2. 歴史的環境

なる。その後、「村上水軍」で知られる村上氏の出現により、各島に海城が築城されることとなる。佐島では、現在八幡神社の社殿がある佐島八幡山城跡が中世城館跡とされている。

(松澤樹生)

【参考文献】

- 有馬啓介編2018『上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・曾根大地編2020『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 生名村史編纂委員会編2004『生名村誌』生名村
- 今治市村上水軍博物館編2014『芸予諸島・海民文化の考古学』平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展、今治市村上水軍博物館
- 愛媛県史編さん委員会編1982『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県
- 大澤正己・パリノ・サーヴェイ株式会社 2021「宮ノ浦遺跡第8次発掘調査Ⅰ区出土鉄滓の分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 清水三男 1975「塩の荘園「伊予国弓削島」」『中世荘園の基礎構造』清水三男著作集第3巻、校倉書房
- 田中良之 2014「人骨から見えてくる原始古代」『弥生・古墳時代の芸予諸島：環境と人間＜予稿集＞』愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム・今治市村上水軍博物館開館10周年記念講演会、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 長井数秋 1975「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』第33号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋・土居睦子 1979「愛媛県立石山遺跡発掘調査報告」『愛媛の文化』第19号、愛媛県文化財保護協会
- 野口光比古編1992『赤穂根島埋蔵文化財試掘調査報告書』岩城村教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2018「宮ノ浦遺跡ボーリング調査および分析（概要）」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通編2016『愛媛県越智郡上島町豊島明神遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通編2020『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 弓削町誌編集専門委員会編1986『弓削町誌』弓削町

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査の経緯と目的

2011年8月に着手した宮ノ浦遺跡の発掘調査は、当初西側のⅠ区から開始し、古墳時代前期の製塩址を中心に、縄文時代から現代にいたる人々の生活の痕跡を明らかにしてきた。このⅠ区の発掘は2018年の第8次調査で終了し〔有馬・品川編2019〕、一方、遺跡の東への広がりを確認するために元見山に近い平坦地を第7次調査からⅡ区として発掘を開始した。

Ⅱ区では、まず南北の基準線に沿って1～8トレンチを設定した。発掘してまもなくⅡ区の層順がⅠ区のそれと異なり、分厚く形成されたクロスナ層が古代～中世に属することが判明した。また5トレンチでは、クロスナ層の上面から中層にかけて被熱礫を含む亜円礫、円礫が広く、大量に検出され、それらに古代～中世の土器、越州窯系を含む陶磁器、土製品、鉄製品、骨角器および貝だまりがともなうことを確認した。5トレンチの礫群の性格が十分につかめないまま、第8次調査では調査区を西に展開したところ、礫や灰白色粘土が包含層中に散在する状況を確認し、さらに第9次調査の10・15トレンチでは内壁に灰白色粘土を貼った土坑が各1基検出され、槽状遺構とした。その時期は相伴土器から12世紀を中心とし、機能としては鹹水溜めを想定した。また各トレンチの北に配した14・16トレンチでも土坑や厚い焼土の堆積が検出されており、当該期の製塩活動に関連するものと判断した。また5トレンチでは礫群検出面の下層で被熱礫からなる集石遺構が発見され、それが火床であるとともに、大量の礫が元来、集石遺構の部材であったことも想定できるようになった。

さて、第9次調査では、宮ノ浦遺跡の発掘調査も翌2020年には10年目の節目を迎えることから、幕引きすることも考慮し、掘削の及んでいない下層における遺構・遺物の存否を確認することとした。そして、広い面積をもつ5トレンチ東壁沿いを1m幅で掘り下げたところ、古代～中世の分厚いクロスナ層の下に、棲痕が顕著で、小型製塩土器の脚台を含む薄い包含層があり、さらにその下層との境辺りから1㎡の範囲で縄文土器が面的に出土した。しかもその縄文土器には捺糸文、条痕文、刺突文などが認められ、押型文土器よりも古い様相をもつと判断された。また検出時、砂層と判断していた縄文土器の包含層は、5cm大の花崗岩風化礫をまばらに含んでおり、色調も黄味が強く、それまで見慣れていたいわゆる浜堤堆積物と判断するには違和感を覚えた。

このようにして、第9次調査では芸予諸島における最古級の縄文土器を検出し、さらに広い面積を調査し、その時期の物質文化を解明する課題が新たに生じた。またその包含層の供給源あるいは旧地形についても、疑問点を残したまま調査を終えることとなった。この地形の問題は、Ⅰ区とⅡ区の層順の相違、すなわち、Ⅱ区では表土層直下で古代～中世のクロスナ層が現れることの原因にも関連するものと推察された。そこで2020年度の第10次調査は、縄文時代早期の物質文化の解明と包含層形成の要因ならびに旧地形の復元を目的に実施することとした。ただし、第10次調査では、

2. 調査の体制

既往のトレンチを拡張・設定した4トレンチにおいて、上層のクロスナ層中で中世に属する複数の遺構が検出され、その調査に時間を要した。またコロナ禍で発掘調査参加者が限られていたことも重なり、十分な時間をかけて縄文土器包含層を精査することができなかった。

そこで2021年度に実施した第11次調査では、4トレンチの継続調査と4トレンチの南に接して17トレンチを設定し、掘り下げを開始した。4トレンチでは前年度発見された中世の遺構を完掘し、東壁沿いの一部をのこして、縄文時代の包含層を掘り下げた。その結果、この包含層が上下二層（Ⅳ－1、2層）に分かれることを確認し、包含層自体も浜堤堆積物ではなく、花崗岩の風化土層（バイラン土層）であることを明らかにした。さらに包含層の下には、無遺物層をはさんで花崗岩の岩盤を検出できた。このことによりⅡ区の地下には、花崗岩を岩体とする元見山から西に延びる埋没丘陵が存在することがほぼ確実になった。17トレンチでは古墳時代の遺物包含層であるⅢ層を一部確認したところで発掘を終了せざるを得なかった。第11次調査も前年度同様、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、調査に参加する学生の数制限する必要があったためである。

（村上恭通）

2. 調査の体制

宮ノ浦遺跡の第12次発掘調査は愛媛大学考古学研究室と上島町教育委員会が協力して実施した。その実施体制は次の通りである。

事業主体：上島町

調査主体：上島町教育委員会

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）、有馬啓介（上島町教育委員会）

発掘調査の参加者は次の通りである。

第12次調査（2022年）：

有馬啓介、曾根大地、清水伸、藤原綾子（上島町教育委員会教育課）、村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同大学准教授）、辻康男（株式会社パレオ・ラボ）、鄭宗鎬（愛媛大学大学院博士課程2年生）、大塩啓一郎、ブズレン・サミ、松澤樹生（同修士課程1年生）、永田權、藤田一希、古江七海（愛媛大学4年生）、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥（同3年生）、江本晃季（同2年生）、持永壮志朗（愛媛県教育委員会）、青木聡志（愛媛県埋蔵文化財センター）、安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、舟橋京子（九州大学）、谷若倫郎（瀬戸内海考古学研究会）、岩崎郁実（奈良県立橿原考古学研究所）、国安登

なお、愛媛大学社会共創学部教育カリキュラムの一環で、崎山きよら、西川ひなの（愛媛大学2年生）が参画した。また、遺跡のボーリング調査については、株式会社シアテックに委託した。

（村上恭通）

3. 調査の経過

第12次発掘調査は2022年8月4日～18日の期間に発掘作業を行い、19日に調査を終了した。

第12次調査では、4トレンチ、5トレンチで確認された縄文時代の包含層の広がりやの把握が引き続き課題となった。そのため第7次調査で着手した5トレンチ、第11次調査で着手した17トレンチを継続発掘し、5トレンチの南、17トレンチの西に18トレンチを新規に設定し、掘り下げに着手した。

5トレンチでは、第9次調査においてⅡ－2層上面で検出された1号遺構を掘り下げ、その基底がⅡ－2層中であることが判明した。Ⅱ－2層をさらに掘り下げると、トレンチ中央部において被熱して赤褐色に変化した部分が検出され、精査の結果、カマド状遺構の基底部であると判断し、3号遺構とした。本遺構はサブトレンチを設定して、被熱の深度を確認し、保存することとした。一方、今回の主目的である縄文時代の包含層であるⅣ－1層、2層については、土器の出土を確認しながら地表下約1.70m、標高0.95mまで掘り下げた。この包含層が北に向けて急激に傾斜していることや、花崗岩の岩盤から真砂土層へ変化する岩体風化の様相を確認することができた。

17トレンチは、古代の包含層であるⅡ－4層より掘り下げを再開した。土色が急激に変化するⅢ－1層以下では、無数の棲痕がトレンチ全体で確認され、濃密に分布する棲痕群が遺構輪郭の検出を妨げた。そのためトレンチ壁面あるいは縄文の包含層であるⅣ層で確認した遺構が多い。そしてトレンチ北壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定し、Ⅳ－2層まで掘り下げ、地表下約1.37m、標高約1.45mの地点で発掘を停止した。縄文土器の包含層が先行トレンチ外にも広がっていることが確認され、次年度の継続発掘のため土嚢によって埋め戻した。

18トレンチは、東西2m、南北2mの範囲で調査区を設定し掘り下げ、作業の進捗を考慮し、北壁土層断面図を作成後、ベルトを撤去し、5トレンチと接続した。さらに南へ2m拡張したところトレンチ中央部において、Ⅱ－3層上面で人骨1体が検出された。これを1号墓とし、人骨の頭部を検出する目的で、東側に0.7m、南北0.9mの範囲で拡張した。また、トレンチ北西部では古代の製塩土器がまとまって出土した。このようにⅡ層までの調査に時間を要し、縄文時代の包含層まで達することはできなかった。これを次年度の課題とし、養生のため土嚢で埋め戻した。



写真1 発掘調査風景



写真2 現地説明会風景

3. 調査の経過

第12次調査では、5トレンチのカマド状の遺構や、18トレンチの製塩土器やほぼ完存の人骨をのこした1号墓など古代から中世にかけての大きな成果が得られた。また5トレンチ東壁沿いでの縄文包含層の完掘作業によって、花崗岩岩盤の風化土層が形成され、その上層に包含層が形成されるという土層形成のプロセスが確認できた。しかし、17トレンチ、18トレンチの全体的な進捗からみれば、縄文土器を包含するIV層の広がりを把握するという主目的は果たされておらず、今後の課題としてのこった。

現地説明会は8月14、15日の両日実施し、町内外から46名の参加者を得た。

なお、調査期間中に宮ノ浦湾の海底地形探査を実施し、2023年2月には調査区から東隣の果樹園にかけてサウディング法によるボーリング調査を実施した。

(大塩啓一郎)

謝 辞

宮ノ浦遺跡第12次調査に際して調査地の地権者である山下敏久氏、左高武實氏のご理解とご協力があったはじめて可能となりました。心から感謝いたします。

日常生活においては、村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO法人弓削の荘のみなさまに格別なご配慮とご支援を頂戴いたしました。

また、下記の皆さまには、宮ノ浦遺跡に足をお運びいただき、ご指導とご支援を頂戴しました。心より感謝申し上げます（敬称略）。小野隼弥、亀澤一平、品川愛、柴田圭子、柴田昌児、柴田亮、下條信行、畑守泰子、古江稚和、楨林啓介、松田凌馬、松葉竜司、松本安紀彦、吉田正広

(村上恭通)

【参考文献】

有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

第3章 発掘調査成果

1. 調査区の設定

現在の汀線や集落を西南西～東北東に走る生活道路を、Ⅱ区を調査していく上で基本となる軸と考えて、道路上にポイントを設置し、それに直交するラインを調査予定の宅地跡に設定した（図4・5）。この直交するラインを南北基準線とし、以下のように発掘区を設定した。この南北基準線は、真北から西に22度ずれている。

第12次調査では、第11次調査の成果をふまえて、5トレンチと17トレンチ、そして18トレンチの調査を実施した。5トレンチは第9次調査、17トレンチは第11次調査と同じ範囲で設定され、それぞれ発掘を行なった。18トレンチは、4トレンチや5トレンチで確認された縄文時代の包含層の展開を明らかにするために、5トレンチの南、17トレンチの西に新たに設定されたトレンチである。18トレンチは調査の過程で一部の拡張を行っている。

以下、Ⅱ区の調査成果の概要について報告したい。いずれも調査区間で共通する土層が確認されている。共通する土層についてはローマ数字で記載しており、Ⅰ層が近現代の土層、Ⅱ層が古代～中世の土層（おもに古代末～中世初頭）、Ⅲ層が弥生～古墳時代（おもに古墳時代前期）、Ⅳ層が縄文時代の土層である。

（笹田朋孝）

2. 各トレンチの成果

（1）5トレンチ（図6・7）

第7次調査で設定し、第9次調査まで発掘した東西4.5m、南北2mの調査区であり、中世初頭の集石遺構やその他構造物の部材と思われる礫を大量に検出した。また東壁に沿って幅1mの先行トレンチを深く掘り下げ、縄文土器の包含層を確認した。第12次調査では、礫が散在する西壁に沿った幅1mの範囲を保存し、縄文時代の遺物包含層を広く検出し、その堆積状況と基盤層との関係を明らかにすることを目的に発掘を開始した。ところがトレンチ中央部の集石遺構を完掘したところで広い被熱面をとまなう3号遺構を検出したため、先行トレンチの拡張を断念し、縄文時代の包含層の調査は東壁から幅0.7mの範囲にとどめた。調査区の最深部は標高約0.95mに達した。

土層は大きく4つに分層され、Ⅱ層まではほぼ水平堆積であるが、Ⅲ層でやや南から北への傾斜が観察され、Ⅳ-1～3層は大きく北に傾斜している。Ⅰ層は表土層であり、Ⅰa、Ⅰbの2層に分層される。Ⅰa層は灰黄褐色を呈し、粗粒砂や極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする砂質土層である。細礫を多く含み、しまりがある。層厚は15～30cmである。Ⅰb層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を主体とし、砂質土層でしまりがある。3～5cmの亜角礫や亜円礫がみられ、貝類を多く含む。層厚は5～20cmである。Ⅱ層は主に古代～中世にかけての遺物を含み、4層に分けられ

2. 各トレンチの成果

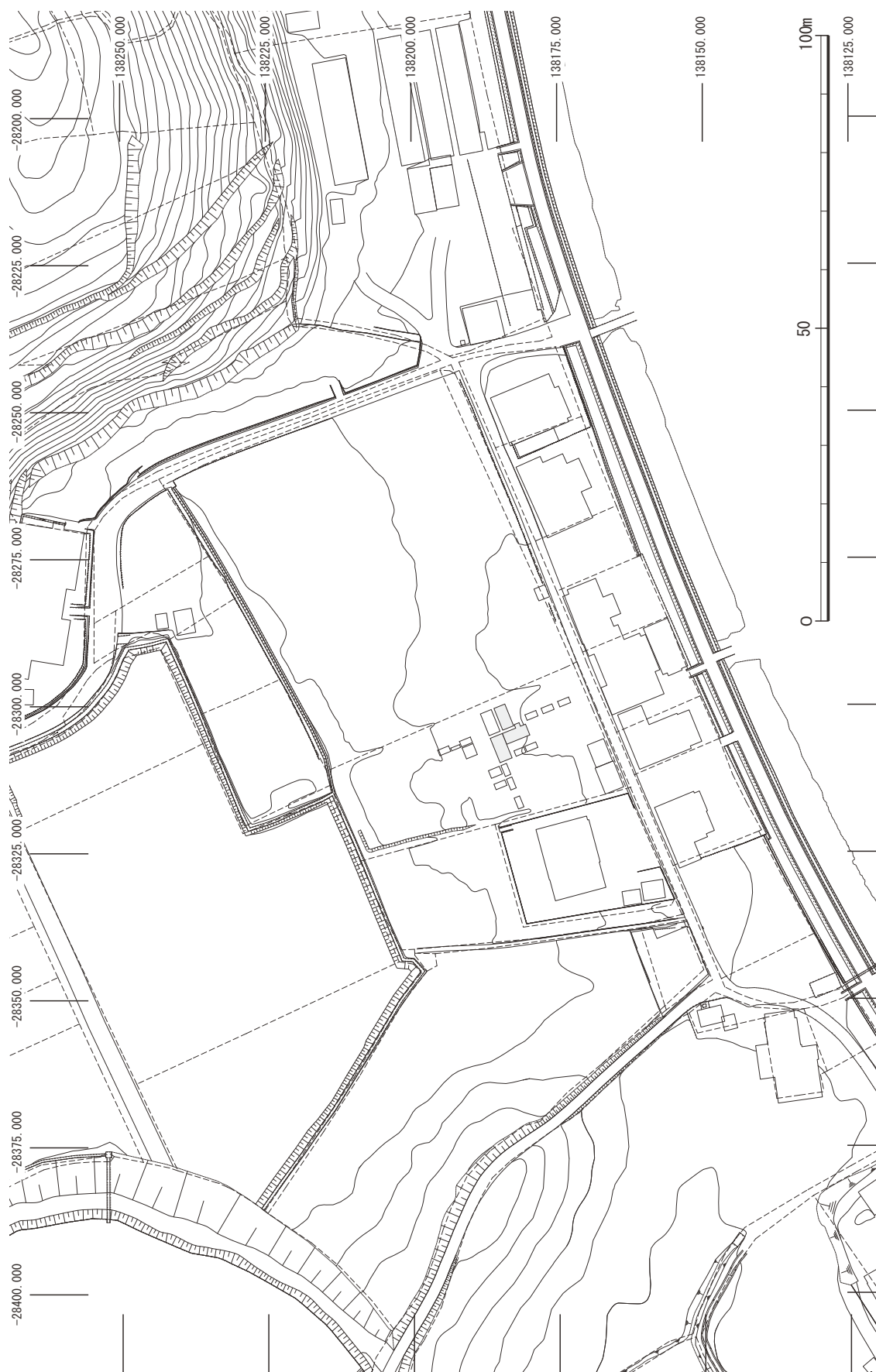


図4 II区第12次調査地点

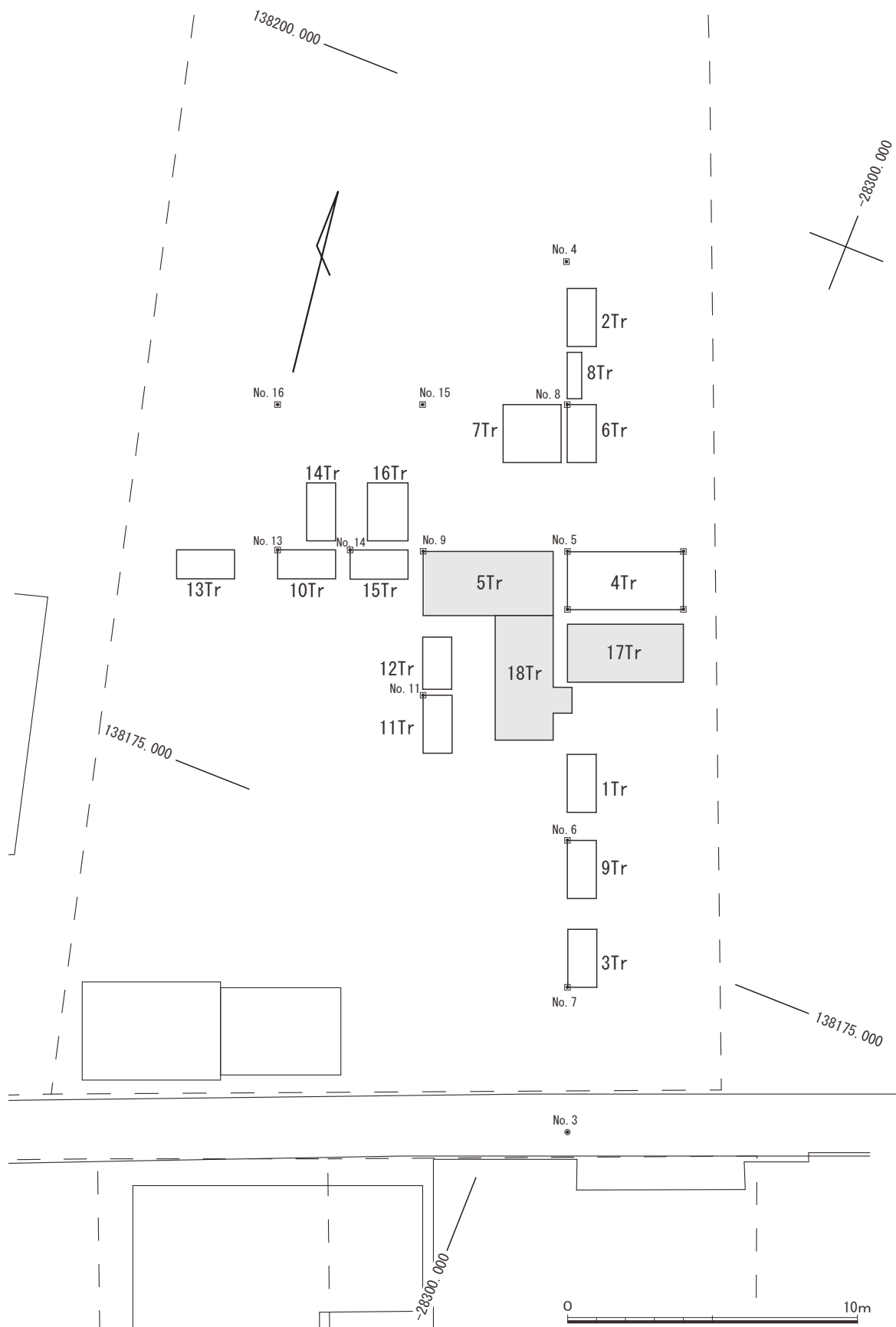


図5 II区トレンチ配置図

2. 各トレンチの成果

る。Ⅱ－1層は黒褐色を呈し、中粒砂を主体としながら粗粒砂や極粗粒砂を含む層である。5～10cmの礫をまばらに含み、貝類を多く含んでいる。堅くしまっており、層厚は15～20cmである。Ⅱ－2層は極暗褐色を呈する中粒砂を主体とする層であり、2cm大の礫がまばらにみられ、貝類も含む。しまりがあり、層厚は5～20cmである。Ⅱ－3層は暗褐色を呈し、細粒砂や中粒砂、極粗粒砂を含む粗粒砂主体の層である。しまりがあり、層厚は5～20cmを測る。本層上面で3号遺構が検出されている。Ⅱ－4層は黒褐色を呈し、細粒砂や粗粒砂、極粗粒砂を含む中粒砂主体の層で、しまりがある。層厚は5～20cmを測り、上面はやや波打っており、南に向けてやや薄くなる。Ⅲ層は黄褐色を呈し、細粒砂、粗粒砂を含む中粒砂主体の層であり、しまりはない。主に古墳時代前期の遺物を含んでいる。Ⅳ層は縄文時代以前に形成された花崗岩の風化砂層であり、4層に分かれる。Ⅳ－1層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を主体とし、Ⅳ－2層は橙色の中粒砂～粗粒砂を主体としており、いずれも縄文時代の包含層である。それらの層境は南から北に約30度と大きく傾斜しており、したがってそれぞれの層厚は5～35cm、7～30cmを測る。Ⅳ－3層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂が主体である。本層はⅣ－2層同様、北に傾斜するものの、その傾斜は約15度と弱くなっており、南に向けて厚くなっている。第7次調査において調査し、傾斜が確認されているⅡ区2トレンチのⅥ、Ⅶ層と対応する〔有馬・持永編2018〕。Ⅳ－4層は褐色を呈する粗粒砂主体とし、0.3～0.5cmの花崗岩の角礫がまばらにみられる。下層にかけて花崗岩の風化砂礫層へと漸移し、堆積は水平である。Ⅳ－3層以下は無遺物層である。Ⅳ層の堆積様相は、遺跡の形成過程を考えるうえで重要であり、今後周辺の地形を踏まえて詳細に検討する必要がある。

I a層では土師質土器、須恵器、土錘、I b層では製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、貿易陶磁器、Ⅱ－1層では製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、瓦器、陶磁器、Ⅱ－2層は製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、移動式カマド、土錘、石器、Ⅱ－3層では土師質土器、須恵器、黒色土器、鍛冶関連造物（鉄塊系遺物・鍛造剥片）、Ⅱ－4層では製塩土器、土師質土器、須恵器、Ⅲ層では製塩土器、Ⅳ－1層、Ⅳ－2層では縄文土器が出土した。

3号遺構

調査区中央部のⅡ－3層上面で検出されたピットとそれに接する被熱面からなり、カマド状の遺構と考えられる。ピットは燃料の掻き出し用であり、その規模は長軸60cm、短軸40cmの不整円形を呈しており、掘り直しが認められる。その東には、略楕円形の被熱面が接しており、両者が接する部分に焚き口が想定される。遺構の軸は東西であり、土坑と被熱範囲を合わせた規模は全長140cm、被熱部分の短軸は80cmを測る。

被熱部分は色調にグラデーションがあり、その中央部は長軸55cm、短軸40cmの隅丸長方形の範囲がにぶい黄橙色に変化している。この範囲は最高温の被熱を示しており、カマド内部の平面規模である。この部分から外側に向けて変色しており、被熱温度の違いを表している。その階調は断面で顕著であり、にぶい黄橙色（カマド－2層）、赤褐色（カマド－3層）、暗褐色（カマド－4層）と変化した。遺構検出面から約30cmまで熱が及んでいたことがわかる。

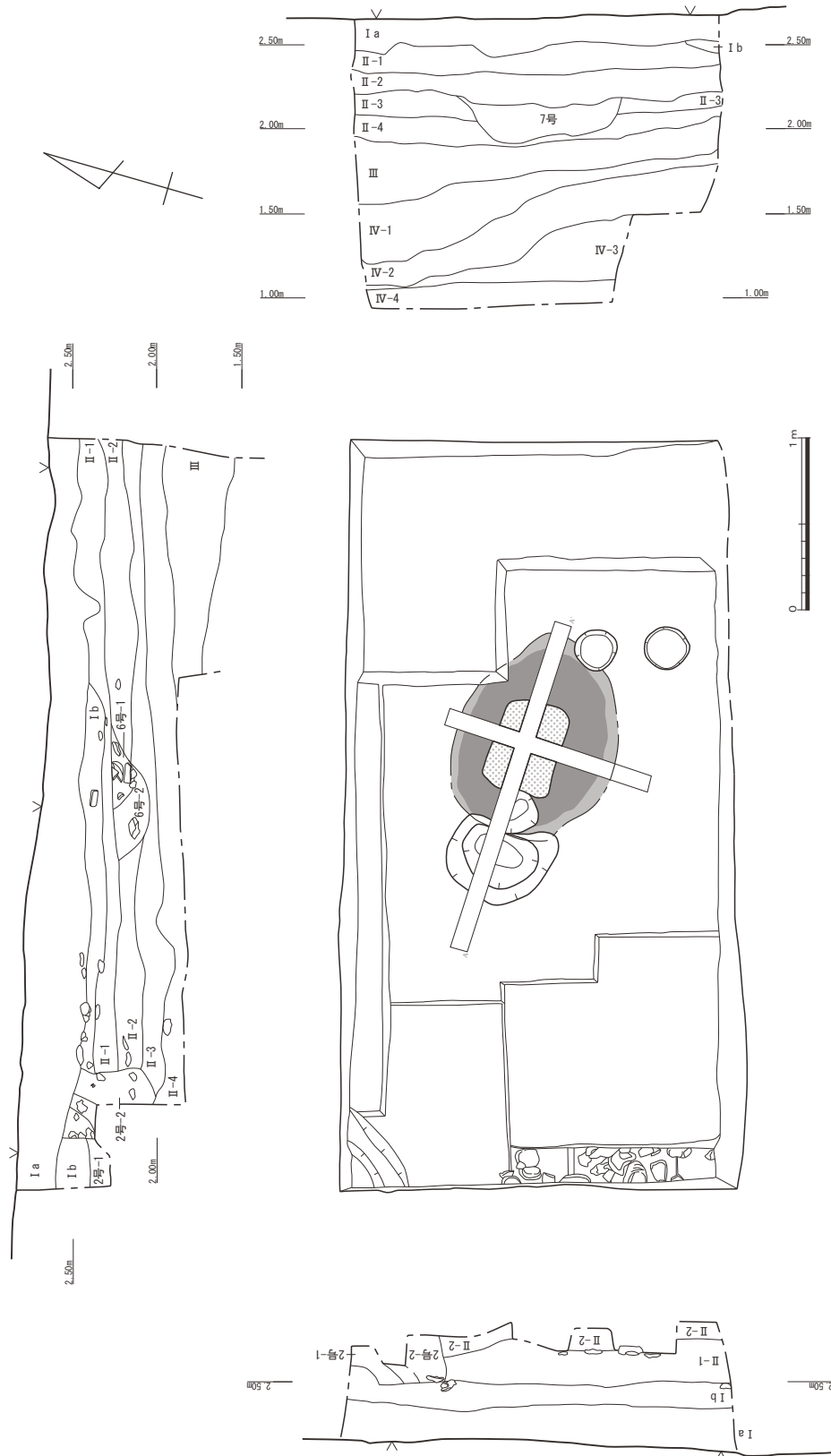


図6 II区5トレンチ平面図・土層図

[illegible]

2. 各トレンチの成果

本遺構の上部構造は完全に滅失しているが、Ⅱ－3層で大量に検出された被熱礫が骨材として使用されていた可能性も考えられる。

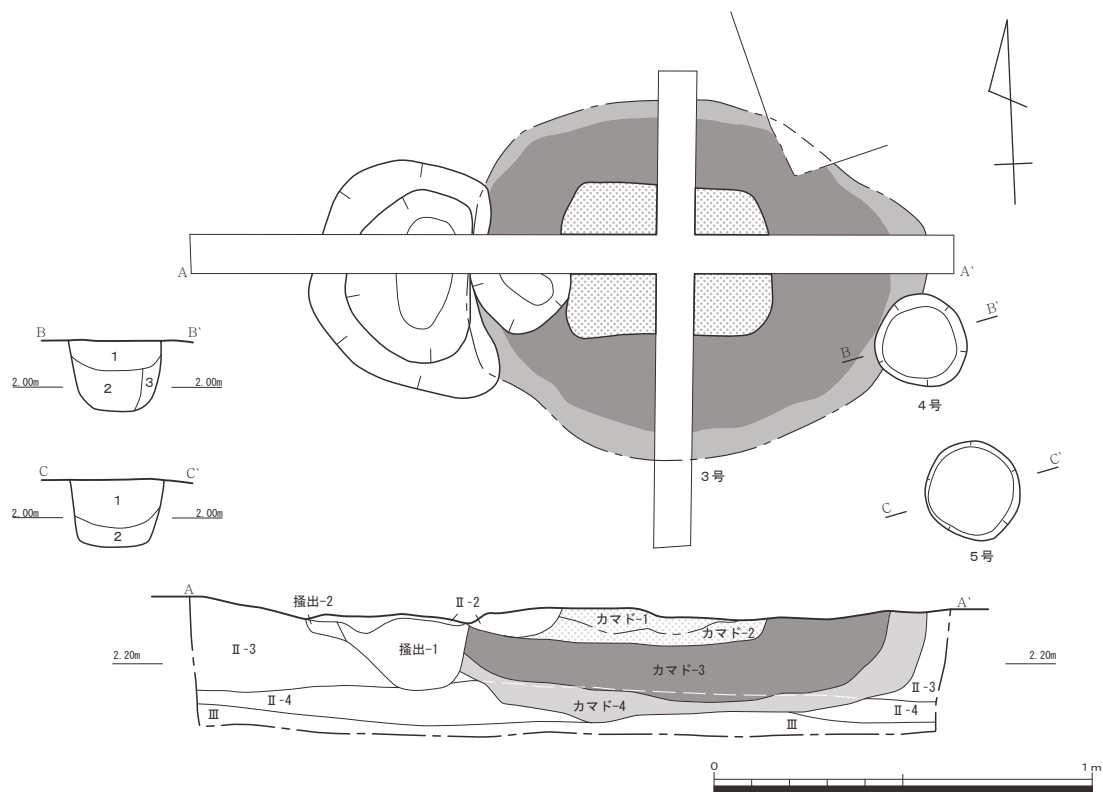
掻き出し用土坑覆土の掻き出し－2層から土師質土器（図9－23、24）が出土しており、その特徴から10～11世紀と考えられる。

4号遺構

3号遺構の南西隅に位置するピットであり、Ⅱ－2層下部で検出された。円形を呈し、直径約25cm、深さは最大19cmである。覆土は3層にわけられ、1層が黒色を呈する中粒砂、2層が赤褐色土まじりの暗褐色中粒砂、3層が極暗褐色を呈する中粒砂である。

5号遺構

4号遺構の15cmほど南に位置し、Ⅱ－2層下部で検出された円形ピットである。直径は約25cm、深さは最大20cmである。覆土は2層あり、1層は黒色を呈する中粒砂、2層が明赤褐色の中粒砂である。2層より時期不明の製塩土器が出土した。



3号遺構

掻出－1層：暗褐色（7.5YR3/4）中粒砂主体。細粒砂～極粗粒砂を含む。しまりはやや強い。掻出－2層：極暗褐色（7.5YR2/3）中粒砂主体。細粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。カマド－1層：黒褐色（10YR2/3）。カマド－2層：にぶい黄褐色（10YR6/3）。カマド－3層：赤褐色（5YR4/8）。カマド－4層：暗褐色（7.5YR3/4）。

4号遺構

1層：黒色（7.5YR1.7/1）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりあり。2層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりあり。3層：極暗褐色（7.5YR2/3）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりあり。

5号遺構

1層：黒色（7.5YR1.7/1）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりあり。2層：明赤褐色（2.5YR5/6）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりなし。

図7 Ⅱ区5トレンチⅡ－3層上面遺構配置図・断面図

6号遺構

北壁で確認された土坑であり、Ⅱ－2層上面からⅡ－3層まで掘り込まれている。長さ80cm、深さは最大23cmである。覆土は2層に分かれ、1層は極暗褐色の中粒砂を主体とし、2層は極暗褐色を呈するシルト主体の層である。

7号遺構

東壁で確認された土坑であり、Ⅱ－3層上面からⅡ－4層まで掘り込まれている。長さ95cm、深さは最大25cmを測る。覆土は黒褐色を呈する細粒砂～中粒砂を主体とする層であり、土器片や貝類を含んでいる。第11次調査において4トレンチの西壁で確認された6号遺構に対応すると考えられる〔有馬・馬編2022〕。

(大塩啓一郎)

出土遺物

縄文時代

縄文土器 (図8) 1～5はⅣ－2層、6～22はⅣ－1層から出土した。

1は口縁部片であり、無文で表面は波打っており、厚さ3.5mmと薄い。胎土はきめ細かく、2mm以下の長石・石英粒と角閃石・金雲母粉を含み、色調はにぶい橙色を呈する。2、3は撚糸文の原体で施された条痕をもつ。かすかに見える撚糸は無節Rであり、その間隔は約1mmである。厚さはそれぞれ6mm、5mmであり、胎土には長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。4、5は胴部から底部に移行する部分の破片であり、想定される底部は丸平底である。4はナデ調整の下にわずかに無節Lの撚糸文がみられる。胎土には長石・石英・赤色頁岩粒、角閃石・金雲母粉を含み、厚さは5mmである。5は表面が波打っており、その厚みは3.5mm～6mmである。胎土は赤色頁岩粒以外、4と同様であり、色調もにぶい黄橙色と同じである。6～9は深鉢の口縁部片であり、端部に爪形の連続刺突文が施されている。口縁部は6～8がやや外に開き、9が直立気味であり、6、8は端部がわずかに肥厚する。爪形文の幅はそれぞれ8mm、12mm、12mm、6mmであり、6、7、9の地文には縄文が施されている。いずれも長石・石英・角閃石粒や金雲母粉を含み、色調はにぶい黄橙色を呈し、厚さはそれぞれ4～6.5mm、4～5.5mm、4～6mm、4～5.5mmを測る。10は直線的にやや外に開く口縁部の破片である。丁寧にナデられた表面には浅い条痕が広い間隔で施され、口縁端部には2条の波状沈線がみられる。口唇頂部には浅く刻みが施され、口唇内面には小さな段がある。内面も丁寧にナデられ、間隔の広い条痕がみられる。胎土には長石・石英・金雲母粒や角閃石粉が含まれ、にぶい橙色を呈し、厚さは3.5～5mmである。11は強く内湾する口縁部付近の破片であり、縄文を地文とし、半裁竹管による山形沈線と直線的な沈線が施文されている。胎土には長石粒、角閃石・金雲母粉を含み、色調はにぶい橙色を呈し、厚さは6mmを測る。12は表面が丁寧に研磨されており、2条の浅い沈線のうち、下部の沈線内には0.5mm間隔の細かな刺突文が施されている。胎土はきめ細かく、長石・角閃石・金雲母粉を含み、色調は明黄褐色を呈し、厚さは4mmである。13は1と特徴を共有し、厚みは3～4mmである。14～22は単節RLの縄文

2. 各トレンチの成果

をもつ胴部片であり、長石、石英粒、石英、角閃石、金雲母粉を胎土に含む。いずれにもぶい橙色を呈し、厚みは3～4mmを測る。14はゆるやかに外湾しており、キャリパー形の器形が想定される。6～9は船元Ⅱ式であり、10、11は船元Ⅲ式の範疇で捉えられ、12は後期前半と考えられる。

(古江七海、益田千遥)

古墳時代～中世

3号遺構

土師質土器 (図9) 23～26は甕もしくは鍋の口縁部である。焼成はすべて良好である。

23は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が粗く施され、外面は指

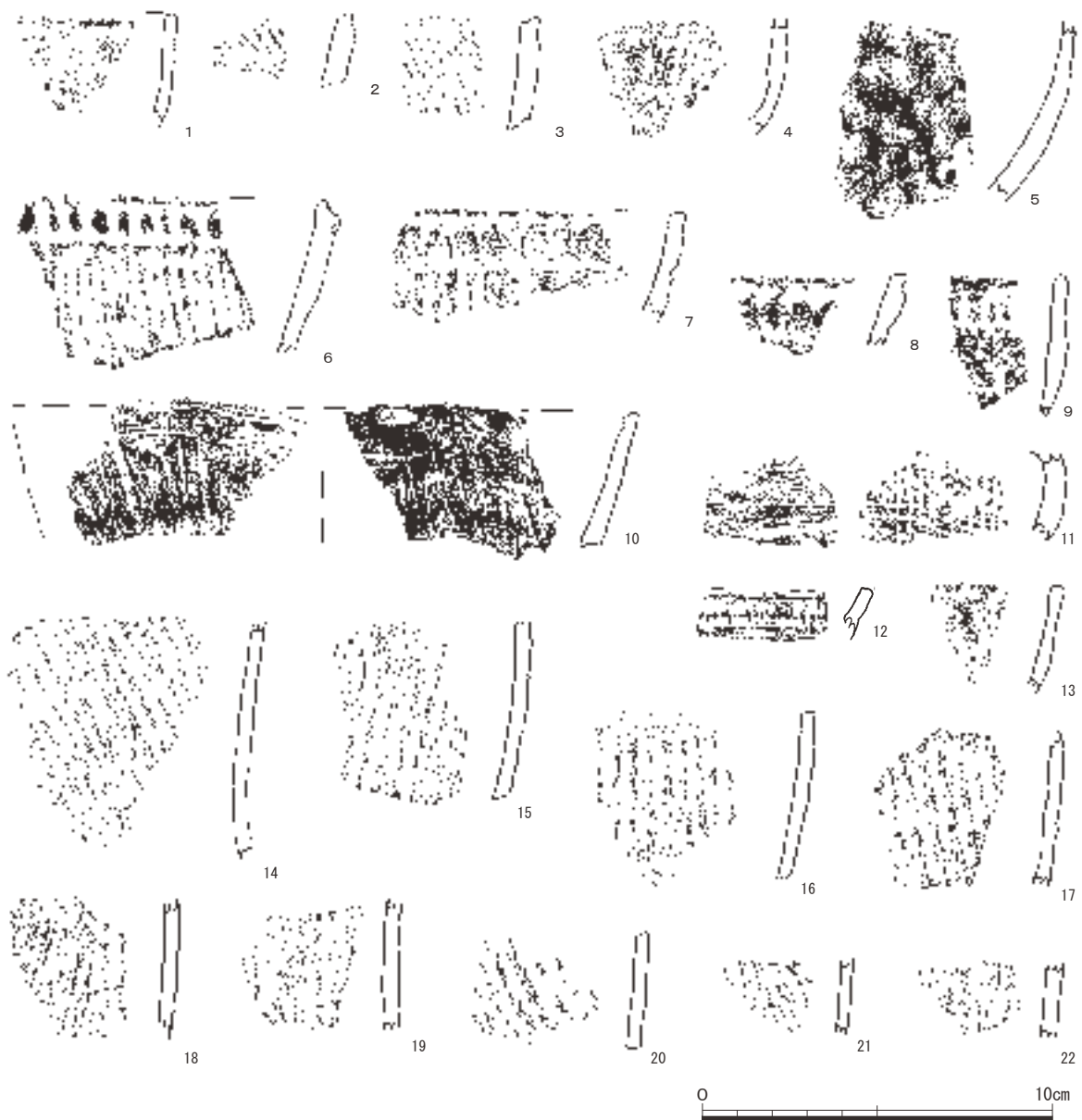


図8 II区5トレンチ出土縄文土器

頭圧痕がみられる。胎土には長石粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。24は外方へほぼ直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい褐色と橙色を呈する。25は強く外方へ開き、ナデ調整により内湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味におさまる。内外面ともにナデ調整が確認される。外面は下方からハケメが施され、ハケメの上端には粘土の残余がみられる。胎土は長石粒、石英粒、赤色粒を多量に含む。色調は内面が灰褐色、外面が黒褐色である。26は口縁部が直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は長石粒、石英粒を多量に含む。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。

須恵器（図9） 27～31はいずれも内外面ともに回転ナデ調整が施され、焼成は堅緻である。

27は杯蓋の口縁部であり、直線的に外方へ扁平気味に開き、端部は若干外へ張り出しながらかくおさまる。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を含む。内面が暗灰色である。外面は天井部が褐灰色を呈し、口縁部が暗灰色であり、二次的の被熱の痕跡である。田辺編年のTK7～MT83に比定される〔大阪府立近つ飛鳥博物館編2006〕。

28～31は杯であり、28は復元口径12.2cmを測る。口縁部は外反しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁部外面にはミガキ状の調整がみられる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を多量に含む。色調は内面が灰色、にぶい黄橙色、外面は灰色と褐灰色を呈する。29～31は口縁部である。29は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内面は二次的の被熱により一部砂粒が融着し、橙色を呈している。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒を含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰色を呈し、口縁端部付近には自然釉が付着する。30は内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。胎土は3mm以下の石英粒を含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰色である。31は直線的に外方へ開き、上部は強いナデ調整により外反している。端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面が灰色、外面は褐灰色を呈する。

製塩土器（図9） 34は体部である。内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕、内面は布目痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。

23、24は3号遺構の掻き出し－2層、25～31、34は3号遺構の焼土層より出土した。23、24は3号遺構の掻き出し口に伴っており、遺構の操業終了の時期を示すと考えられ、10～11世紀に比定さ

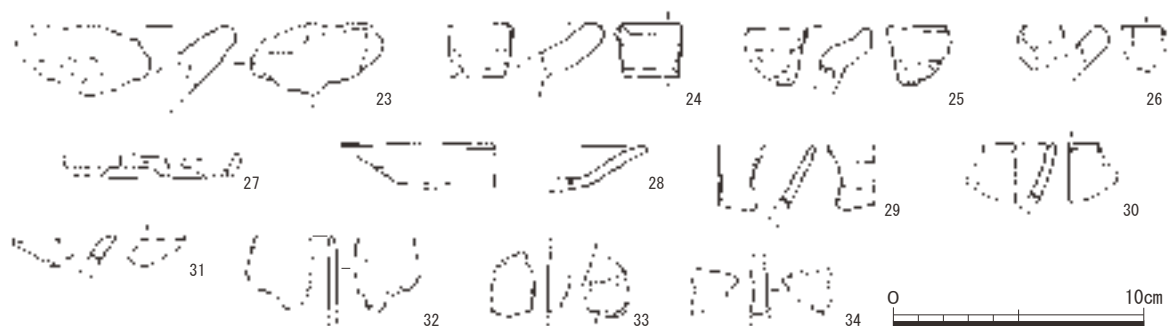


図9 II区5トレンチ遺構出土土器

2. 各トレンチの成果

れる。27は8世紀後半～9世紀前半、25、28～31は9～10世紀、34は時期不明である。

5号遺構

製塩土器（図9） 32は口縁部であり、ほぼ直立し、端部はやや尖り気味におさまる。器壁は3～4mm程度と比較的薄手である。内面は横方向のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は1mm程度の長石粒を含む。色調は内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。柴田編年の芸予Ⅳ類〔柴田2015〕にあたると考えられる。33は体部である。器壁が5～8.5mmと一定ではない。内面の調整は確認できないが、平滑に仕上げられている。外面にはナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。焼成は良好である。32は5世紀後半、33は9～10世紀に比定される。

（大塩啓一郎）

包含層

脚台式製塩土器（図10） 35は脚台部であり、復元底径は2.0cmを測る。外面と脚台内面にはナデ調整と指頭圧痕が確認される。内面は剥離している。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は鉢部内面が橙色、外面と脚台部内面が明赤褐色を呈する。柴田編年の芸予Ⅲ－3類にあたる。

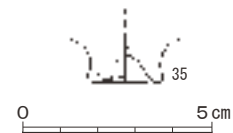


図10 II区5トレンチ
出土脚台式製塩土器

土師質土器（図11） 36～42は皿、43～56は杯、57、58は椀、59～70は甕もしくは鍋、71は製塩土器である。いずれも焼成は良好である。

36は畿内系土師器皿であり、復元口径15.0cmを測る。口縁部は上方へやや肥厚しながらわずかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。内面には煤と油染みと想定される痕跡が認められることから、灯明皿として用いられたことが推測される。外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の角閃石粒と赤色粒を多量に含み、色調は内面が橙色、外面は橙色、にぶい橙色を呈する。37は復元口径9.4cm、器高1.4cm、底径は6.2cmを測る。口縁部は外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を多量に含み、色調は内面が灰褐色、外面は黒褐色を呈する。38は底部であり、復元底径7.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。胎土は1mm以下の長石粒と2mm以下の角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。39は復元口径10.2cm、器高1.5cm、復元底径6.9cmを測る。口縁部はゆるやかに内湾しながら開き、端部は尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含み、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色である。40は口縁部であり、ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、端部が丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒、金雲母を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。41は口縁部であり、若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り

離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と3mm以下の石英粒を含む。色調は内外面ともに橙色である。42は底部であり、復元底径7.2cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒、赤色粒を少量含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。

43～47はいずれも内外面ともに回転ナデ調整が施される。43は復元口径10.0cm、器高2.4cm、復元底径5.9cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒や石英粒、角閃石粒、赤色粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色を呈する。44は口縁部であり、内湾しながら外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。45は復元口径16.8cm、器高3.8cm、復元底径9.6cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開き、上部で外反し、端部は尖り気味におさまる。内面には底部と体部の境に段がみられる。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面の上部が橙色、下部はにぶい黄橙色を呈し、外面はにぶい橙色である。46は口縁部であり、やや内湾しながら開いたのち、上部で外反し、端部は丸くおさまる。胎土は4mm以下の長石粒を含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。47もやや内湾しながら開き、上部で外反する。端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色を呈する。

48～56は底部である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施される。48～55の切り離し技法は回転ヘラ切りである。48は復元底径7.0cmを測る。見込みには成形時に爪もしくは工具により生じたと考えられるくぼみがみられる。胎土は1mm以下の赤色粒を含み、色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。49は復元底径6.0cmを測り、見込みには成形時に爪により生じたと考えられるくぼみがみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。50は復元底径7.4cmを測り、底部と体部の境は不明瞭である。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が橙色、外面は黒褐色である。51は復元底径7.4cmであり、底部と体部の境はやや不明瞭である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母も確認できる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。52は復元底径7.4cmを測り、胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。53は復元底径6.0cmを測り、胎土は2mm以下の長石粒と1mm以下の角閃石粒を少量含み、金雲母が多量にみられる。色調は内面が明赤褐色、外面は赤褐色である。54は復元底径9.0cmを測り、胎土は3mm以下の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内面がにぶい赤褐色、外面は橙色を呈する。55は復元底径7.0cmである。底部の切り離し痕は一部ナデ消されている。胎土は2mm以下の石英粒を少量と金雲母を含む。色調は内面が褐色、外面は黒色を呈する。56は復元底径6.0cmを測る。底部の切り離し痕はナデ消されている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色である。

57は復元口径11.6cmを測る。体部半ばにゆるやかな屈曲点をもち、口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられ

2. 各トレンチの成果

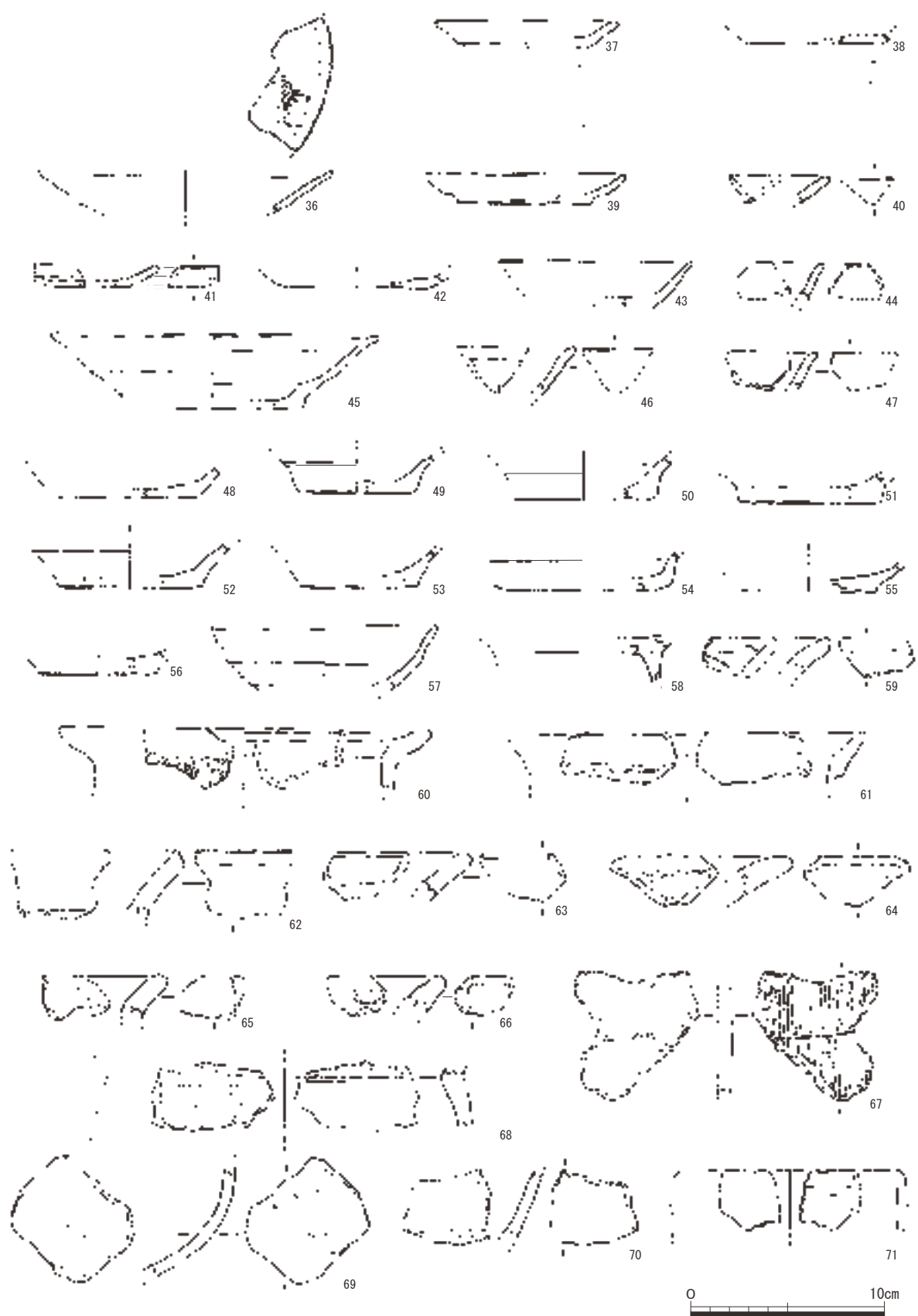


図11 II区5トレンチ包含層出土土器 1

る。色調は内面が明赤褐色、外面は橙色を呈する。58は底部であり高台端部を欠損している。内外面ともに回転ナデ調整が施される。高台の高さは残存部から1.0cm前後あり、比較的高い輪高台である。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が明赤褐色、外面はにぶい橙色を呈する。

59～66は口縁部である。59は外反し、端部外面には一部平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整と横方向のハケメが施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。60は復元口径19.4cmであり、体部で屈曲したのち強く外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面下半には縦方向のハケメがみられる。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む。色調は内面がにぶい褐色、外面は褐灰色を呈する。61は復元口径18.4cmを測る。体部から頸部にかけてはほぼまっすぐに立ち上がったのち、口縁部は外方へ開き、端部には平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、頸部外面にはナデ調整に伴い、爪により生じたと考えられる溝が顕著にみられる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を含み、金雲母も多量にみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい褐色を呈する。62は口縁部が外方へ開き、端部外面には平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内面がにぶい褐色、外面は黒褐色を呈する。63は外に開き、端部には若干の平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、金雲母を含む。色調は内面が明赤褐色、外面は褐色である。64は外反し、端部は丸くおさまる、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と赤色粒を多量に含む、色調は内面が褐灰色、外面は褐色と黒褐色を呈する。65はゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面にはハケメがみられる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内外面ともに黒褐色を呈する。66はやや内湾し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は黒褐色である。

67～70は体部である。67は外面に縦方向の粗いハケメが施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含む。色調は内面が灰褐色、外面はにぶい褐色を呈する。68は体部外面に縦方向のハケメが施されたのち、一部横方向のナデ調整が施される。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内外面ともに褐色である。69は内外面ともにナデ調整が施される。外面には部分的に指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内面が褐色と黒褐色、外面は褐灰色を呈する。70は内外面ともにナデ調整が施されており、外面には一部指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内面が褐灰色、外面は褐色と黒褐色である。69と70は同一個体の可能性がある。

37、42、67はⅡ－1層、38～40、43～47、50～55、59～62、65、66、69、70はⅡ－2層、36、48、49、56～58、68はⅡ－3層、63、64はⅡ－4層から出土している。41は出土層位不明である。36は10世紀前半、44～56、60、62～64、67～70は10～11世紀、43は11世紀、59、61、65、66は11～12世紀、37～42、57、58は12世紀に比定される。

2. 各トレンチの成果

製塩土器（図11） 71は製塩土器の口縁部である。内面にはナデ調整が認められ、外面には指頭圧痕がみられる。焼成は良好で、よく焼き締まっている。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。71はⅡ－2層から出土した。時期は不明である。

須恵器（図12） 74～88は杯、72、73、89は椀である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施され、焼成は堅緻である。

72は復元口径15.8cm、器高5.0cm、復元底径は7.2cm、高台の高さは0.6cmである。口縁部はゆるやかに内湾しながら開いたのち、端部がわずかに外反し、端部は丸くおさまる。外面には「人」または「大」とみられる文字が墨書されている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。73は復元口径15.0cmである。口縁部は若干内湾しながら開いたのち、上部が強く外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに顕著なロクロ目がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内外面ともに褐灰色である。74は口縁部がほぼ直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色である。75は復元口径14.6cmである。口縁部は内湾しながら外方へ開いたのち、上部でわずかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。76は口縁部が内湾しながら外方へ開いたのち、上部で立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁端部の外面には自然釉が付着する。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。77は口縁部が内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。外面の口縁端部付近には自然釉が付着する。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒を少量含む。色調は内外面ともに黄灰色である。78は口縁部がやや内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面がにぶい黄色、外面は灰黄色を呈する。79は口縁部が直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を少量含む。色調は内外面ともに灰色である。80は口縁部が外方へゆるやかに内湾しながら開き、口縁部中ほどで器壁がやや薄くなったのちやや肥厚し、端部が若干尖る。口縁端部の外面には重ね焼きの痕跡がみられる。胎土は3mm以下の長石粒を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は灰白色を呈する。81は口縁部が内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに灰色、口縁端部外面のみ暗灰色を呈する。

82～89は底部である。82は復元底径6.0cmである。底部と体部の境には粘土の残余が付着する。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、底部の一部に自然釉が付着している。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。83は円盤高台をもち、復元底径7.6cm、高台の高さは0.3cmである。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、一部ナデ消される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに灰白色である。84は復元底径6.8cmであり、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。85は復元底径7.4cmであり、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。86は復元底径7.0cmであり、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、一部ナデ消される。

胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

87～89は底部に貼り付け輪高台をもつ。87は復元底径8.2cm、高台の高さは0.3cmを測り、高台は断面形態が台形を呈する。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒を少量含み、色調は内外面ともに浅黄色である。88は復元底径9.2cm、高台の高さは0.4cmである。高台はやや低く、断面形が台形を呈する。胎土は5mm以下の長石粒、角閃石粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。89は復元底径5.4cm、高台の高さは0.9cmである。高台は丁寧に貼り付けられ、断面形が方形状であり、端部は丸みをおびる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。

72、78はⅡ－1層、76、80、81、83、84はⅡ－2層、73、75、79、85、86、88、89はⅡ－3層、77、82、87はⅡ－4層から出土している。74は出土層位不明である。74、77～81、85～88は9～10世紀、72、73、75、76、82～84、89は10～11世紀に比定される。

(益田千遥)

黒色土器 (図12・13) 90～97は黒色土器A類、98～106は黒色土器B類である。いずれも器種は椀であり、焼成は良好である。

90は復元口径15.2cmであり、内湾しながら開き、上半は内面からナデ調整が施されることによりやや外反し、端部は尖り気味におさまる。内外面ともに横方向と斜め方向のミガキがみられる。内面のミガキが密であるのに対し、外面は幅の狭いミガキが口縁部から体部上半にかけて間隔をあけて施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面は明赤褐色を呈する。91は復元口径15.2cmを測り、器厚は2.5～3mm程度であり薄手に作られている。口縁部は内湾しながら開き、上半はナデ調整が施されることによりわずかに外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキがみられ、体部外面には指頭圧痕が確認される。内面は横方向と斜め方向のミガキが密であり、外面は口縁部のミガキが密で、体部のミガキには間隔がある。体部外面には種子圧痕が観察される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面は口縁部上半が黒色、下半はにぶい橙色である。92は口縁部が内湾しながら開き、上半にナデ調整が施されることによりやや外反し、端部は尖り気味におさまる。内外面ともに横方向と斜め方向のミガキがみられる。内面のミガキは密で、外面のミガキは間隔をあけて施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が黒色、外面は口縁部上半が黒色を呈し、下半は橙色である。

93～97は底部であり、輪高台が貼り付けられる。93は復元底径が9.0cm、高台の高さは0.8cmを測る。高台は断面形が三角形を呈し、粗雑に貼り付けられる。外面はナデ調整が施され、見込みのミガキは緻密である。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面はにぶい橙色を呈する。94は復元底径8.2cm、高台の高さは0.6cmである。高台は断面形態が三角形を呈し外方へ開く。体部内面は横方向のミガキが密に施され、見込みのミガキは不定方向である。外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色粒を含み、金雲母がみられ、色調は内面が黒色、外面が橙色を呈する。95は復元底径が8.5cm、高台の高さは1.6cmである。

2. 各トレンチの成果



図12 II区5トレンチ包含層出土土器2

底部の厚さは5～6mm程度と比較的厚めに作られている。高台は丁寧に貼り付けられ、「ハ」字状に開き、端部はやや外方へ張り出す。外面はナデ調整が施され、見込みのミガキは平行線状で緻密である。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒色、外面がにぶい黄橙色を呈する。96は復元底径8.0cm、高台の高さは0.6cmである。高台は断面形が三角形を呈し、若干外方へ開く。外面はナデ調整が施され、見込みには比較的間隔がある平行線状のミガキがみられる。胎土は2mm以下の長石粒と赤色粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面が橙色である。97は復元底径8.0cm、高台の高さは0.5cmを測る。高台は断面形が台形で、若干外方へ開く。外面はナデ調整が施され、見込みにはミガキが平行にやや間隔をあけて施される。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母を含み、色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。

98～106の色調はいずれも内外面ともに黒色を呈する。98～103は口縁部である。98は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。器厚は2.5～3mm程度であり、比較的薄手に作られている。内外面ともに横方向のミガキが緻密であり、口縁端部内面には明瞭な沈線が1条施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母を含む。99は口縁部がやや丸みをおびながら開き、上半はナデ調整によってやや外反し、端部は丸くおさまる。器壁は2～3mm程度と比較的薄手である。口縁端部内面には沈線が1条施され、内面のミガキは横方向で、密である。外面は口縁部上半に横方向の緻密なミガキ、下半のミガキは斜め方向でやや粗い。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、下部のみ色調が赤褐色を呈する。100は復元口径14.5cmであり、内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが密に施され、口縁端部内面には沈線が1条めぐり、ミガキの向きは横方向が主体であり、斜め方向のものも若干みられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。101はやや直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキが施され、口縁端部内面にはやや不明瞭な沈線が1条めぐり、口縁部外面はナデ調整である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられる。102は内湾気味に開き、ナデ調整により上半が外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキが密に施され、口縁端部内面には沈線が1条めぐり、胎土には金雲母がみられる。103は口縁部がやや内湾気味に開き、ナデ調整によって上半で外反する。端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキは緻密であり、内面の一部は摩滅により確認できない。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、胎土は1mm以下の長石粒を少量、金雲母を多量に含み、色調は内外面ともに黒色である。

104～106は底部であり、輪高台が貼り付けられる。104は復元底径が6.0cm、高台の高さは0.3cmを測る。高台は断面形態が三角形を呈し、内外面ともにミガキは緻密で、見込みのミガキは平行線状に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。105は復元口径5.4cm、高台の高さは0.3cmであり、断面形が三角形を呈する。内外面ともにミガキは密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。106は復元底径5.4cm、高台の高さは0.3cmを測る。高台は断面の形態が三角形を呈し、やや粗雑に貼り付けられる。ミガキは内外面ともに緻密である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。

102はⅡ－1層、90～101、103、105、106はⅡ－2層、104はⅡ－3層より出土した。90～94、

2. 各トレンチの成果

96、97は9～10世紀、95は10世紀、98～106は10～11世紀に比定される。

灰釉陶器（図13） 107は口縁部が内湾しながら開き、端部は外方へ短く屈曲し丸くおさまる。薄い釉が全面的に施され、口縁端部や外面の一部では釉が剥げている。胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。焼成は堅緻である。器形からK90号窯式期〔山下1995〕と考えられる。Ⅱ－2層から出土しており、9世紀後半に比定される。

吉備型土師器（図13） 108、109は椀である。108は口縁部であり、復元口径14.0cmを測る。口縁部は内湾しながら開き、上半がナデ調整によって外反し、端部は丸くおさまる。内面は横方向のミガキが密に施される。外面は口縁部上半の横方向のミガキは緻密であるが、下半は横方向と斜め方向のミガキがやや間隔をあけて施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。山本編年Ⅰ－3期に比定される〔山本悦1993〕。109は底部であり、復元底径7.0cm、高台の高さは0.9cmを測る。高台は「ハ」字状に開く貼り付け輪高台であり、雑に貼り付けられる。内面のミガキは緻密であり、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む、金雲母もみられ、色調は内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。山本編年のⅠ－3～Ⅱ期と考えられる。108、109はⅡ－1層より出土している。108は12世紀前半、109は12世紀代と考えられる。

瓦器（図13） 110、111は和泉型瓦器碗の口縁部である。110は内湾しながら開き、上半がナデ調整により外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向と斜め方向のミガキが比較的密に施される。胎土はきめ細かく、色調は内面が黄灰色、外面は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。和泉Ⅱ－1～2期に比定される〔橋本2018〕。111は口縁部がゆるやかに丸みをおびながら開き、上半がナデ調整によってやや外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキの間隔は広く、体部外

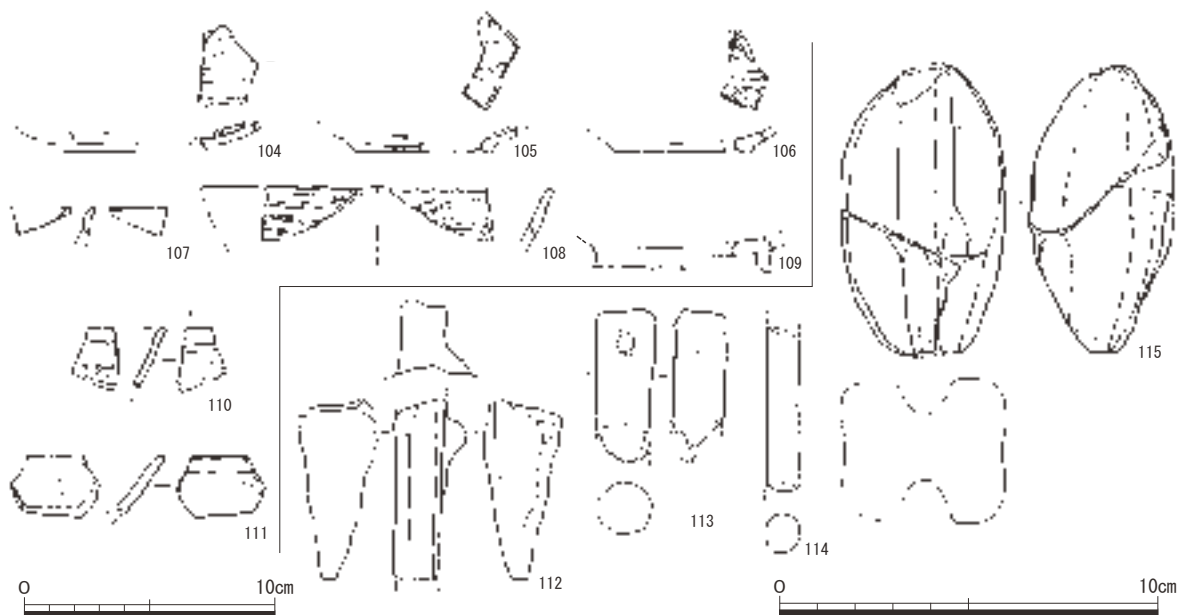


図13 Ⅱ区5トレンチ包含層出土土器・土製品

面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒や石英粒、角閃石粒を含む。燻し焼きの不良により、色調は内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。和泉Ⅱ-3期に比定される。110はⅡ-1層より出土し、111は出土層位不明である。110は12世紀前葉～中葉、111は12世紀後葉に比定される。

土製品 (図13) 112は移動式カマド、113～115は土錘である。

112は底部であり、内外面ともにナデ調整が施される。1cm程度の幅の粘土帯が焚口に沿って貼り付けられている。粘土帯の端部は強いナデ調整により段ができ、断面には刃が残る。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含む。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。

113、114は棒状土錘である。113は上端の穿孔部がのこり、現存長4.0cm、幅1.4～1.6cmであり、重量8.0gを量る。断面形は穿孔部より上部が隅丸方形、下部が円形を呈する。表面にはナデ調整の痕跡もみられ、胎土は1mm以下の長石粒、石英粒を多量に含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。114は現存長4.1cm、幅0.9cm、重量5.3gである。表面にはナデ調整の痕跡がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

115は有溝土錘である。ほぼ完形で、平面形が紡錘形、断面の形態が「H」字状を呈する。現存長7.6cm、幅4.4cmを測り、重量は116.0gである。表裏ともに長軸に沿った溝をもち、溝の断面形は「U」字状をなし、溝幅1.5cm、溝の深さは0.9cmを測る。表面にはナデ調整が施され、指頭圧痕が

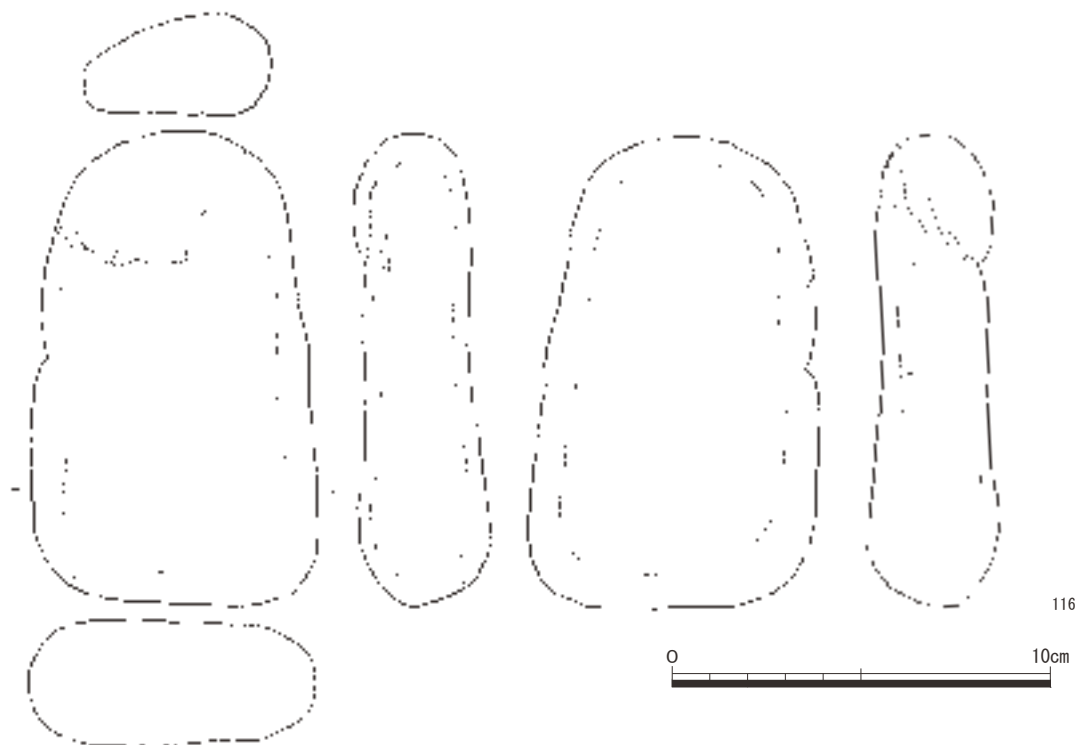


図14 Ⅱ区5トレンチ出土石器

2. 各トレンチの成果

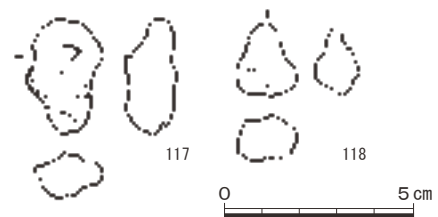
みられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられ、色調はにぶい橙色と黒褐色を呈し、焼成は良好である。

113～115はⅡ－2層、112はⅡ－3層から出土しており、112は10～11世紀と比定される。

(大塩啓一郎)

石器 (図14) 116は敲打痕をのこす礫器であり、花崗岩の亜角礫を素材とする。平面形は隅丸台形を呈し、全長12.5cm、上縁長4.9cm、下縁長7.5cmを測る。周囲が厚く、中央部がやや薄い。礫の四隅に敲打痕がのこされており、上縁右角と下縁右角の敲打痕が顕著である。周囲に薄い煤の付着が観察される。重量は521.0gである。Ⅱ－2層より出土した。

鍛冶関連遺物 (図15) 117と118は鉄塊系遺物である。溶脱が進行しており、軽く、表面には細かい亀裂がみられる。117は現存長3.1cm、最大幅1.8cm、厚さ1.30cmであり、重量は8.6gを量る。118は現存長2.0cm、最大幅1.6cm、厚さ1.25cmであり、重量は4.5gを量る。Ⅱ－3層から出土した。



(ブズレン・サミ) 図15 Ⅱ区5トレンチ出土鍛冶関連遺物

(2) 17トレンチ (図16)

第9次・第10次調査で明らかになった縄文時代の包含層の広がりをつめるために第11次調査において設定された。4トレンチの50cm南側に設定され、南北2m、東西4mのトレンチである。第11次調査では、Ⅱ－3層まで順次掘り下げた後、トレンチ西壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定してⅡ－4層を掘り下げ、Ⅲ層上面を確認した。今年度の調査ではⅡ－4層の掘り下げを開始し、Ⅳ－1層まで順に掘り下げた後、トレンチ北壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定してⅣ－2層まで掘り下げ、地表から約1.4m、標高1.45mのレベルで発掘を停止した。Ⅱ層、Ⅲ層で遺構が検出されているが、遺構内に棲痕が集中する傾向があり、遺構の輪郭の把握が容易ではなかった。したがって壁面で確認した遺構も少なくない。

土層は表土を含めて4つに分層され、各層は細分される。Ⅰ層は表土であり、Ⅰa、Ⅰbに分層される。Ⅰa層はにぶい黄褐色を呈し、細礫と極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は9～29cmを測り、ほぼ水平に堆積している。Ⅰb層はにぶい黄褐色を呈し、中礫から大礫を多く含む粗粒砂と極粗粒砂を主体とする。層厚は1～15cmであり、西から東に向かって薄くなる。Ⅱ層は4層に細分され、Ⅱ－1層は黒褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は2～21cmであり、南から北に向かってゆるやかに傾斜する。Ⅰb層からⅡ－2層にかけて攪乱坑D1、D2が検出された。Ⅱ－2層は暗褐色を呈し、細粒砂から中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は1～19cmであり、東から西に向かって薄くなる。4トレンチの同じ層に比べて多くの陶磁器片が出土している。Ⅱ－1層とⅡ－2層では貝が細かく破碎されており、しまりがあることから整地層と考えられる。Ⅱ－3層は暗褐色を呈し、細粒砂から中粒砂を多く含む粗粒砂を主体

とし、焼土を含む。トレンチ西側でのみ検出され、層厚は1～23cmである。Ⅱ－4層は黒褐色を呈し、粗粒砂から極粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。層厚は5～21cmを測り、炭化物をわずかに含み、部分的に焼土と粘土小塊も確認された。Ⅲ層は2層に分かれ、Ⅲ－1層はにぶい黄橙色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、炭化物を含む。芸予Ⅲ－3類〔柴田2015〕の脚台式製塩土器の脚台部片と体部片が面的に出土している。層厚は5～13cmで南東から北西に向かって傾斜しており、上層からの棲痕が無数に確認された。Ⅲ－2層は黄橙色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。西側では炭化物を多く含み、層厚は3～15cmである。Ⅳ層は2層に分かれる。いずれも花崗岩の風化砂層であり、純粋な風化層に比較してやや赤色化していることから、土壌化の影響を受けている。Ⅳ－1層はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。厚さは6～38cmであり、炭化物を少量含む。調査区の南半において縄文土器片や打製石鏃が比較的多く出土している。Ⅳ－2層は橙色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体し、炭化物を少量含む。層厚は5～13cmであり、東から西に向かって傾斜している。縄文土器は上層に比べて激減する。

各層の出土遺物の種類について概要を示すと、Ⅰa層には土師質土器、須恵器、国産陶器、土錘、Ⅰb層には土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器がある。Ⅱ－1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、土錘、青磁、Ⅱ－2層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、Ⅱ－3層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、鉄釘、Ⅱ－4層では縄文土器、古式土師器、須恵器、製塩土器、土師質土器、土錘が出土した。Ⅲ－1層では、古式土師器、製塩土器、石器剥片、Ⅲ－2層では縄文土器、古式土師器、製塩土器、打製石鏃、石器剥片が出土した。そしてⅣ－1層では早期、中期～後期の縄文土器、打製石鏃、剥片、Ⅳ－2層では早期の撚糸文土器、無文土器、石器剥片が出土している。

1号遺構

調査区東壁面南側においてⅡ－2層上面で検出されたピットである。調査区東側にも展開するため全体形は不明であるが、平面形は楕円形が想定され、底面はやや丸い。長径28cm、短径23cm、深さ38cmを測る。覆土は黄橙色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。覆土より獣骨が出土している。

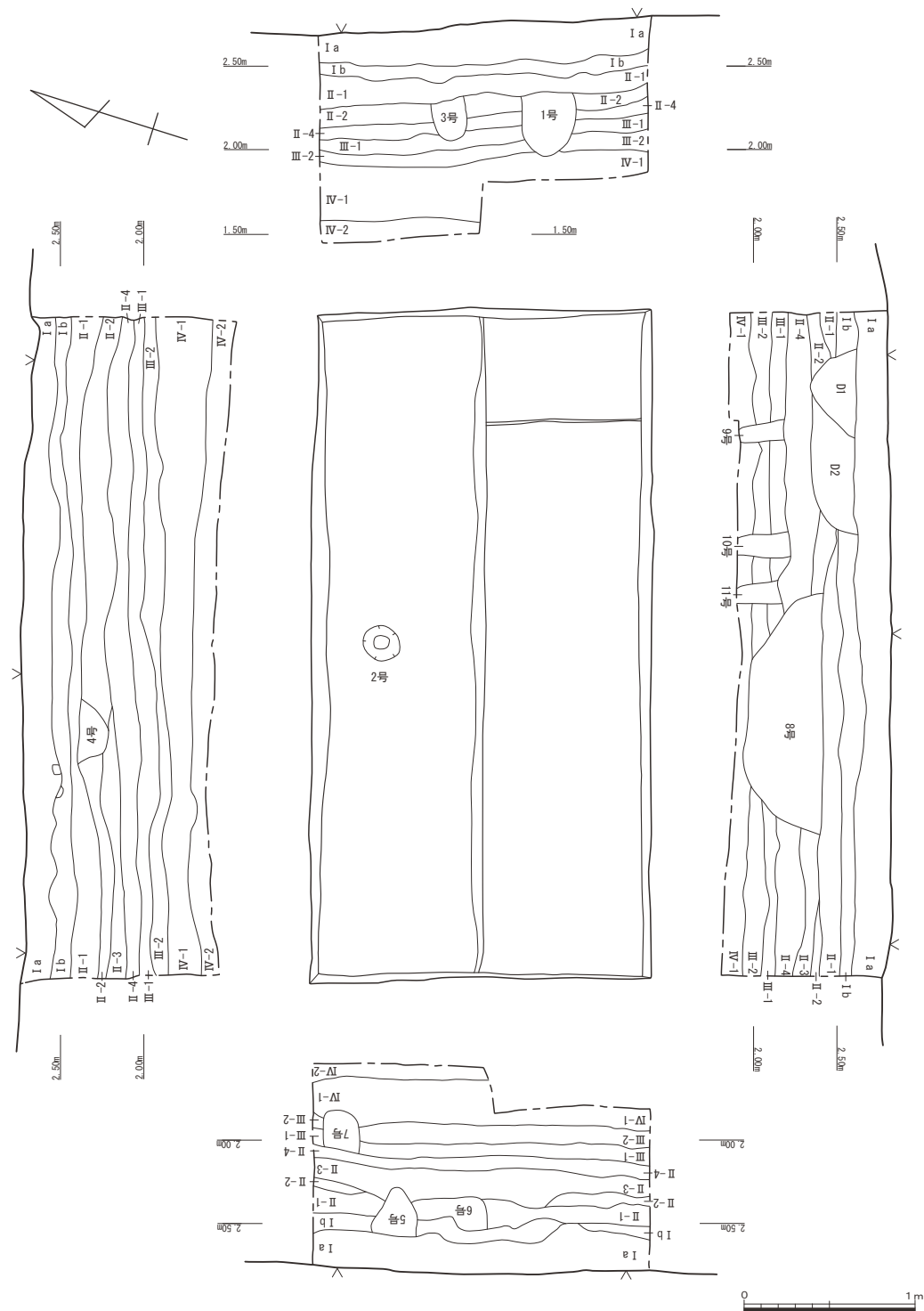
2号遺構

調査区中央北側においてⅢ－1層で検出されたピットである。長径44cm、短径37cmの不整円形を呈し、底面はやや丸く、底径14cm、深さは36cmを測る。覆土は3層に分層され、1層は黒褐色を呈し、中粒砂をまばらに含む粗粒砂を主体とする。2層は暗褐色を呈し、粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とする。しまりは弱い。土師器、須恵器、骨、貝が出土した。3層はにぶい黄橙色を呈し、中粒砂をまばらに含む粗粒砂を主体とする。0.1～0.5cmの小礫を少量含む。炭化物と剥片が出土している。

3号遺構

東壁において確認されたⅡ－2層上面からⅡ－4層にいたるピットである。上部の幅20cm、底部

2. 各トレンチの成果



I a層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂層。細礫と極粗粒砂を含む。しまりあり。 I b層：にぶい黄褐色（10YR3/3）極粗粒砂層。中礫～大礫を多く含む。粗粒砂を含む。しまりあり。 II-1層：黒褐色（7.5YR3/2）粗粒砂層。細粒砂～中粒砂を含む。しまりあり。 II-2層：暗褐色（7.5YR3/2）粗粒砂層。細粒砂～中粒砂を含む。 II-3層：暗褐色（10YR3/4）粗粒砂層。細粒砂～中粒砂を含む。焼土を含む。しまりあり。 II-4層：黒褐色（10YR2/2）中粒砂層。粗粒砂～極粗粒砂を含む。炭化物を少量、一部で焼土と粘土を含む。しまりあり。 III-1層：にぶい黄褐色（10YR7/4）粗粒砂層。極粗粒砂を含む。炭化物を含む。 III-2層：黄褐色（7.5YR8/8）粗粒砂層。極粗粒砂を含む。炭化物を含む。 IV-1層：にぶい黄褐色（10YR6/4）中粒砂層。粗粒砂を含む。炭化物を含む。 IV-2層：橙色（7.5YR6/6）中粒砂層。粗粒砂を含む。炭化物を含む。 D1・D2：攪乱。

1号遺構：黄褐色（10YR8/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。しまりあり。 2号遺構：1層：黒褐色（10YR2/3）粗粒砂主体。中粒砂を含む。しまりあり。 2層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまりあり。 3層：にぶい黄褐色（10YR6/4）粗粒砂主体。中粒砂を含む。 3号遺構：黒褐色（10YR2/2）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。2 cm程度の角礫を少量含む。しまりあり。 4号遺構：黒褐色（7.5YR2/2）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。しまりあり。 5号遺構：黄褐色（10YR5/6）中粒砂主体。極粗粒砂と粗粒砂を含む。1～3 cmの角礫を少量含む。しまりあり。 6号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂と粗粒砂、1～3 cmの角礫を少量含む。貝を含む。しまりあり。 7号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂と粗粒砂を少量含む。しまりあり。 8号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂を少量、粗粒砂を含む。しまりあり。 9号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。粗粒砂と細粒砂を含む。しまりあり。 10号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。粗粒砂を含む。1 cm程度の角礫を少量含む。 11号遺構：黒褐色（7.5YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂を含む。1 cm程度の角礫を少量含む。

図16 II区17トレンチ平面図・土層図

幅12cm、深さは24cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、2cm程度の角礫を少量含む。遺物の出土はない。

4号遺構

北壁中央付近においてⅡ－2層で確認された土坑である。上部の幅32cm、底部の幅12cm、深さ18cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。遺物の出土はない。

5号遺構

西壁において確認されたⅠb層からⅡ－3層にいたるピットである。上部の幅21cm、底部の幅5cm、深さは21cmを測る。覆土は黄褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とする。1～3cmの角礫と貝をまばらに含む。

6号遺構

西壁中央付近においてⅡ－1層で確認されたピットである。5号遺構に切られているため全体形は明らかではないが、上部の幅、底部の幅ともに42cm、深さは20cmである。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。1～3cmの角礫をまばらに含む。遺物は出土していない。

7号遺構

西壁においてⅢ－1層からⅣ－1層にかけて検出されたピットである。上部の幅21cm、底部の幅13cm、深さは23cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

8号遺構

南壁において確認されたⅡ－2層からⅢ－2層にいたる土坑である。断面形は半円を呈し、上部の幅142cm、底部の幅55cm、深さは48cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。1cm程度の角礫を少量含む。遺物の出土はない。

9号遺構

南壁においてⅢ－1層からⅣ－1層にかけて確認されたピットである。上部の幅13cm、底部の幅8cm、深さは26cmである。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

10号遺構

南壁において確認されたⅢ－1層からⅣ－1層にいたるピットである。上部の幅17cm、底部の幅10cm、深さは30cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂と細粒砂を含む中粒砂を主体とする。遺物の出土はない。

11号遺構

南壁において確認されたⅢ－1層からⅣ－1層にいたるピットである。上部の幅14cm、底部の幅9cm、深さは26cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。1cm程度の角礫を少量含む。遺物は出土していない。

(古江七海)

2. 各トレンチの成果

出土遺物

縄文土器 (図17・18) 119～121はⅣ－2層、122～167はⅣ－1層から出土した。

119～121は撚糸文土器であり、胎土はきめ細かく、長石・石英・金雲母・角閃石粉を含み、色調はにぶい黄褐色を呈し、厚さは4～8mmである。撚糸文は細く、間隔も狭い。119、121は原体によって条痕様の文様が施され、部分的にナデ消されている。122は口縁部であり、内湾しながら立ち上がる。内外面ともに丁寧にナデられており、単節RL縄文が施されている。胎土には長石粒、角閃石・金雲母粉を含む。外面は灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、厚さ6mmを測る。123、125～131は無節Rの太く、間隔を取った撚糸文が施された胴部片であり、灰黄褐色で、厚さは4.5～7mmを測る。125、129がゆるやかに外湾し、127、128が内湾することからキャリパー形の器形を復元できる。125の上縁には補修孔の一部が確認される。124は山形の突起部を有する口縁部であり、口唇部はやや肥厚している。口唇部には表裏ともに縄文があり、口唇端部には二枚貝の殻頂による押圧文が認められる。胎土はきめ細かく、長石・石英・角閃石・金雲母粒を含み、にぶい黄橙色を呈し、厚さ7mmである。132は5トレンチの6の同一個体と考えられ、復元口径は26.2cmを測る。縄文は単節RLで、内面は丁寧にナデ調整されている。133、134は内外面に爪形の押引文を有する口縁部であり、施文部位、文様の幅は異なる。135は口縁部であり、口唇部に幅の狭い爪形の押引文があり、口唇部から斜めに下垂する粘土帯を貼り付け、そこにも爪形の押引文が施されている。胎土はきめ細かく、長石・角閃石・金雲母粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、厚さ4～6.5mmである。136、137はわずかに内湾しながら立ち上がる口縁部であり、口唇部から1.5cm下に突帯があり、その上下に刺突文が施されている。胎土には長石・石英・角閃石粒、金雲母粒を含み、橙色を呈し、厚さは3.5～8mmである。138は端部がやや肥厚した口縁部であり、その直下に深い刺突文がみられる。胎土はきめ細かく、長石・石英・角閃石粒、金雲母粉を含み、橙色を呈し、厚さは6～7mmを測る。139は単節LRの縄文地に横方向と斜め方向の断面逆三角形の突帯が貼り付けられている。胎土には長石・石英・角閃石粒、金雲母粉を多く含み、色調はにぶい橙色を呈し、厚さは6mmである。140、141は縄文を地文に3条の平行沈線を有する。胎土には長石粒、角閃石・金雲母粉を含み、にぶい黄橙色を呈する。厚さは3～4mmである。142は単節RLの縄文地に連続刺突文が施され、内面には巻貝による横方向の条痕がみられる。胎土は長石・石英粒・角閃石粒、金雲母粉を含み、にぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈し、厚さは5～6.5mmである。143～147は幅、間隔ともに狭い撚糸文をもつ土器片であり、144、145は条痕様の文様となっている。胎土は長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、色調はにぶい黄橙色を呈しており、厚さは4mm～6.5mmである。123、125～131とは文様の大きさ、間隔、色調が異なっている。148は外面が条痕文、内面が条痕文がナデ消され、指頭圧痕をのこしている。胎土は長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、外面はにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈し、厚さは4mmを測る。149は内外面ともに巻貝による条痕が認められ、胎土は長石粒、角閃石・金雲母粉を含み、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈し、厚さは5～7mmである。150はやや上げ底の底部であり、単節LRの粗い縄文をのこす外面は大きく剥落している。胎土には長石・石英・金雲母粒、角閃石粉が



図17 II区17トレンチ出土縄文土器 1

2. 各トレンチの成果

含まれ、色調は外面はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈し、厚さは4～5.5mmを測る。

151～160は沈線文土器である。沈線は、表面がなめらかで断面が弧状を呈するもの（151～158）と浅く、底が平坦なもの（159、160）とがあり、色調も前者が黄橙色ないしは橙色であるのに対し、後者は赤褐色で、器壁も後者の方が薄い。153は沈線の幅が不定であり、その底には多くの筋をのこす。いずれも丁寧に磨かれており、胎土はきめ細かく、長石粒・石英粒、角閃石・金雲母粉を含む。161は外面が丁寧に磨かれ、斜め方向の細い沈線が描かれ、内面には巻貝による横方向の

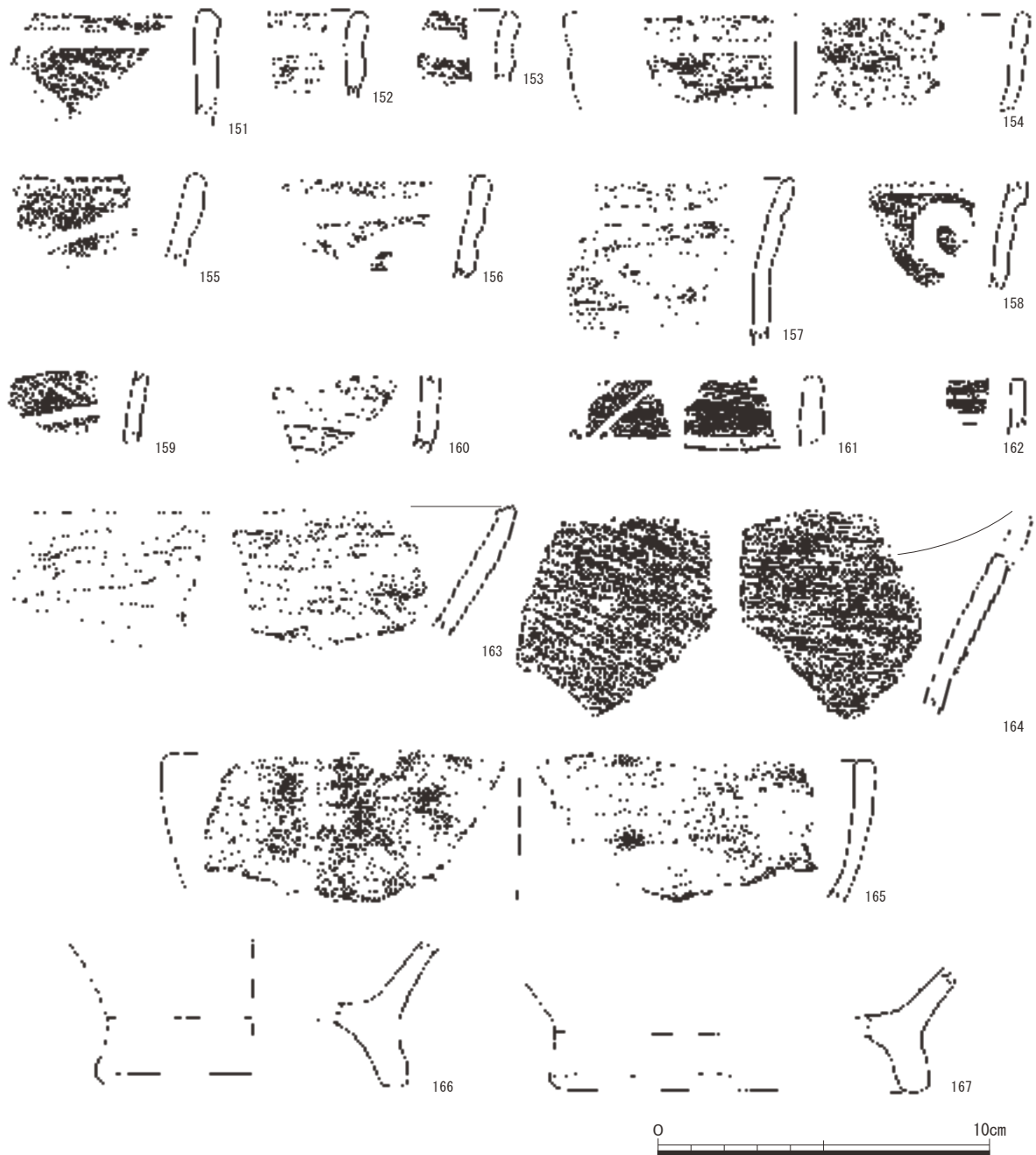


図18 II区17トレンチ出土縄文土器 2

条痕がみられる。胎土には長石粒、金雲母・角閃石粉を含み、外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈し、厚さ7mmを測る。162は丁寧に磨かれた口縁部片であり、2条の沈線が施されている。上段の沈線は浅く、底には細かい連続刺突文がみられる。胎土はきめ細かく、長石粒・角閃石粒、金雲母粒を含み、色調は内外面ともに橙色を呈し、厚さは4mmである。163は深鉢の口縁部であり、内湾しながらやや外側に開き、口唇部は内側にわずかに突出する。外面は横方向の条痕調整のあと、ナデ調整が施され、内面は丁寧に研磨されている。胎土には長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、外面はにぶい黄色、内面は橙色を呈し、厚さは5～7mmである。164は波状口縁の破片であり、内外面ともに巻貝による条痕がみられ、外面はややナデ消されている。胎土は長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、内外面ともににぶい黄橙色を呈し、厚さ6mmを測る。165は浅鉢の口縁部であり、口唇端部まで丁寧に磨かれている。復元口径は20.8cmである。胎土は長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈し、厚さは4～6mmである。166、167は高い高台をもつ底部であり、底径はそれぞれ9.3cm、11.3cmに復元される。166は外面に斜め方向の条痕調整後、ナデられ、167は外面にナデ調整、内面に細い条痕がみられる。いずれも胎土は長石・石英粒、角閃石・金雲母粉を含み、色調は166が明褐色、167がにぶい黄褐色を呈する。胴部の厚さはそれぞれ6mm、8mmであり、高台の厚みはいずれも10mmを測る。

122、124は船元Ⅰ式、132～139、142は船元Ⅱ式、123、125～131は里木Ⅱ式と考えられ、162～167は後期前半の時期が想定される。

(古江七海、益田千遥)

石器 (図19) 三角形凹基式の打製石鏃4点であり、いずれも完形品である。石材は安山岩であり、170がやや黒みを帯びている以外は灰色を呈している。168、169は全長と幅が近い小型の石鏃であり、脚の長さが異なり、非対称形である。いずれも広い剥離によって整形され、細部の刃部調整がみられない。168は全長1.68cm、幅1.42cm、厚さ0.30cm、重量0.70gであり、169は全長1.70cm、幅1.33cm、厚さ0.23cm、重量0.55gを測る。170はわずかに反りがあり、一面には素材面を広くのこし、刃部の調整剥離のない部分もある。全長2.32cm、幅1.10cm、厚さ0.21cm、重量0.45gである。171も一面に素材面を広くのこしている。全長2.40cm、幅1.70cm、厚さ0.23cm、重量1.08gを測る。すべてⅣ-1層より出土している。

(村上恭通)



図19 Ⅱ区17トレンチ出土石器

2. 各トレンチの成果

古墳時代～中世

脚台式製塩土器（図20） 172～177は脚台部、178、179は口縁部、180、181は鉢部であり、焼成は全て良好である。

172～177はいずれも内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。172は底径の最大値が2.9cmを測る。厚みは均一ではなく、脚台は端部にかけて先細りし、一部は歪みながら内側に折れ曲がっている。器面は滑らかであり、胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を少量含む。色調は鉢部が橙色とにぶい橙色、脚台の外面がにぶい橙色、内面が橙色である。173は復元底径3.0cmを測る。脚台は端部にかけて先細りし、端部は丸くおさまる。胎土は5mm以下の長石粒、3mm以下の石英粒、赤色粒を多量に含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。174は底径2.9cmを測る。脚台端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。175は復元底径2.5cmを測り、脚台端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、色調は内外面ともに橙色である。176は復元底径2.3cmを測り、脚台端部は先細りする。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。177は復元底径2.3cmを測る。丁寧に作られており、脚台部は直線的に下方へ開き、脚台端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともに橙色を呈する。177は充填技法により製作されている。

178～181は器壁が平均約2mmと比較的薄い。178は内面に丁寧なナデ調整が施され、平滑に仕上げられる。外面にはタタキが施される。胎土は1mm以下の長石粒と2mm以下の石英粒を少量含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともににぶい橙色で、外面の一部は明赤褐色を呈する。179は胎土に1mm程度の長石粒を少量、角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともにに

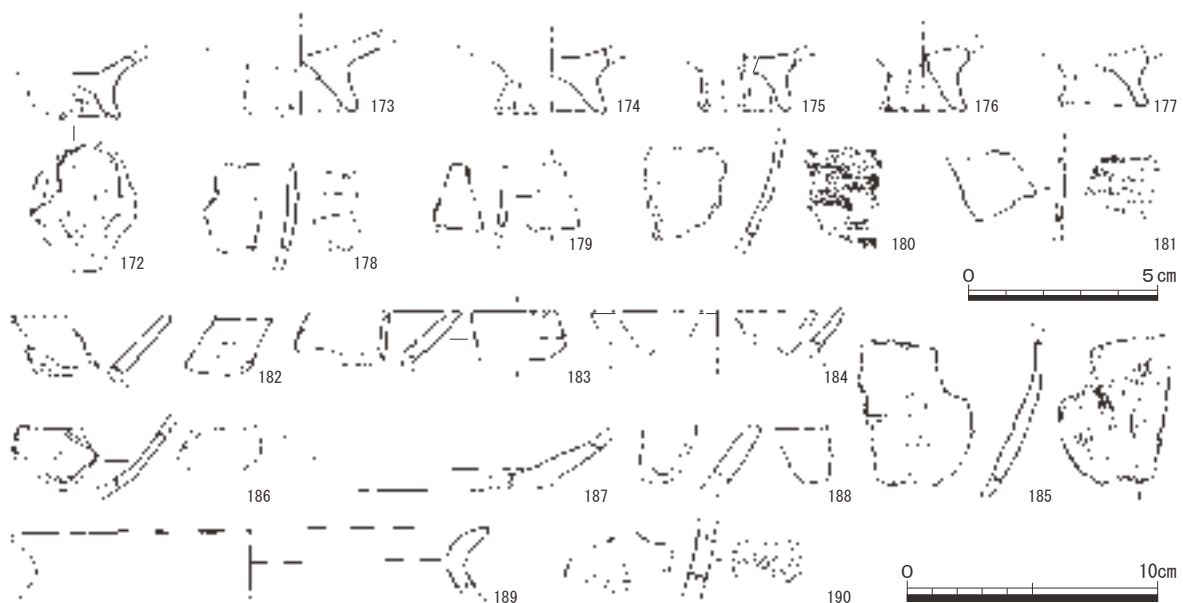


図20 II区17トレンチ出土土器

ぶい橙色である。180は内面に板状工具によるナデ調整が施され、指頭圧痕をのこし、外面にはタタキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色である。181は内面にナデ調整が施され、外面にタタキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

172、174～177はⅢ－2層、173、178～181はⅡ－4層から出土した。いずれも柴田編年の芸予Ⅲ－3類〔柴田2015〕である。

(伴井嘉正)

古式土師器 (図20) 182は甕、183～185は鉢、186は器種不明であり、焼成はいずれも良好である。

182は口縁部であり、外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。内面は斜め方向と横方向のハケメが施されたのちナデ調整され、器表が平滑に仕上げられている。外面は横方向のハケメが施されたのち、その上からナデ調整がなされている。外面には煤の付着が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。183は小型丸底鉢の口縁部である。口縁部は中ほどが肥厚しながら外方に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面には煤が付着する。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄褐色を呈す。184も小型丸底鉢の口縁部であり、復元口径は10.0cmを測る。口縁部は外方へ若干内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色粒を多量に含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面は橙色を呈する。185は精製の小型鉢の胴部であり、内面は上部に板状工具を用いたハケメがみられ、下部にはナデ調整が3条施される。外面には全体的にハケメが施されたのち、ナデ調整がなされる。内外面ともに赤色顔料が確認でき、外面には煤が付着している。胎土は4mm以下の長石粒と1mm程度の石英粒、角閃石粒、赤色粒を多量に含み、色調は内面が橙色、外面はにぶい橙色を呈する。186は胴部であり、器種は不明である。胴部下半はゆるやかに屈曲している。内面には二枚貝による条痕が確認され、外面にはナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。柴田編年の芸予型製塩土器のⅣ類に該当する可能性がある〔柴田2015〕。

182、184はⅢ－2層、183、185はⅡ－4層、186は2号遺構－2層から出土している。182～185は布留0式～1式の範疇で捉えられる。

(永田 櫨)

土師質土器 (図20) 187は杯、188～190は甕である。焼成はいずれも良好である。

187は底部であり、復元底径7.8cmを測る。内外面ともにナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。胎土は1mm程度の石英粒を少量、角閃石粒を多量に含み、金雲母がみられる。色調は内面が浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。188は口縁部であ

2. 各トレンチの成果

り、ほぼ直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と1mm以下の角閃石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに橙色を呈する。189も口縁部であり、復元口径19.0cmを測る。「く」字状に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、内面のナデ調整は丁寧であり、平滑に仕上げられている。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含み、金雲母もみられ、色調は内面がにぶい褐色、外面は黒褐色を呈する。焼成は良好であり、よく焼き締められている。190は体部であり、外面には斜め方向のハケメが施される。内面には炭化物の付着がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母がみられ、色調は内面が黒褐色、外面は暗灰黄色である。

189はI b層、187はII - 2層、188はIII - 1層、190は2号遺構 - 2層から出土した。188～190は10～11世紀、187は12世紀と考えられる。

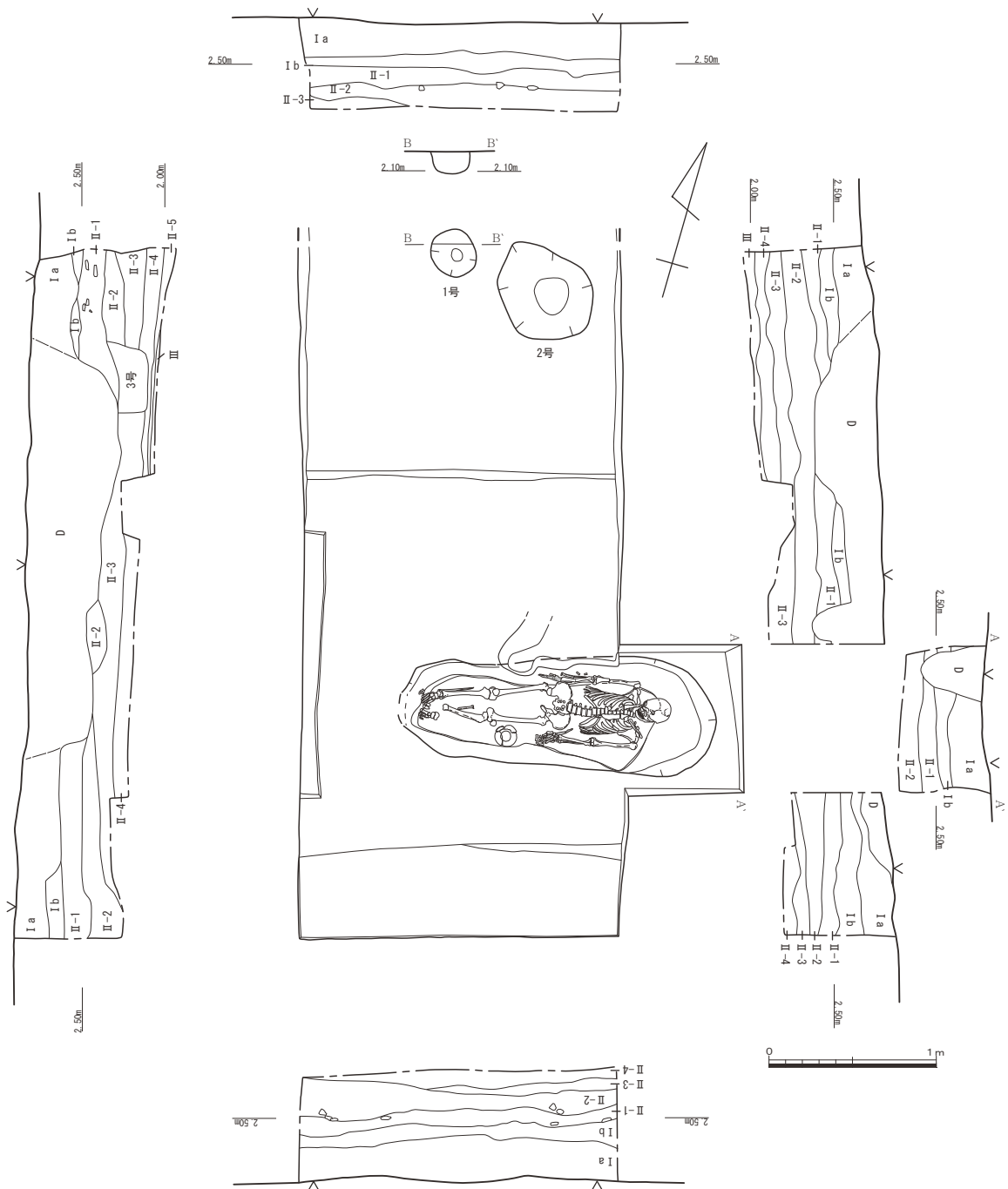
(伴井嘉正)

(3) 18トレンチ (図21・22)

第11次調査までに明らかになった縄文時代包含層の西への広がりを確認するために設定されたトレンチである。5トレンチの南に接し、17トレンチの西側に設定された南北4.2m、東西2.0mの規模である。当初、5トレンチとの間に設けていた0.5mのベルトは、調査の安全性を考慮し除去した。また調査区の中央からやや南寄りで人骨が検出されたため、トレンチ南東隅の基準点から北へ1.8mのポイントを基点に南北0.9m、東西0.7m拡張した。人骨の調査に時間を要したため、その完掘後、掘り下げを停止した。

I層は表土であり、I a、I bに分層される。I a層はにぶい黄褐色を呈し、小礫と極粗粒砂を含んだ粗粒砂を主体とし、層厚は20～30cmを測る。I b層は暗赤褐色を呈し、小礫から中礫大の角礫・亜角礫を含む粗粒砂を主体としており、層厚は10～15cmである。II層は5層に分かれ、II - 1層は黒褐色を呈し、小礫から中礫大の角礫を含む粗粒砂を主体としており、層厚は10～15cmを測る。II - 2層は暗褐色を呈し、細粒砂から中粒砂を含む粗粒砂を主体としており、貝類を多く含む。層厚は10～20cmであり、I層から本層までは南から北へ約2～3度緩やかに傾斜している。II - 3層は暗褐色を呈し、細粒砂から中粒砂を多く含む粗粒砂を主体としており、層厚は10～15cmである。調査区南側で厚みを減じ、途切れる箇所もある。本層の上面で1号墓を検出した。II - 4層は黒褐色を呈し、極粗粒砂から粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は5～10cmを測る。II - 5層は調査区北側中央部から西にかけて確認され、一部5トレンチに及んでいる。褐色を呈し、強い粘性の粗粒砂を主体とし、厚さは2～5cmと薄く、北に向けて厚みを増す。本層では古代の製塩土器の小片が面的かつ密に検出された。今回の発掘調査ではじめて検出された包含層である。上面を確認したIII層は明黄褐色を呈し、中粒砂、小礫を多く含む粗粒砂主体である。

各層の主な出土遺物は以下の通りである。I a層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、陶磁器、鉄製品、I b層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土した。II - 1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、土錘、鉄製品、II - 2層では製塩



I a層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂主体。小礫と極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性なし。 I b層：暗赤褐色（5YR3/3）粗粒砂主体。小礫～中礫（亜角・角礫）を含む。しまりあり。粘性ややあり。 II-1層：黒褐色（7.5YR3/1）粗粒砂主体。小礫～中礫（角礫）を含む。しまりあり。粘性あり。 II-2層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。中礫をやや含む。貝を多く含む。しまりあり。粘性あり。 II-3層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。しまりあり。粘性なし。 II-4層：黒褐色（10YR2/2）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性あり。 II-5層：褐色（10YR4/4）粗粒砂主体。しまりあり。粘性強い。 III層：明黄褐色（10YR 6/6）粗粒砂主体。中粒砂を多く含む。中礫を多く含む。しまりなし。粘性なし。 D：攪乱。
 1号遺構：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。中粒砂を含む。黄褐色（10YR5/6）粗粒砂ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。
 3号遺構：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂主体。中礫を含む。中粒砂を多く含む。しまりあり。粘性あり。

図21 II区18トレンチ平面図・土層図

2. 各トレンチの成果

土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、陶磁器、移動式カマド、鉄製品、Ⅱ－3層では製塩土器、土師質土器、須恵器、陶磁器、移動式カマド、鉄製品、鍛冶関連遺物（鉄滓・鍛造剥片）、Ⅱ－4層では古式土師器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、移動式カマド、Ⅱ－5層では古式土師器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器が出土している。

1号墓（図22）

Ⅱ－3層上面で墓坑が検出され、ほぼ完存の人骨1体が検出された。墓坑は略楕円形であり、頭部のある東に広く、西で狭い。全長は190cmであり、幅は最大で70cm、最小で57cmを測る。検出面から墓坑底までは12cmであり、ほぼ水平であるが、大腿骨より西に向けて約6度緩やかに立ち上がる。

人骨は頭位をN-60°-Eにもつ仰臥伸展葬である。その検出時は、左脛骨のみ検出面よりも突出した状態であった。人骨を全体的に検出した結果、浮き上がった左脛骨の骨端が削られており、寛骨の恥骨付近が一部欠損し、さらに右中手骨に乱れが著しいことが判明した。これらのことから、骨化後、左足から右手にかけての力が加わった可能性が想定される。木棺については、その存在を積極的に評価する証拠はみられなかった。

人骨に接して鉄刀子2点（192、193）が出土し、左大腿骨付近で土師質土器の杯が検出された。鉄刀子は1点（192）が左手直下で切先を頭部に向けて出土し、別の1点（193）が右手付近で茎を頭部に向けて出土した。右手は尺骨より先が原位置を留めていないため詳細な状況は不明であるが、手骨が193の上にあったと想定される。杯は左大腿骨から3cm離れて検出され、口縁部を上にした状態で出土した。完形であるが、口縁部の一部には打ちかきがみられる。また墓坑埋土から古式土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、鉄製品が出土している。

1号遺構

トレンチ北側中央部で検出されたピットで、Ⅲ層に掘り込まれている。円形を呈し、直径は30cm、深さ12cmを測る。覆土は1層であり、暗褐色を呈し、中粒砂と黄褐色粗粒砂ブロックを含む粗粒砂を主体としている。遺物として砥石（208）がある。なお、本ピットは半裁後、断面を確認して保存した。

2号遺構

1号遺構の東に近接し、Ⅲ層に掘り込まれた不整円形のピットである。長径62cm、短径50cm、深さ27cmである。遺物は出土していない。

3号遺構

トレンチ西壁北側で検出されたピットであり、円形の直径40cm、深さ15cmを測る。Ⅱ－2層に掘り込まれており、覆土は1層で、黒褐色を呈し、中礫を含む粗粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

（松澤樹生）

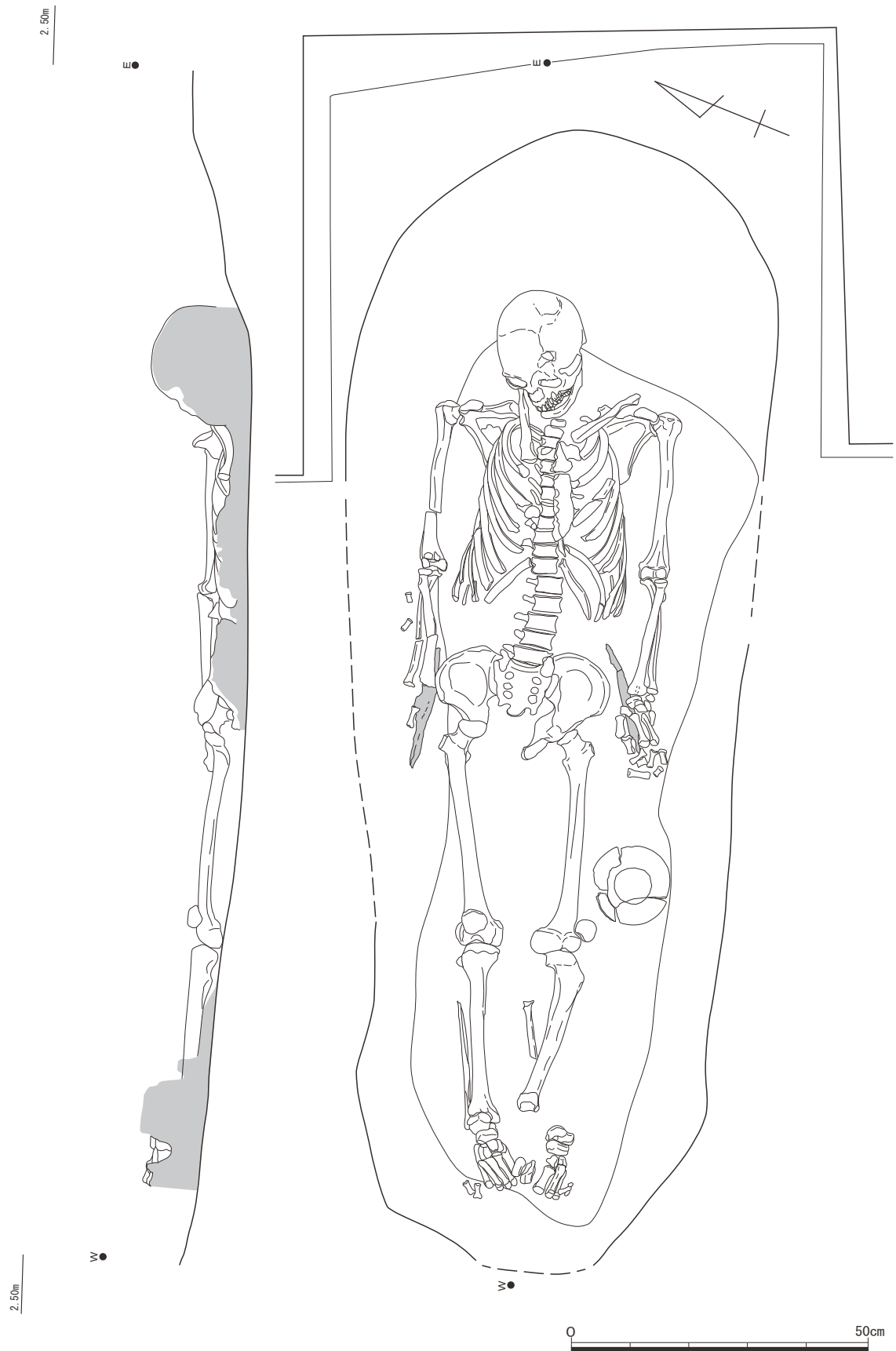


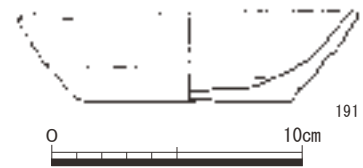
図22 II区18トレンチ1号墓平面図・断面図

2. 各トレンチの成果

出土遺物

1号墓副葬品

土師質土器（図23） 191は完形の杯である。口径13.5cm、器高3.6cm、底径8.4cmを測る。口縁部は若干内湾しながら外方へ開き、端部はやや平坦面をもつ。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部は回転ヘラ切り技法によって切り



離されたのち、切り離し痕を丁寧にナデ消している。また底部にはスノコ痕がみられる。口縁部には内面からの打ち欠き痕が認められる。胎土は2mm以下の角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色と暗褐色を呈し、焼成は良好で、焼き締まりが良い。時期は12世紀前半ごろと考えられる。

（大塩啓一郎）

鉄器（図24） 192と193は両関式の刀子である。192は完形品であり、全長20.1cm、最大幅は関部で1.60cmを測る。刀身は長さ16.0cmで長細く、緩やかに幅を広げながら関にいたる。茎部は端部に向けて細くなり、その断面は長方形である。柄木の痕跡をのこすものの、目釘孔は認められない。厚さは関部で0.35cm、茎部で0.30cmを測る。193は切先先端と茎端部を欠いており、現存長は19.9cmである。直線的な棟と刃の長さはそれぞれ11.8cm、11.7cmとほぼ同じであり、刀身は二等辺三角形を呈する。一面の棟に沿って、関から伸びる樋が削られている。樋は全長5.0cm、幅0.8cm、深さ1.5mmを測り、その断面形は緩やかに弧を描く。茎部の現存長は8.2cm、幅1.2cmであり、柄木の痕跡をのこす。直径2.5mmの目釘穴が2箇所に通っているが、目釘は遺存しておらず、木製であった可能性が高い。棟の幅は関部付近で6mmと広く、茎部で幅を減じて3mmとなる。刀身の形態から刮小刀の一種と考えられる。

（ブズレン・サミ）

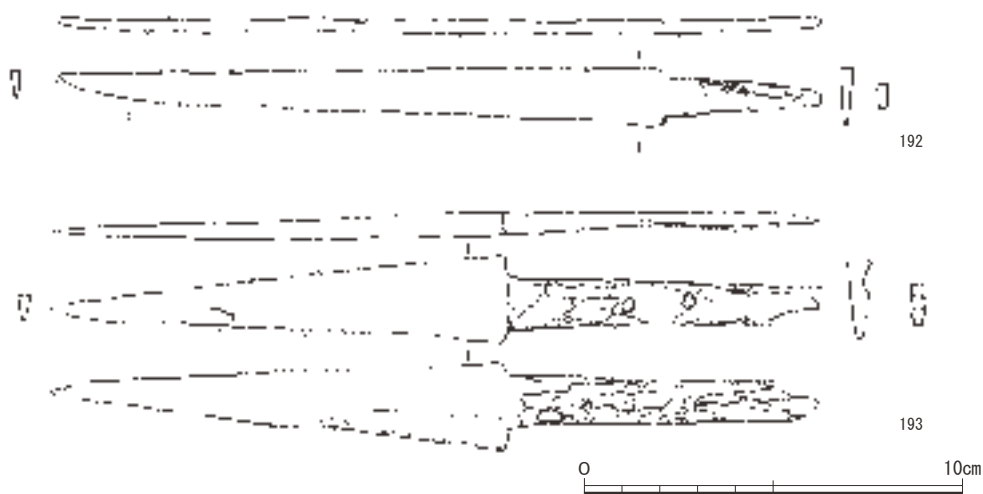


図24 II区18トレンチ1号墓副葬品2

1号墓埋土

古式土師器 (図25) 194は甕の口縁部である。内外面ともにハケメがみられ、その上からナデ調整が施される。色調は内面がにぶい赤褐色、外面はにぶい褐色を呈する。1mm程度の長石粒が少量と金雲母を含み、焼成は良好である。器壁の厚さと口縁部の形状から布留0式～1式の範疇で捉えられる。195は高坏の坏部から脚柱部である。坏底部からゆるやかに立ち上がり、若干内湾している。内外面ともにナデ調整が施される。坏底部には指頭圧痕がみられ、その上からナデ調整が施される。充填の痕跡はみられず、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4mm以下の長石粒と2mm以下の石英粒を含み、金雲母がみられる。焼成は良好である。器壁の厚さと口縁部の形状から布留2式に比定される。

土師質土器 (図25) 196～198は杯である。196は口縁部であり、復元口径は13.4cmを測る。体部中ほどに屈曲点をもち、口縁部はやや直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土には金雲母がみられる。色調は内面がにぶい赤褐色、外面はにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。197は底部であり、復元底径7.4cmである。内外面ともにナデ調整が施されており、底部は回転糸切りによって切り離されている。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、焼成は良好であり、内面は灰白色、外面は明赤褐色を呈する。198は底部であり、復元底径は7.6cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施されており、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。1mm程度の長石粒と赤色粒を含み、色調は内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

199、200は鍋または甕である。199は口縁部であり、ほぼ直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と3mm程度の石英粒、角閃石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好である。200は胴部であり、内面にはナデ調整が施されており、指頭圧痕がみられる。外面は縦方向のハケメが密に施される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

196は9～10世紀、198、199は10～11世紀、197、200は12世紀と考えられる。

須恵器 (図25) 201～204は杯である。いずれも焼成は堅緻である。

201は口縁部であり、外方へ内湾しながら開いたのち、上方で肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。202も口縁部であり、若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含む。色調は内面が灰白色、外面は灰白色と灰色を呈し、203も口縁部であり、内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。204は底部であり、復元底径は7.2cmを測る。体部の下半には成形時か底部の切り離し時に生じたと想定される段がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部は回転ヘラ切りにより切り離される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。201～204はいずれも9～10世紀に比定される。

2. 各トレンチの成果

黒色土器（図25） 205～207は口縁部であり、いずれも焼成は良好である。

205は黒色土器A類碗であり、口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキがみられ、内面のミガキは密であり、外面はミガキの上からナデ調整が施されている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面はにぶい橙色を呈する。

206、207は黒色土器B類碗である。206は口縁部が上半にナデ調整が施されることでやや外反し、口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面に沈線が1条めぐり、内外面ともに横方向のミガキが密に施されている。胎土には金雲母を含み、内外面ともに暗灰色を呈する。207は口縁部が外方に丸みをおびながら開く。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、内外面ともにナデ調整が施され、横方向のミガキもみられる。胎土は1mm程度の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに黒色を呈する。

205は9～10世紀、206、207は10～11世紀に比定される。

（藤田一希）

1号遺構

石器（図26） 208は砥石の破片であり、略方形を呈しており、現存長7.0cm、現存幅7.0cm、厚さ3.6cmで、重量は376.5gを測る。花崗岩の板状の礫を素材とする。一面に節理面をのこし、両面ともに使用痕が認められる。

（ブズレン・サミ）

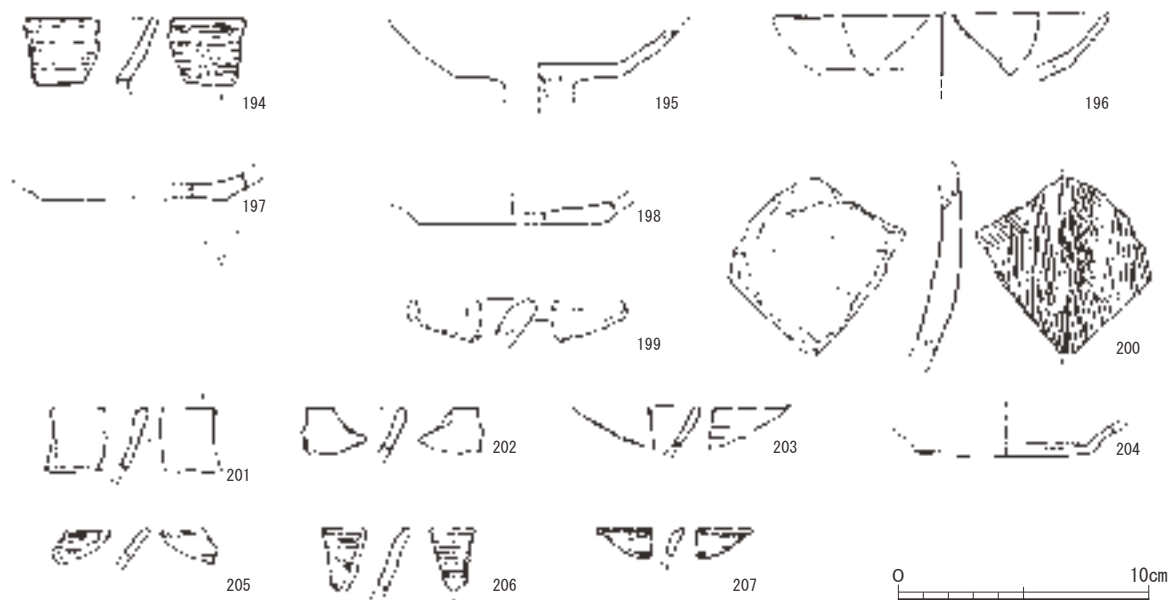


図25 II区18トレンチ1号墓埋土出土土器

包含層

脚台式製塩土器 (図27)

209～220は脚台式製塩土器の脚部である。いずれも焼成は良好であり、柴田編年の芸予Ⅲ-3類に比定される〔柴田2015〕。

209は復元底径2.9cmであり、内外面ともにナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、赤色粒を含み、色調は内面が

橙色、外面が黄橙色を呈する。210は復元底径2.2cmであり、内外面ともにナデ調整が施され、外面は顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められる。211は復元底径2.2cmであり、内外面ともにナデ調整がみられ、外面には顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられ、内面はにぶい橙色、外面は橙色を呈する。212は復元底径2.4cmであり、内面はナデ調整、外面は指頭圧痕が認められる。内面は剥離している。脚台の成形時には粘土が3度にわたり施されたとみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、内面は黒褐色、外面は橙色を呈する。213は復元底径2.0cmであり、内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。内面は剥離している。胎土は3mm程度の長石粒と石英粒を含み、色調は内面が橙色、外面が灰白色を呈する。214は復元底径2.2cmであり、外面は指頭圧痕が認められる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。215は復元底径2.2cmであり、内面はナデ調整が施され、外面は指頭圧痕が認められる。胎土は精緻であり、金雲母を含み、色調は内面は黄灰色、外面は褐灰色を呈する。216は底径1.9cmであり、内外面ともにナデ調整が施され、外面は顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、色調は内面は赤褐色、外面は明赤褐色を呈する。217は底径2.2cmであり、内外面ともにナデ調整がみられ、外面全体に指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒をまば

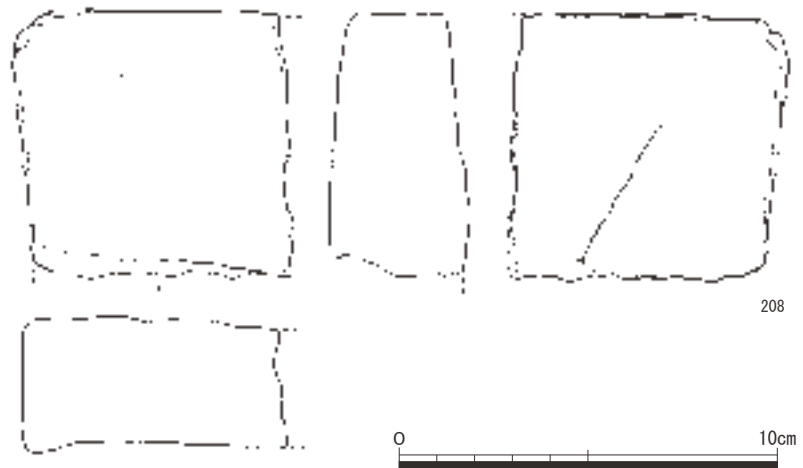


図26 II区18トレンチ1号遺構出土石器

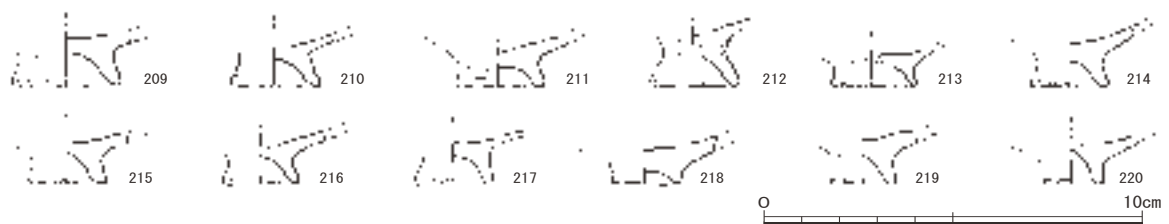


図27 II区18トレンチ出土脚台式製塩土器

2. 各トレンチの成果

らに含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。218は底径1.8cmで、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められる。219は復元底径1.8cmであり、内面は丁寧なナデ調整が認められ、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。220は底径1.2cmであり、内外面ともにナデ調整が施され、外面は顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒をまばらに含み、色調は内面はにぶい橙色、外面は橙色を呈する。外面に二次的被熱の痕跡が認められる。

210～212、215、216はⅡ－2層、213、218はⅡ－3層、214、217はⅡ－4層、209、219はⅡ－5層より出土し、220は出土層位不明である。

(福本佳織)

古式土師器 (図28) 221～223は鉢、224は器台であり、焼成はいずれも良好である。

221は小型丸底鉢の口縁部であり、復元口径12.0cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内面は斜め方向のハケメがみられ、その上からナデ調整が施され、外面はナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。222は精製の小型丸底鉢の口縁部であり、直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面には赤色顔料の付着が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。223は精製の小型丸底鉢の頸部であり、口縁部から胴部にかけて厚みを持ちながら外方に強く屈曲する。内面はナデ調整と横方向と斜め方向のハケメが施され、指頭圧痕がみられ、外面にはナデ調整が施される。内面下半には赤色顔料の付着が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と5mm以下の石英粒を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

224は粗製の小型器台の口縁部であり、復元口径は10.0cmを測る。直線的に外方に開き、端部は面をもち、中央がややくぼんでいる。内面にナデ調整が施され、口縁部は特に丁寧に仕上げられている。外面はナデ調整と指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色粒を多量に含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。台付鉢の底部の可能性も考えられる。

すべてⅡ－5層から出土し、いずれも布留0式～1式の範疇で捉えられる。

(永田 權)

土師質土器 (図28) 225～231は皿、232～234、236～242、244が杯、243が椀、245～257が鍋または甕である。いずれも焼成は良好である。

225は復元口径10.3cm、底径4.2cmを測る。外方へゆるやかに内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。底部は中央部がやや盛り上がる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであるが粗雑であり、底部から体部にかけて粘土の残余が付着する。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色を呈する。226は復元口径12.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面と

もにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の赤色粒を含み、色調は内外面ともににぶい橙色であり、一部が褐灰色を呈する。227は口縁部がゆるやかに内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

228～230は畿内系土師器皿であり、断面形態が「て」字状を呈する。いずれも内外面ともにナデ調整が施され、口縁端部が上方に摘まみ出される。228は復元口径8.8cmを測る。胎土は1mm以下の赤色粒を少量含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は浅黄橙色を呈する。229は復元口径9.0cmを測る。胎土は1mm以下の長石粒と赤色粒を少量含み、色調は内外面ともに淡黄橙色を呈する。230は復元口径9.2cmを測る。外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm程度の角閃石粒を含み、金雲母がみられ、色調は内面が黒褐色、外面は黄灰色を呈する。

231は底部であり、復元底径5.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、切り離し痕は一部ナデ消されている。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

232は復元口径10.2cmを測る。内湾気味に外方へ開き、上部でやや肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。233は復元口径13.4cmを測る。直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。234は口縁部がやや内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、ロクロ目が顕著にみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

236～242は底部である。236は復元底径8.2cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部は回転糸切り技法で切り離されている。胎土は2mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。237は復元底径6.4cmを測る。底部は円盤高台状になっており、内面には段を有する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部は回転ヘラ切り技法によって切り離されている。内面は器表の剥離が激しい。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。238は復元底径7.0cmを測る。底部は円盤高台状になっており、内面には段が確認できる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm程度の石英粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内面が橙色、外面は明黄褐色を呈する。239は復元底径7.2cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部は比較的厚く、切り離し痕はナデ消されている。胎土は5mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。240は復元底径6.6cmを測る。内外面ともにナデ調整が施されている。底部は回転ヘラ切りで切り離され、切り離し痕はナデ消されている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。241は復元底径7.8cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整が施されている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。242は復元底径6.8cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切

2. 各トレンチの成果

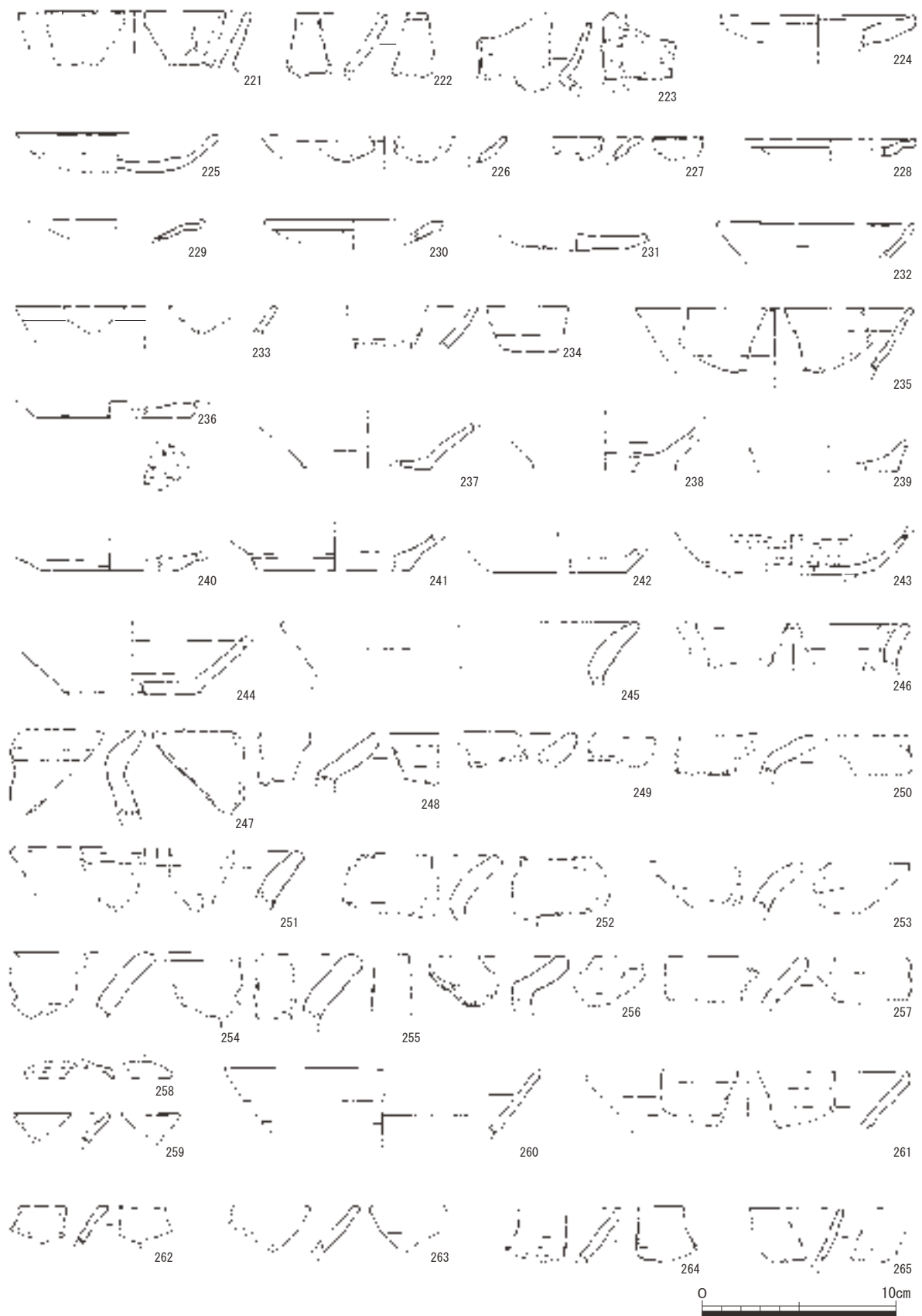


図28 II区18トレンチ包含層出土土器 1

り離し技法は回転ヘラ切りであり、切り離し痕は粗くナデ消されている。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、金雲母が多量にみられ、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。244は復元底径7.0cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部は円盤高台状であり、回転ヘラ切りによって切り離される。胎土は1mm以下の長石粒と赤色粒と金雲母を含み、色調は内面が橙色、外面が褐灰色を呈する。

243も底部で、内湾しながら外方に開く。243の高台は貼り付け輪高台である。内湾しながら外方へ開く。内外面ともにミガキがやや密に施され、外面のミガキは横方向に長い。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。

245～257は口縁部である。245は復元口径18.3cmを測る。外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面にはハケメがみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色と黒褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。246は復元口径11.7cmを測る。口縁が外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。247は口縁部がやや外反気味に開き、端部にかけて先細りする。端部は丸くおさまる。内面はナデ調整とハケメ、外面にはナデ調整と指頭圧痕がみられ、端部の調整は粗雑である。胎土は1mm程度の長石粒と4mm以下の石英粒を多量に含み、色調は内面が赤橙色と橙色、外面が赤橙色を呈する。248は口縁部が直線的に外方へ大きく開き、端部は平坦面がみられる。口縁部の断面形は方形状を呈する。内外面ともにナデ調整が施され、内面には横方向のハケメがみられる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が赤褐色、外面は明褐色と褐灰色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。249は口縁部が先細りしながら、「く」字状に外方へ開き、端部が丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は灰褐色と褐灰色を呈する。外面は二次的被熱を受けている。250は口縁部が外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、金雲母が多量にみられ、色調は内面が褐灰色、外面は黒褐色を呈する。251は復元口径15.0cmを測る。口縁部は外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。外面に粘土の残余がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、赤色粒を多量に含み、色調は内面が黒褐色、外面はにぶい橙色を呈する。252は口縁部が外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色と褐灰色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。253は口縁部が強く外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と金雲母を多量に含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面は橙色と灰褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。254は口縁部が外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は4mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母が多量にみられ、色調は内面が灰褐色、外面は橙色とにぶい橙色を呈する。二次的被熱の痕跡がみられる。255は口縁部が直線的に外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさま

2. 各トレンチの成果

る。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色と褐灰色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。256は口縁部がやや内湾気味に外方へ大きく開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と赤色粒を含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。257は口縁部が直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内面が橙色とにぶい橙色、外面は褐灰色と黒褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。

229、236、240はⅠ層、226～228、230、241、244、245、247、248、252はⅡ－1層、225、231、232、234、238、243、249、257はⅡ－2層、237、242、251、253～256はⅡ－3層、233、239、246はⅡ－4層、235、250はⅡ－5層から出土した。233は9～10世紀、234、237～242、244～247、249、251は10～11世紀、228～230、232、243は11世紀、248、250、252～257は11～12世紀、225～227、231、236は12世紀と考えられる。

須恵器 (図28・29) 258は杯蓋、235、259～285、292が杯、286～288が碗、289、290が甕、291が捏鉢である。289、290を除きいずれも内外面ともに回転ナデ調整が施される。

258は杯蓋の口縁部であり、端部はやや外方へ張り出す。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含む。色調は焼成不良により内外面ともに橙色を呈する。

235、259～269、292は口縁部である。235は復元口径14.2cmを測る。内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm程度の長石粒を少量含む。色調は内外面ともに灰白色を呈し、口縁部外面は重ね焼きの痕跡がみられる。259は直線的に外方へ開き、上部でやや内湾し、端部は丸くおさまる。口縁部外面上部には自然釉が付着している。胎土は2mm程度の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。260は復元口径16.0cmを測り、若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる、外面にはロクロ目が顕著にみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む、色調は内外面ともに灰色を呈する。261は復元口径16.4cmを測り、やや内湾気味に外方へ開き、上部で上方に立ち上がり、端部は丸くおさまる。外面にはロクロ目が顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む、色調は内面が灰白色、外面は上半が灰白色、下半が黄灰色を呈する。262は外方へ開き、端部は丸くおさまる。内面はナデ調整に伴う爪によるくぼみがみられる。胎土は3mm以下の長石粒と2mm以下の石英粒を含み、内面が暗灰色、外面は灰色を呈する。263は口縁部がゆるやかに内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含む、色調は内外面ともに灰白色を呈する。264は口縁部がやや内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内面はロクロ目が顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む、色調は内外面ともに灰色を呈する。265はゆるやかに内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含む、色調は内面が灰白色、外面は灰黄褐色であり、二次的被熱により内外面ともに口縁部付近が黒褐色を呈する。266は若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の石英粒を含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。267は若干内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。器壁はやや厚手である。胎土は2mm以

下の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。268は内湾しながら外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにロクロ目が顕著である。胎土は1mm程度の長石粒を含み、色調は内面が黄灰色、外面が褐灰色を呈する。269は口縁部が直線的に外方へ開き、上部で上方へ立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が灰白色、外面は淡黄色を呈する。292は復元口径18.9cmを測り、やや内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、色調は内面が暗灰色と灰黄色、外面は暗灰色を呈する。

270～285は底部である。270～278は回転ヘラ切り技法によって切り離されている。270は復元底径6.4cmを測り、体部にはロクロ目が顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。271は復元底径8.0cmを測る。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。272は復元底径7.6cmを測る。底部はやや直線的に外方へ立ち上がる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。273は復元底径9.6cmを測り、胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含む。色調は内面が灰黄色、外面が浅黄色を呈する。274は復元底径8.0cmであり、胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が灰黄色、外面は黄灰色を呈する。275は復元底径6.2cmを測り、胎土は2mm程度の長石粒を含み、色調は内面が灰白色、外面は灰オリーブ色を呈する。276は復元底径7.8cmであり、胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が灰白色、外面が黄灰色を呈する。277は復元底径7.6cmを測る。底部の切り離し痕は一部ナデ消されている。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。278は円盤高台状の底部であり復元底径6.7cmを測る。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が灰白色と黒褐色、外面は黄灰色を呈する。

279～285は底部に輪高台が貼り付けられている。279は復元底径9.0cm、高台の高さは0.5cmを測り、高台の断面形は三角形を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。280は復元底径10.0cm、高台の高さは0.5cmを測る。高台の断面形は方形を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。281は復元底径7.0cm、高台の高さは0.5cmであり、断面形は台形状を呈する。胎土は1mm程度の角閃石粒を多量に含む、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。282は復元底径5.8cm、高台の高さは0.5cmであり、高台の断面形態は三角形を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。自然釉が外面全体に付着している。283は復元底径8.4cm、高台の高さは0.2cmを測り、その断面形は台形を呈する。胎土は2mm程度の長石粒と角閃石粒を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。284は復元底径8.5cmを測り、内湾気味に開く。高台の断面形は台形状である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。285は復元底径8.0cm、高台の高さは0.5cmを測る。高台の断面形は三角形を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色である。

286は復元口径14.0cmを測る。内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに口縁部から体部にかけてロクロ目が顕著である。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む、色調は内外

2. 各トレンチの成果

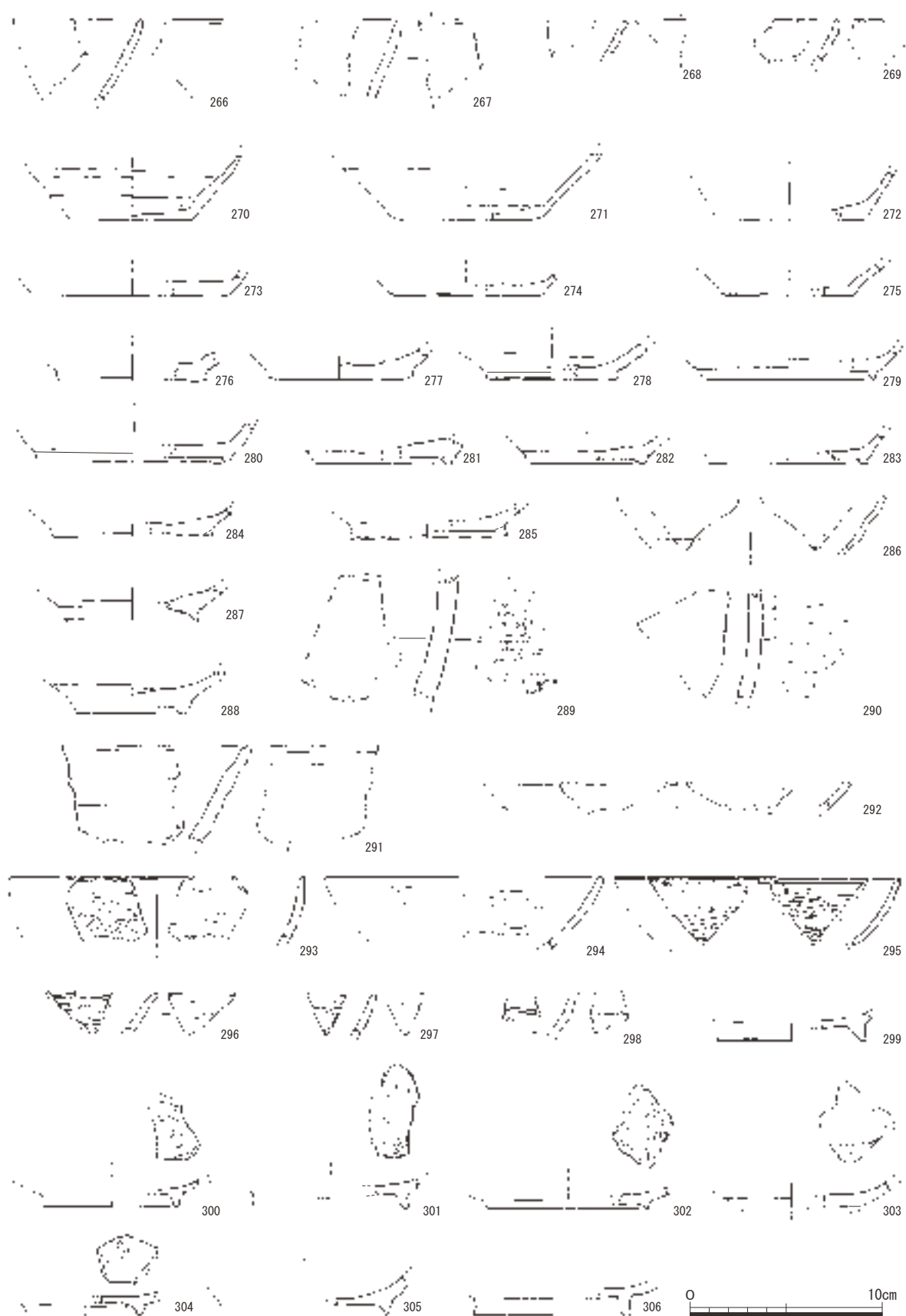


図29 II区18トレンチ包含層出土土器2

面ともに灰色を呈する。287は復元底径6.9cm、高台の高さは0.7cmである。高台は断面形が三角形を呈する。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。288は復元底径5.7cm、高台の高さは0.6cmを測る。高台は断面形が三角形を呈する。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

289は体部である。内面はナデ調整と指頭圧痕がみられ、外面にはタタキとハケメが施される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。290は外面が密にタタキが施され、内面には当て具痕がわずかにみられる。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。

291は口縁部であり、外方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに口縁部から体部にかけてロクロ目が顕著にみられる。胎土は1mm以下の石英粒と長石粒を含み、色調は内面が黄灰色、外面は灰色を呈する。

284はⅠ層から、262、263、277、282、289、291はⅡ－1層、258～260、265、266、268、270～272、274～276、278、279、281、285～287、290、292はⅡ－2層、264、267、280はⅡ－3層、283はⅡ－4層、235、261、269、273はⅡ－5層、288は攪乱層から出土した。258は8世紀後半～9世紀、259～275、280、283、292は9～10世紀、289、290は9～11世紀、235、276～279、281、282、284～288は10～11世紀、291は11～12世紀と考えられる。

黒色土器（図29・30） 293～306は黒色土器A類の碗である。焼成はいずれも良好である。

293は復元口径15.2cmを測る。口縁部はやや内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり、内面にはミガキが横方向に施される。外面にはミガキが密にみられる。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒色、外面が褐色を呈する。294は復元口径14.4cmを測る。内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが横方向と斜め方向に密に施され、外面にはナデ調整と指頭圧痕が観察される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。295は復元口径14.8cmを測り、内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり、内外面ともにミガキが横方向に密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量、金雲母を多量に含み、色調は内面が黒色、外面は上半が黒色、下半がにぶい褐色を呈する。296は内湾気味に外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさまる。内面は幅1mm程度の横方向のミガキが密に施され、外面は横方向のミガキとナデ調整がみられる。胎土は1mm程度の長石粒少量と金雲母を含み、色調は内面が黒色、外面は橙色とにぶい橙色を呈する。297はやや内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが施され、内面のミガキは密である。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに暗灰色を呈する。298は内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり。内外面ともに横方向のミガキが施され、内面のミガキは密である。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、内面が黒色、外面は赤褐色を呈する。

299～306は底部であり、いずれも輪高台が貼り付けられる。299は復元底径7.8cm、高台の高さは0.9cmを測る。高台は「ハ」字状に大きく開き、断面形は台形状を呈する。外面にナデ調整が施さ

2. 各トレンチの成果

れ、見込みにはミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。内面の剥離が著しい。300は復元底径6.8cm、高台の高さは0.7cmを測る。高台は断面形が台形状を呈する。外面はナデ調整が施され、見込みには横方向のミガキが密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母が多量にみられ、色調は内面が黒色、外面が橙色を呈する。301は復元底径8.1cm、高台の高さは0.9cmを測る。高台は断面形が台形状を呈する。外面にはナデ調整が施され、見込みにはミガキが密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が黄灰色、外面は灰白色を呈する。302は復元底径8.3cm、高台の高さは0.4cmを測る。高台は断面形が三角形を呈する。外面にはナデ調整が施され、見込みにはミガキが密に施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。303は復元底径6.2cmを測る。外面にはナデ調整が施され、見込みにはミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒褐色、外面は橙色を呈する。304は復元底径5.8cm、高台の高さは0.5cmを測る。高台は断面形が三角形を呈する。外面はナデ調整が施され、見込みには横方向と縦方向のミガキが密に施される。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が黒色、外面は明褐色を呈する。305は復元底径8.4cm、高台の高さは0.7cmを測る。高台は断面形が三角形を呈す。外面にはナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面が橙色を呈する。306は復元底径8.2cm、高台の高さは1.0cmである。高台は断面形が台形状を呈する。内外面ともにナデ調整が施され、見込みにはミガキがみられる。胎土は金雲母が多量に含まれ、色調は内面がオリブ黒色、外面はにぶい褐色を呈する。

307は黒色土器B類碗の口縁部であり、やや内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁部内面には沈線が1条めぐる。内外面ともに幅2mm程度のミガキが横方向に密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともに黒色を呈する。

294、301はI層、296、299、302～304、307はII-1層、293、298、305、306はII-2層、295、300はII-3層、297はII-4層から出土した。293～307はいずれも10～11世紀と考えられる。

緑釉陶器（図30） 308は碗の口縁部である。口縁部は内湾気味に開いたのち、上部でゆるやかに外反し、端部は丸くおさまる。胎土は精緻であり、色調は黄橙色を呈する。内外面ともに薄い釉がかけられ、内面の釉調は明黄緑色と明黄褐色、外面は明黄褐色を呈する。硬質焼成であり、畿内産と考えられる。II-3層から出土し、時期は10世紀代と考えられる。

吉備型土師器（図30） 309は復元口径15.2cmであり、口縁はやや外反気味に外方へ開き、端部はやや肥厚して丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキが施される。胎土は1mm程度の長石粒と角閃石粒を多量に含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともに灰黄色を呈する。310は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが施され、外面にはナデ調整がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と3mm以下の石英粒、赤色粒を含み、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。311は復元口径15.0cmであり、内湾気味に外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが施され、外面にはナデ調整がみられる。外面の器表は粗く、剥離が目立つ。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。312

は内湾し、端部は肥厚して丸くおさまる。内外面ともにミガキがみられ、外面にはナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。313はやや内湾気味に外方へ開き、端部は外反して丸くおさまる。内外面ともに横方向のミガキとナデ調整が施される。胎土は1mm以下の石英粒を少量含み、内外面ともに淡黄色を呈する。314はゆるやかに内湾しながら開き、上部で外方へ屈曲し、端部は薄く、丸くおさまる。内外面ともにミガキが施され、外面にはナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。315はやや内湾気味に外方へ開き、上部で外反し、端部は丸くおさまる。内面には横方向のミガキとナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の石英粒と1mm以下の赤色粒を含み、色調は内面上半が灰白色であり、下半は煤が付着して黒色を呈し、外面は灰白色である。

316は復元底径7.5cm、高台の高さは1.2cmを測る。高台は「ハ」字状に開き、端部が丸くおさまる

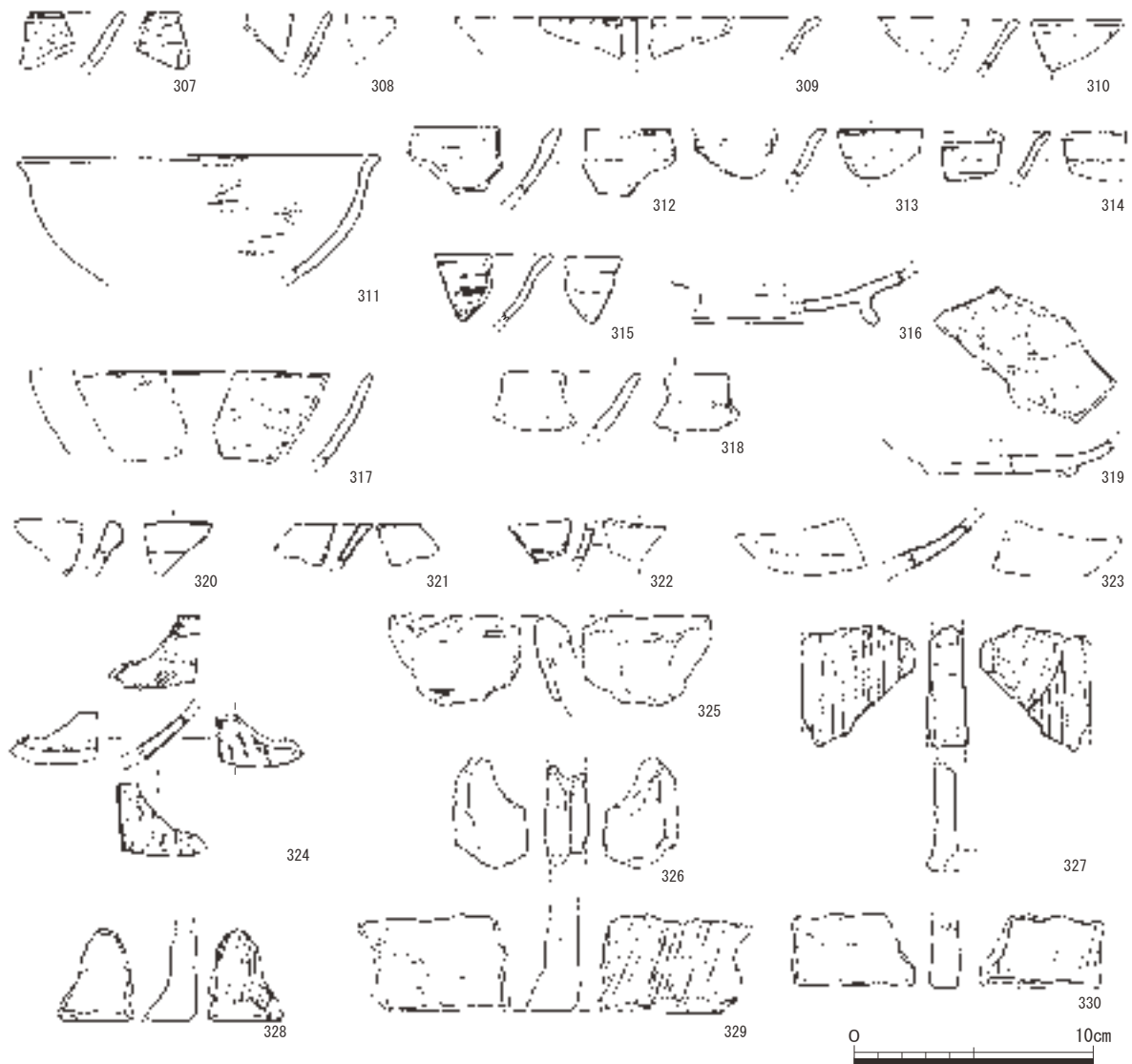


図30 II区18トレンチ包含層出土土器・土製品

2. 各トレンチの成果

貼り付け輪高台である。内面はミガキが施され、外面にはナデ調整がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

309～311、313～315が山本編年Ⅰ－3期、312がⅡ期、316がⅠ－3～Ⅱ期に比定される〔山本悦1993〕。

312、316はⅠ層、310、311、314、315はⅡ－1層、309、313はⅡ－2層から出土した。309～311、313～315が12世紀前半、312が12世紀後半、316が12世紀代に比定される。

瓦器 (図30) 317は復元口径が14.2cmを測る。内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内面には横方向と斜め方向のミガキが密に施され、外面は上部のみ横方向のミガキが施され、体部には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が黄灰色、外面が灰黄褐色を呈する。和泉Ⅱ－3期に比定される〔橋本2018〕。318は口縁部であり、やや内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが間隔をあけて施され、体部外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色と褐灰色を呈する。和泉Ⅱ－2～3期に比定される。

319は底部である。復元底径6.4cm、高台の高さは0.4cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形は台形を呈し、やや雑に貼り付けられている。内外面ともにミガキがみられ、見込みには連結輪状暗文が施される。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともに褐灰色を呈する。和泉Ⅱ－3～Ⅲ－1期に比定される。

317はⅠ層、319はⅡ－1層、318はⅡ－2層から出土した。317、318は12世紀中葉、319は12世紀後半と考えられる。

陶磁器 (図30) 320～324は貿易陶磁器であり、いずれも焼成は堅緻である。

320～322は白磁碗である。320は口縁部であり、肉厚の玉縁をもち、器壁が5.5mm程度と厚い。灰白色の釉が薄くかかる。端部直下から体部にかけてヘラ削りをのこし、外面のナデ調整は玉縁周囲に限られる。釉は薄く全面にかかり、黄色味をおびる。胎土は精緻であり、灰白色を呈する。大宰府編年の白磁碗Ⅳ類に比定される〔山本信2000〕。321も口縁部であり、外方へ屈折し、全面に薄い釉がかかる。釉は黄色味をおびる。胎土は精緻であり、灰白色を呈する。大宰府編年の白磁碗Ⅷ類に比定される。322は体部である。全面に薄い釉がかけられており、釉は黄色味をおびる。胎土は精緻であり、灰白色を呈する。

323、324は青磁碗の体部である。323は内外面ともに貫入がみられ、釉は全面に薄くかかる。外面はヘラ削りの痕跡が顕著にみられる。胎土は精緻であり、灰黄色を呈する。底部に近い部位と考えられる。大宰府編年の龍泉窯系青磁Ⅰ類に比定される。324は釉が全面に薄くかかる。内外面ともに櫛描文であり、内面は花文、外面には条線文が施される。胎土は精緻であり、灰色を呈する。大宰府編年の同安窯系青磁Ⅰ類と考えられる。

320～323、325はⅠ層、324はⅡ－2層より出土した。320は11世紀後半～12世紀、321、324は12世紀中ごろ、323は12世紀中ごろ～後半と考えられる。322は時期不明である。

土製品 (図30) 325～330は移動式カマドであり、いずれも焼成は良好である。

325は掛口部であり、内外面ともにナデ調整とハケメが施されている。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい赤褐色、外面は灰黄褐色を呈する。326は底部であり、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母が多量にみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。327も底部と考えられ、内外面ともにハケメが施される。一部指頭圧痕により、ハケメが押しつぶされている。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内面が橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

328～330は裾部である。328は内面にナデ調整、外面には縦方向のハケメが施され、接地面は平坦である。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面が褐灰色、外面はにぶい黄橙色を呈する。329は内面に強いナデ調整が施され、外面には縦方向の粗いハケメがみられる。接地面はやや丸みを帯びる。胎土は2mm程度の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。330は内外面ともにナデ調整、外面には縦方向のハケメが施され、接地面は平坦である。内面のナデ調整は強く、明瞭な稜線がのこる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。

325～329はⅡ－3層、330はⅡ－4層から出土し、いずれも10～11世紀のものと考えられる。

(松澤樹生)

製塩土器 (図31・32、写真3) 331～379はいずれも焼成が良好である。口縁部の開き方が推測できないものについては、体部を直立させて表している。

331～357は口縁部である。口縁部は直立気味のものの、やや内湾しながら外方へ開くもの、直線的に外方へ開くものがある。331は復元口径が16.8cmであり、器壁は5mmとやや薄手である。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄色を呈する。焼き締まりが良い。332は復元口径13.2cmである。内面は口縁部に強い横方向のナデ調整が施され、外面には顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、10mm以下の角閃石粒も少量認められる。色調は内面がにぶい褐色、外面は灰褐色を呈する。333は復元口径11.8cmである。内面は口縁部に強い横方向のナデ調整が施され、外面に顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒と5mm程度の礫を含む。色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められる。334は復元口径12.6cmである。内面は横方向のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色を呈する。335は復元口径11.6cmであり、外面は顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm程度の長石粒を多量、5mm程度の礫を少量含み、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。336は復元口径10.2cmであり、内面には縦方向のナデ調整が施され、外面に指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。337は復元口径12.0cmであり、口縁端部はやや尖り気味である。内面には強い横方向のナデ調整が施され、外面に指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色

2. 各トレンチの成果

調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色を呈する。338は内面に明瞭なナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む。内外面ともに暗灰黄色を呈する。内面にはひび割れがみられ、外面は二次的被熱の痕跡が認められる。焼き締まりが良い。339は内面に斜め方向のナデ調整が施され、器面が平滑である。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められ、焼き締まりが良い。340は口縁端部内面に縦方向のナデ調整が丁寧に施され、外面に顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。341は口

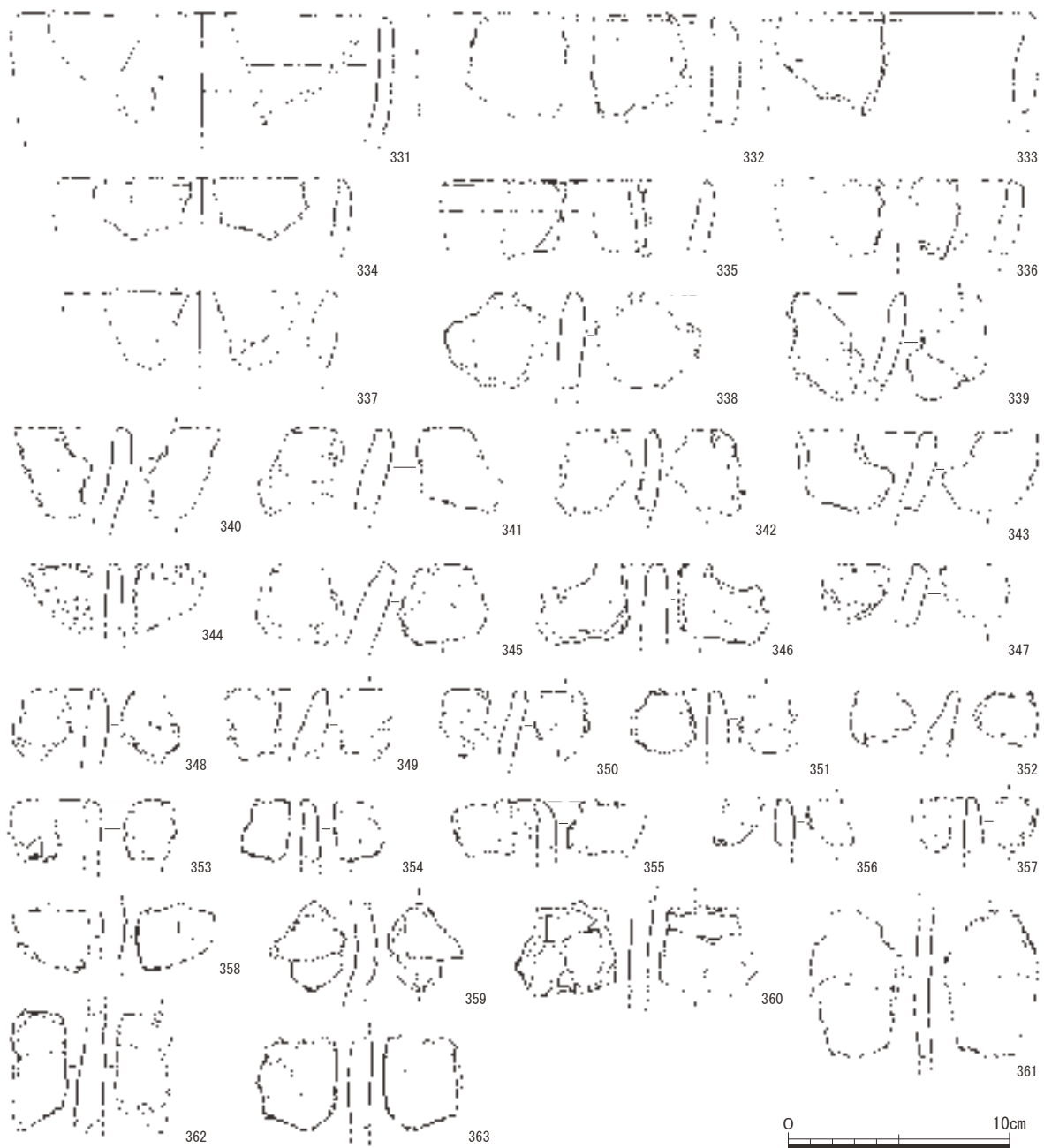


図31 II区18トレンチ出土製塩土器 1

縁端部に面取りがみられる。内面に明瞭な横方向のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、内面がにぶい褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。外面には二次的被熱を受けた痕跡が認められる。342は内面にナデ調整が施され、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面は褐灰色を呈する。外面全体から内面の口縁端部まで二次的被熱の痕跡が認められる。343は内面にナデ調整が認められ、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈し、焼き締まりが弱い。344は内面に横方向の強いナデ調整が施され、外面に指頭圧痕が認められる。内外面ともにひび割れがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、内面が灰褐色、外面は褐灰色を呈する。外面から内面の口縁端部まで二次的被熱の痕跡が認められ、焼き締まりが良い。345は内外面ともにナデ調整が施され、胎土は5mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰褐色を呈する。346は内面に顕著なナデ調整が認められる。胎土は5mm以下の長石粒を多く含み、色調は内面が灰黄色、外面は暗灰黄色を呈する。内外面ともにひび割れが多く認められる。また、外面全体から内面の口縁端部まで二次的被熱の痕跡がみられ、焼き締まりは良い。347は内面にやや明瞭な横方向のナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。348は内面に縦方向と横方向のナデ調整がやや強く施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面は褐灰色を呈する。外面は体部から口縁部付近にかけて二次的被熱の痕跡が認められ、焼き締まりが良い。349は内面に丁寧な横方向のナデ調整が施され、器面は平滑である。胎土は1mm程度の長石粒と5mm以下の石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。350は内面にナデ調整が施され、外面は指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。焼き締まりが良い。351は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、内外面ともににぶい褐色を呈する。352は内面にナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は10mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。353は内外面ともにナデ調整が認められ、胎土は8mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。354は内外面ともにナデ調整が施され、内面の器面は平滑である。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。355は内面にナデ調整が施され、外面は顕著な指頭圧痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められる。356は内面にナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色を呈する。焼き締まりが良い。357は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は5mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに黄橙色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられる。

358～363は胴部である。358は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。359は内湾しており、底部に近い部位と推測される。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を多量、1mm程度の石英粒を

2. 各トレンチの成果

少量含み、金雲母もみられ、内外面ともににぶい赤褐色を呈する。外面は二次的被熱の痕跡が認められる。360は内外面ともにナデ調整が施され、胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈し、外面には二次的被熱の痕跡が認められる。361は内外面ともにナデ調整が認められ、胎土は1mm程度の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい灰黄褐色、外面がにぶい褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められる。よく焼き締められている。362は内外面ともにナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒と2mm以下の石英粒を多量に含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色と灰褐色を呈する。363は内外面ともにナデ調整が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。

364～385は内面に布目や紐状の痕跡を残している。364～371は口縁部である。364は内面に紐状の痕跡があり、外面には指頭圧痕が認められる。砂礫を非常に多く含んでおり、10mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい黄褐色を呈する。365は内面に布目痕と紐状の痕跡が認められ、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。366は内面に紐状の痕跡がみられ、外面はナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。367は内面に布目痕が認められ、外面はナデ調整により平滑である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面は灰黄褐色を呈する。368は内面に布目痕が認められ、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、金雲母がみられ、焼き締まりが良い。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。369は内面に布目と紐状の痕跡がみられ、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい黄橙色を呈する。370は内面に紐状の痕跡が認められ、外面はナデ

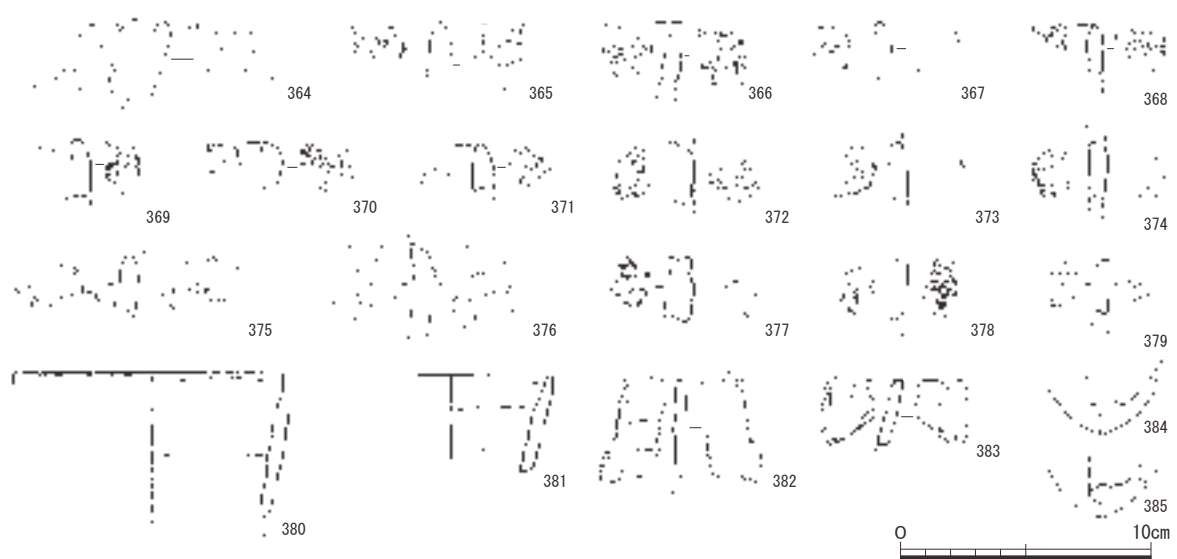


図32 II区18トレンチ出土製塩土器2

調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む。内外面ともににぶい褐色を呈し、焼き締まりは良い。371は内面に布面とみられる痕跡が認められ、外面はナデ調整がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は灰褐色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡が認められ、焼き締まりが良い。

372～379は胴部である。372は内面に布目と紐状の痕跡が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は灰黄褐色を呈する。外面は二次的被熱の痕跡がみられる。373は内面に布目と紐状の痕跡がみられ、外面には顕著な指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内面が橙色、外面は褐灰色を呈する。374は内面に布目痕が認められ、外面はナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内面が橙色、外面はにぶい黄褐色を呈する。375は内面に紐状の痕跡が認められ、外面はナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。376は内面に横方向の強いナデ調整と紐状の痕跡が認められ、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む、色調は内面が暗灰黄色、外面はにぶい黄色を呈し、焼き締まりが良い。377は内面に紐状の痕跡がみられ、外面はナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、色調は内面がにぶい黄褐色、外面は褐灰色を呈する。外面には二次的被熱の痕跡がみられ、焼き締まりが良い。378は内面に布目痕と紐状の痕跡が認められ、外面はナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む、色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい赤褐色を呈し、焼き締まりが良い。379は内面に布目痕がみられ、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む、金雲母もみられ、色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄褐色を呈する。焼き締まりが良い。

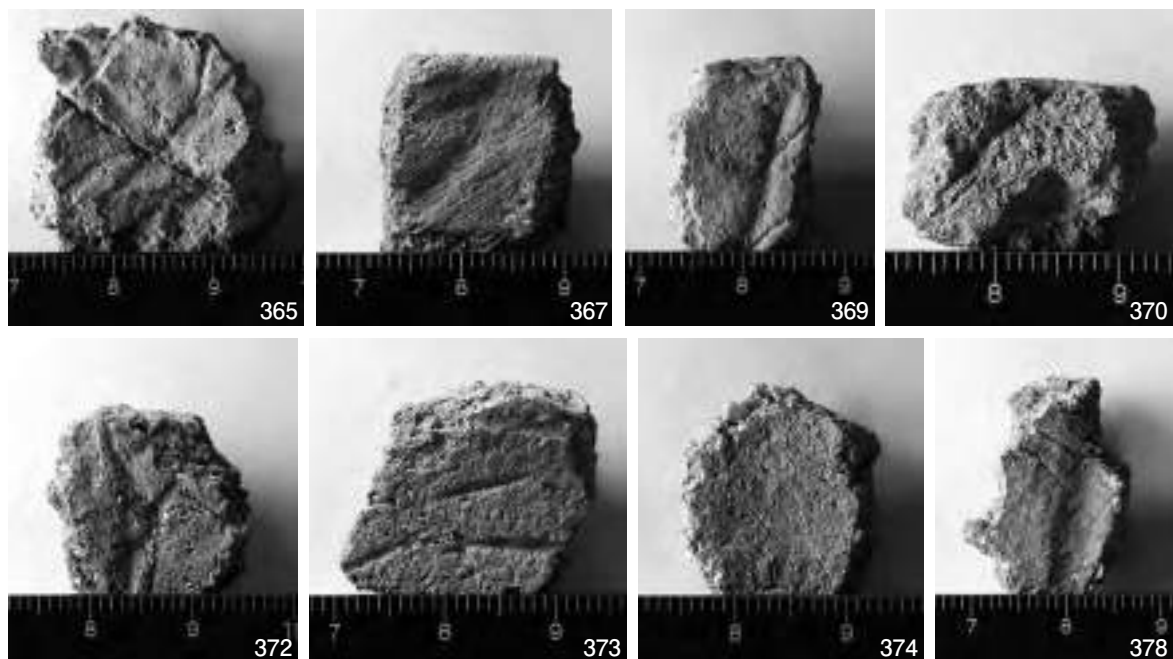


写真3 製塩土器内面の布目痕拡大写真

2. 各トレンチの成果

380～385はいわゆる「倉浦式」製塩土器の可能性はある。いずれも器壁は薄く、焼成は堅緻である。380～383は口縁部である。380は復元口径11.0cmであり、内面は丁寧なナデ調整が施され、外面には顕著な指頭圧痕が認められる。砂礫を多く含み、5mm以下の長石粒と石英粒が多量にみられ、色調は内面がにぶい赤褐色、外面は灰色を呈する。381は復元口径8.0cmである。内面は丁寧なナデ調整がみられ、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。380と381は同一個体の可能性がある。382は内面に丁寧なナデ調整が施され、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が黄褐色、外面は黄橙色を呈する。383は内面に丁寧なナデ調整がみられる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面は灰褐色を呈する。

384、385は尖底気味の底部である。384は内面にナデ調整が施され、外面は指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい橙色を呈する。内面には二次的被熱の痕跡が認められる。385は内面にナデ調整が認められ、外面は指頭圧痕がみられる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。

331、338、341、343、346、350、352、356、358、363、364、369、370、372、378、383はⅡ－4層、332～337、339、340、342、344、345、347～349、351、353～355、357、359～362、365～368、371、373～377、379～382、384、385はⅡ－5層より出土した。時期はいずれも9世紀ごろに比定される。

(福本佳織)

土錘 (図33) 386、387は管状土錘、388は棒状土錘である。いずれも焼成は良好である。

386は一端が欠損している円筒形の大型品であり、3分の1程度残存している。現存長5.5cm、復元直径4.2cm、復元孔径2.2cmであり、重量は37.0gを量る。外面に長軸方向にはナデ調整が施され、指頭圧痕が中央部にみられる。内面には棒状工具を使用したと考えられる擦痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は褐色、灰黄褐色を呈する。387は円筒形の小型品で、ほぼ完形品である。現存長5.7cm、現存幅1.6cm、孔径0.5cm、重量13.0gである。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕が顕著にみられる。表面は滑らかであり、両端には破面をのこす。胎土は1mm以下の長石粒、角閃石粒が含まれ、金雲母もみられる。色調はにぶい

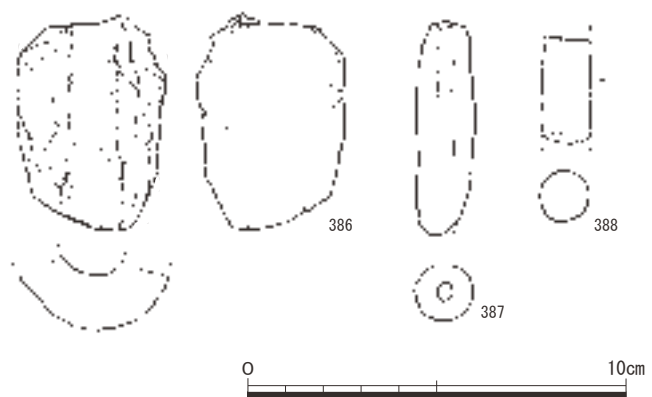


図33 Ⅱ区18トレンチ出土土錘

橙色を呈する。

388は棒状土錘の体部であり、両端部を欠いている。断面形は円形を呈する。現存長2.8cm、直径1.3cmであり、重量7.0gを測る。全体的に丁寧なナデ調整が施される。胎土はきめ細かく、1mm以下の長石粒を多量に含み、色調はにぶい橙色を呈する。

387はⅡ－1層、386はⅡ－2層、388はⅡ－3層から出土した。

(江本晃季)

鉄製品・鍛冶関連遺物 (図34) 389は曲刃鎌の刃部片であり、現存長4.8cm、最大幅2.1cm、最小幅1.5cm、厚さ0.2～0.3cmである。390は折り返しによる袋部をもつ刃器であり、切先と袋下端部を欠損している。全体的に薄く、袋部の幅から想定される柄の厚みも薄いため、鎌とは異なる機能が想定される。現存長3.9cm、最大幅3.8cm、厚さ0.15～0.2cmを測る。391、392は棒状鉄器である。391は両端部を欠損しており、その断面は方形である。現存長5.3cm、幅0.5～0.6cmである。392は同一個体と想定される二片であり、一辺はその一端が湾曲して「J」字状を呈している。断面は隅丸方形～円形であり、それぞれの長さは2.6cm、5.0cm、幅0.3～0.4cmを測る。

393、394は鉄釘である。393は折釘であり、脚の下端部を欠損している。頭部は直角に曲げられ、脚は外に湾曲している。断面は頭部が長方形で、脚の端部は正方形である。現存長は6.3cmを測り、頭部幅1.0cm、脚部幅0.6cm、それぞれの厚みは0.7cm、0.6cmである。394は丸釘である。全長は5.2cm、頭部、脚部の直径はそれぞれ0.35cm、0.3cmである。

395、396、397は不定形を呈する大きさ2～2.5cmの小形鍛冶滓である。395は底面と側面をのこし、四つの破面が認められる。破面には多量の気泡がみられる。396は上面と側面をのこし、二つの破面が認められる。上面は発泡しており、しわも確認される。破面には金属質の緻密さをのこし、少量の気泡もみられる。397は上面と側面に表皮のこし、四つの破面が認められる。部分的に赤錆が観察される。それぞれ重量は12.6g、10.2g、16.0gを量る。

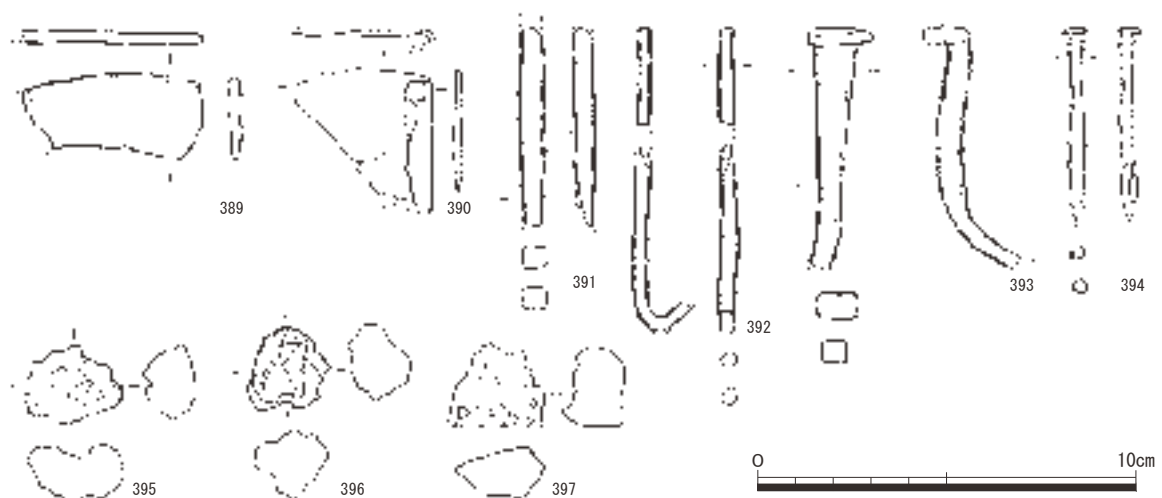


図34 Ⅱ区18トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

2. 各トレンチの成果

391は1号墓埋土、394はⅠ層、389はⅡ－1層、390、393はⅡ－2層、395～397はⅡ－3層、392はⅡ－4層より出土した。

(ブズレン・サミ)

【参考文献】

有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

大阪府立近つ飛鳥博物館編2006『年代のものさし－陶器の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館

柴田昌兄 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

橋本久和 2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社

山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

山本信夫 2000『太宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会

第4章 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨に関する予察

舟橋京子・米元史織・足立達朗・中野伸彦

1. はじめに

愛媛県上島町宮ノ浦遺跡第12次調査が愛媛大学法文学部考古学研究室と上島町教育委員会によって行われ、中世初期に属する人骨が出土した。そこで、同大学・同教育委員会により調査が行われ、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座・九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに調査の依頼があり、舟橋が現地に赴き調査の補助を行った。その後人骨が搬送され、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、出土人骨のクリーニングを行った。

分析総数は1体である。人骨の年齢推定は、耳状面はLovejoy *et al.* [1985]、咬耗は析原 [1957] を用い、性判定には、Buikstra & Ubelaker [1994] を基準に、頭蓋・骨盤を用いて判定を行った。

年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』[1988] 記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上（詳細は不明）とする。

2. 考古学的分析：出土状況

本遺跡出土人骨は墓坑内に埋置されており、概ね四肢を伸展した伸展葬であった。

ただし、左脛骨のみが脛距関節が外れて遠位側が本来の位置よりも5cm程度跳ね上がった状態で出土している。この要因については今後さらに精査する必要がある。副葬品としては左右の手元付近から体の長軸と並行して刀子が左右1点ずつ副葬されており、左大腿骨遠位外側付近からは土師質土器が出土している。

同時代の墓制としてはあまり類例がないが、近い時期の伸展葬の例としては少し時期を遡った古代の事例として、福岡市博多遺跡群第173次調査SR108号木棺墓（9世紀中ごろ～後半、〔山崎・中橋・田上編2009〕）や熊本県玉名市玉名平野遺跡SK04（7～9世紀、〔後藤編2022〕）が挙げられる。一方で前後する時期の事例としては、福岡市箱崎遺跡110次調査出土の伸展葬用と推定される木棺墓（11～12世紀前半、〔荒牧編2022〕）、福岡市博多遺跡群築港線関係第2次調査683号墓の伸展葬用と推定される木棺墓（12世紀中ごろ、〔力武・大庭編1988〕）がみられる。また、太宰府市・大宰府史跡第38次発掘調査（12世紀中ごろ、〔石松・高倉ほか編1977〕）や岡山県岡山市津寺遺跡（11～12世紀、〔亀山・大橋編1997〕）では伸展位と屈葬の双方の木棺墓が見つかっている。今後これらの類例との詳細な比較により埋葬姿勢および木棺の有無に関する検討が必要である。

3. 形質人類学的分析：形質的特徴

上述の方法に基づき、性別・年齢に関する判定を行った。その結果、本個体の性別に関しては、頭蓋骨の眼窩上隆起および外後頭隆起がやや発達しており、乳様突起も発達していること、寛骨の大坐骨切痕角も小さいことから男性と判定される。

年齢に関しては、耳状面及び桡原の咬耗度より成年後半から熟年前半と推定される。

今後形態および筋付着部の詳細な観察・分析に基づき、本遺跡出土人骨の形質的特徴の抽出と生前の活動の復元を行う必要がある。特に、本遺跡出土人骨に関しては、時期的にも地域的にも類例が少ないことから、形質的特徴の分析を行い、当該期の瀬戸内集団の形態を明らかにする必要がある。加えて、文献資料・考古資料から製塩に何らかの形で関連していた人物の可能性が考えられることから、実際に製塩作業を行っていた集団のMSMs（筋付着部）との比較を行い〔Yonemoto 2015〕、本人骨の生前の活動復元を今後行う必要がある。

4. Sr同位体比・Ca/Sr分析

ストロンチウム（元素記号Sr）の同位体比分析は、人の移動や交流、生活・生育圏を明らかにしうる分析方法として、世界各地で様々な研究が行われている〔Bentley 2006; Bentley *et al.* 2003, 2004; Kusaka *et al.* 2009, 2011, 2018; Horstwood *et al.* 2008など〕。Srは岩石に多く含まれる元素であり、主に4つの同位体が存在する。そのうち ^{86}Sr と ^{87}Sr の存在量の比を用いて示されるのがSrの同位体比（以下 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ）である。 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は、基盤地質の構成鉱物・岩石の生成年代によって異なり、通常0.7000から0.7200程度の変動を示す〔Bentley 2006〕。そして、基盤地質中に含まれている $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は、水やその水を摂取する動植物を通して人体、特に歯牙や骨に取り込まれる。中でも歯牙は一度形成されるとリモデリングされないため、歯牙の形成時期である幼少期に生育した場所の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をある程度反映する可能性が指摘されている。

本遺跡に関しては、隣接する弓削島を中心として12～15世紀に荘園が営まれていたことが明らかになっており、13世紀に東寺への荘園の寄進を示す文書もみられる〔網野1978など〕。今後、本個体の歯牙Sr分析を用いて在地成育者か否かの推定を行うことにより、中世初頭の塩田の生産体制ひいては弓削島荘成立前後の荘園運用体制の復元に寄与することが期待される。

5. 結語

宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨は伸展葬で埋葬されていた。性別・年齢に関しては、成年後半から熟年前半の男性と推定された。

今後、頭蓋及び四肢骨の計測値に基づく形態的特徴の分析、MSMsによる生前の活動復元、Sr分析に基づく生育地の推定を行う必要がある。

【参考文献】

- 網野善彦 1978『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会
- 荒牧宏行編2022『箱崎66 箱崎遺跡第110次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1459集、福岡市教育委員会
- 石松好雄・高倉洋彰ほか編1977『大宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』九州歴史資料館
- 亀山行雄・大橋雅也編1997『津寺遺跡4 山陽自動車道建設に伴う発掘調査14』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 九州大学医学部解剖学第二講座編1988『日本民族・文化の生成 2. 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵個人骨資料集成』六興出版
- 後藤克博編2022『玉名平野遺跡群：玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』熊本県文化財調査報告345、熊本県教育委員会
- 栃原 博 1957『日本人歯牙の咬耗に関する研究』熊本医学会雑誌（補冊）31巻（4）
- 山崎龍雄・中橋孝博・田上勇一郎編2009『博多遺跡群第173次調査報告－博多130』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1042集 福岡市教育委員会
- 力武卓治・大庭康時編1988『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（Ⅱ）博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集 福岡市教育委員会
- Bentley, R. A. (2006). Strontium Isotopes from the Earth to the Archaeological Skeleton: A review. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 13(3), 135-187.
- Bentley, R. A., Krause, R., Price T. D., and Kaufmann B. (2003). Human mobility at the early Neolithic settlement of Vaihingen, Germany: Evidence from strontium isotope analysis. *Archaeometry*, 45, 471-486.
- Bentley R. A., Price T. D., and Stephan E. (2004). Determining the 'local' $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ range for archaeological skeletons: A case study from Neolithic Europe. *Journal of Archaeological Science*, 31(4), 365-375.
- Buikstra, J. E. & Ubelaker D. H. (eds.) (1994). Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains: Proceedings of a seminar at The Field Museum of Natural History. *Arkansas Archaeological Survey Research Series*, 44, Arkansas Archaeological Survey, Fayetteville.
- Kusaka, S., Ando, A., Nakano, T., Yumoto, T., Ishimatsu, E., Yoneda, M., Hyodo, F., and Katayama, K. (2009). A Sr isotope analysis on the relationship between ritual tooth ablation and migration among the Jomon people in Japan. *Journal of Archaeological Science*, 36(10), 2289-2297.
- Kusaka, S., Nakano, T., Yumoto, T., and Nakatsukasa, M. (2011). Strontium isotope evidence of migration and diet in relation to ritual tooth ablation: A case study from the Inariyama Jomon site, *Japan, Journal of Archaeological Science*, 38(1), 166-174.
- Kusaka, S., Yamada, Y., and Yoneda, M. (2018). Ecological and cultural shifts of hunter-gatherers of the Jomon period paralleled with environmental changes. *American Journal of Physical Anthropology*, 167(2), 377-388.
- Lovejoy, C. O., Meindl, R. S., Pryzbeck, T. R., and Mensforth, R. P. (1985). Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: A new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68(1), 15-28.
- Yonemoto, S., (2015). Differences in the effects of age on the development of enthesal changes among historical Japanese populations. *American Journal of Physical Anthropology*, 159(2), 267-283.

第5章 成果と課題

縄文土器とその包含層の形成について 縄文時代の包含層を面的に広く掘り下げることを主目的とした第12次調査であったが、5トレンチ、18トレンチにおける上層での遺構調査に時間を要したため、その目的を達成することはできなかった。それでも層位と縄文土器との対応関係、包含層の形成と旧地形との関係に関しては、前回の調査までの理解をさらに深めることができた。

5トレンチ、17トレンチのⅣ－1層では、中期から後期にかけての土器が出土した。中期の土器は船元式を主体としており、今回の調査では口縁部片や大型の破片が多く出土し、型式の認定を促した。第11次調査の4トレンチ自然流路内出土品で里木Ⅱ式土器と判断した資料〔有馬・馬編2022、p.22、図9－20〕は、接合こそできなかったものの同一個体とみられる土器片や同類の文様を有する土器片が一定量得られ、再検討した結果、船元Ⅱ式土器と認定するにいたった。一方で、粗く、太い撚糸文を施し、キャリパー形の器形が想定される土器（図17－123、125～131）は里木Ⅱ式の可能性がある。また中期末葉から後期初頭にかけての沈線文土器も前回の調査に引き続き出土した。これまでのところ、沈線内に細かい刺突を施す土器（図8－12、図18－162）が後期前半と考えられ、Ⅳ－1層に含まれる最新の縄文土器となる。

Ⅳ－2層では撚糸文土器、無文土器片が出土した。撚糸文土器の文様は、先に里木Ⅱ式の文様として論じた撚糸文より細く、繊細である。また無文土器は薄く、器面の凹凸が顕著であり、器形は丸平底が想定できる。時期認定の決定打を欠いた状態ではあるが、これまで通り押型文よりも古い土器群として位置づけておき、来年度さらに情報量の多い資料の獲得と類例調査による成果を期待したい。

このⅣ－2層が大きく北に傾斜する様相は、第10次・第11次調査の4トレンチ西壁沿い先行トレンチで把握していたが、今回の5トレンチ東壁沿い先行トレンチの精査で改めて確認した。しかも、17トレンチのⅣ－2層上面がほぼ水平を呈することから、ほぼ5トレンチ南端あたりから急激に傾斜することがわかった。調査中からこの部分が北から入る深い谷奥にあたり、いわゆる谷頭に相当する可能性を議論した。発掘調査後に実施したサウンディング法によるボーリング調査の成果については解析結果を待つ現状であるが、速報によれば、5トレンチ南端から約15m北の地点で、約11m地下に岩盤を検出している。5トレンチで岩盤は地下約2mなので約9m落ちていることとなる。旧地形と包含層の形成に関する調査中の予察は、ボーリング調査の成果によってさらに詳細に説明されることになろう。同時に埋没丘陵頂部が17、18トレンチ内で検出されることは確実であり、次回、調査面積を広く確保し、精査に望みたい。

（村上恭通）

脚台式製塩土器について 第12次調査の17・18トレンチのⅢ層から出土した脚台式製塩土器は、その脚台端部径が平均2.3cm、脚台部高が平均1.0cm、器壁0.3～0.4cmである。この大きさは、柴田

昌児氏による芸予諸島周辺地域の製塩土器編年における芸予Ⅲ－３類〔柴田2015〕であることを示している。

17トレンチ出土資料（図20）は、端部径が最大3.0cm、最小2.3cm、脚台部高が最大1.4cm、最小1.0cm、脚台部内高が最大1.4cm、最小で1.0cmを測る。胎土は1mm程度の長石粒や石英粒、金雲母を含み、ほとんどがにぶい橙色を呈する。173は明赤褐色を呈し、1～5mmと大きな砂礫を多量に含んでいる。脚台部の形態は174のように端部が開くものと、177のように体部からほぼ垂直にのびるものがある。

18トレンチ出土資料（図27）は、端部径が最大2.9cm、最小1.2cm、脚台部高が最大1.2cm、最小0.6cm、脚台部内高が最大1.0cm、最小0.6cmである。胎土は、ほとんどがにぶい橙色を呈し、1mm程度の長石粒や石英粒、金雲母を含む。215は黄灰色を呈し、よく焼き締まっている。脚台部の形態は17トレンチと同様に端部が開くものと開かないものがあるが、後者の方が多い。218は鉢底部を摘まみ出して作ったような非常に小さな脚台部であり、痕跡器官と化している。断面が観察できる例によれば、連続成形の後、充填を施している個体と施していない個体どちらも確認される。また、210、218、220は脚台に二次的被熱の痕跡が確認される。過去、Ⅰ区で出土したⅢ－１・２類脚台部のほとんどは被熱痕跡が確認されている。これに対し、Ⅱ区で出土したⅢ－３類は被熱した土器はきわめて少ない。製塩炉内における製塩土器の設置法に変化があったことが想定される。

脚台式製塩土器の製作技法に関する柴田氏の先行研究〔柴田1994〕によれば、芸予Ⅲ－３類の製作技法は粘土充填ではなく、鉢部の底部をつまみ出すか、脚台部の貼り付けである。しかし、本報告書で図示した18点のうち5点、177、210、212、214、219には充填痕が確認された。宮ノ浦遺跡Ⅱ区のⅢ－３類製塩土器は、Ⅲ－１・２類から継承された製作技法によるものと、充填法によらず簡略化した製作技法によるものが併存していたということを指摘することができる。

（古江七海）

愛媛県内における古代の製塩土器出土遺跡について 宮ノ浦遺跡Ⅱ区18トレンチでは、今回の発掘調査ではじめて古代の製塩土器片が大量に出土した。すべて小片であり、器形の想定が困難である。ただ破片の特徴から、厚手や薄手という分類が可能で、薄手のなかには堅緻な、いわゆる「倉浦式」に相当すると考えられる破片もある。また厚さを問わず布目、紐の痕跡を内面に残す破片もあり、その多様性は指摘しておく必要がある。また二次的な被熱痕をのこす破片も多く、製塩工程のなかで焼塩に用いられた可能性が高い。なお、これらは新たに確認されたⅡ－５層中でまとまって出土している。その土質は、他の包含層が砂礫を基調とするのに対して、きわめて粘性が高く、堅く締まっており、塩分、ニガリなどの影響を受けている可能性がある。土器片、それを含む層の土質からも付近に何らかの生産址の存在が想定できる。共伴した須恵器の年代から、これらの製塩土器は9世紀代に比定される。

さて、愛媛県内では古代の製塩土器の出土が10数例あり、今治平野とそれに連なる島嶼部、そして道前平野に分布している。そのなかで今治市馬島亀ヶ浦遺跡では、海浜部で製塩土器片が38点出

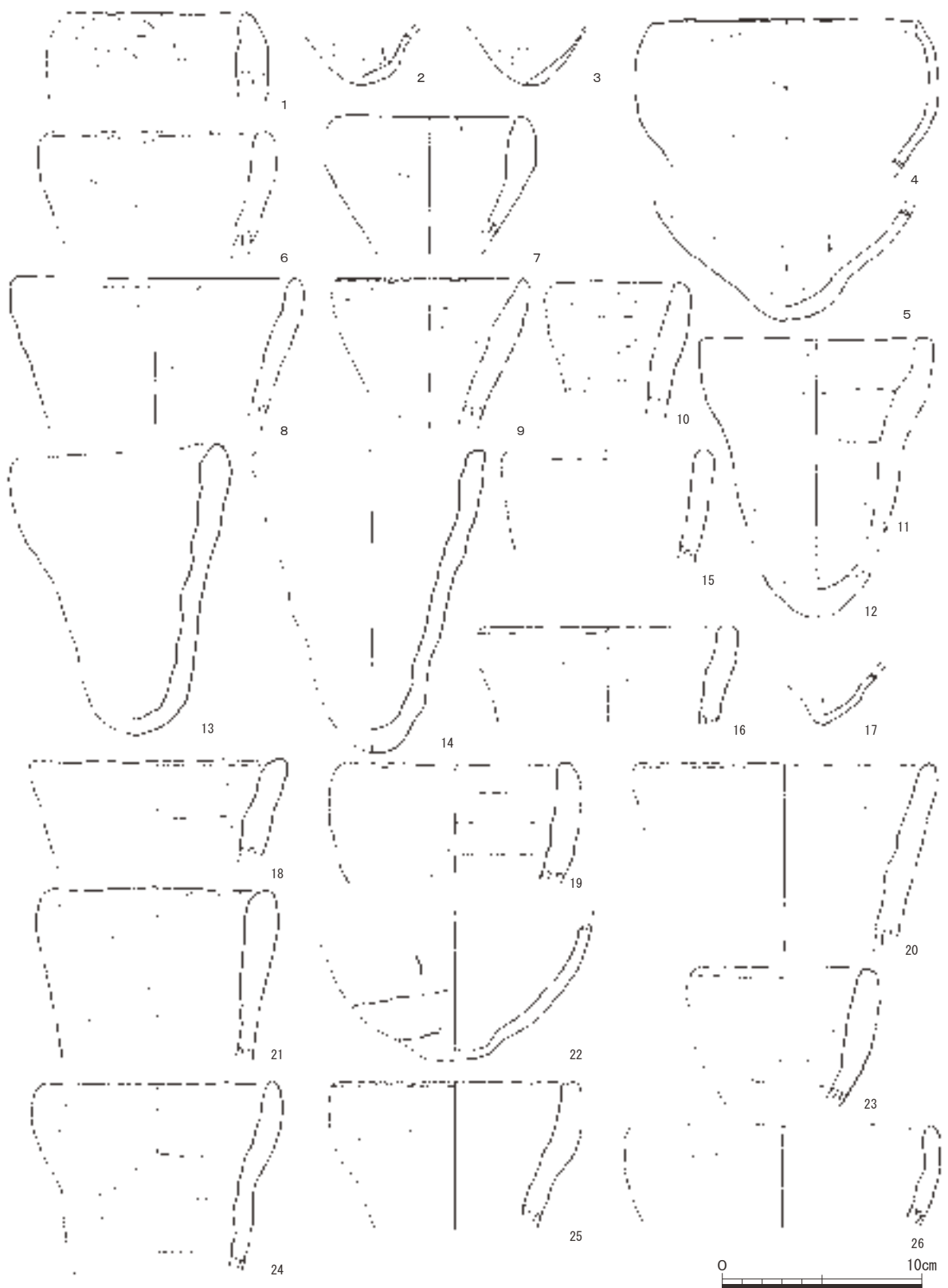


図35 愛媛県内出土の古代製塩土器

1. 馬烏亀ヶ浦遺跡 2～5. 糸大谷遺跡 6・7. 阿方牛ノ江Ⅱ遺跡 8～10. 別名寺谷Ⅱ遺跡 11・12. 四村日本遺跡 13・14. 四村額ヶ内遺跡 15・16. 経田遺跡 17. 長沢元瀬遺跡 18. 朝倉下下経田遺跡(以上、今治市) 19～21. 久枝Ⅱ遺跡 22. 幸の木遺跡 23・24. 大開遺跡 25・26. 松ノ丁遺跡(以上、西条市)

土した。須恵器や瓦も相伴しており、焼塩が浜堤周辺で行われ、生産施設に付属する関連施設として瓦葺き建物が存在した可能性が指摘されている〔谷若ほか編1999〕。その他、集落遺跡から出土する例は消費地でのあり方を示すものとして、焼塩運搬用土器と解釈されている。例えば今治市四村額ヶ内遺跡では焼塩土器が2点完形で出土しており、両者の容量はほぼ同じであることから、一定の焼塩を運搬するために規格品として作られたものであったことが指摘される〔廣田ほか編1997〕。四村額ヶ内遺跡出土例の時期は8世紀後半ごろと考えられている。今治市内での最古の例は糸大谷遺跡出土品が7世紀後半～8世紀と幅をもたせて時期が想定されており〔谷若ほか編1996〕、それ以外の製塩／焼塩土器も奈良時代に属している。

宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器は芸予諸島の愛媛側で最北の出土例となり、また馬島亀ヶ浦遺跡例に続く数少ない生産遺跡での出土例である。製塩土器の出土量は馬島亀ヶ浦遺跡を凌いでおり、より大きな生産規模が想定される。これらの包含層であるⅡ－5層は18トレンチの西壁に接したわずかな面積で確認されているため、層の主体はさらに西に広がると推測される。今後、その広がり

と生産施設の様相を発掘調査で明らかにし、さらに全形を検討できる製塩土器の検出が望まれる。

(福本佳織)

上島町内遺跡の今後の展開 宮ノ浦遺跡は、これまで蓄積してきた調査成果から、国の史跡に指定された中世の荘園遺跡である弓削島荘遺跡の前段階の時代の島嶼部の生業や景観等を示す重要な遺跡であることがわかってきた。さらに、今次の調査では、宮ノ浦遺跡では初めてとなる中世墓の発見があった。検出された人骨は遺存状態がきわめて良好なため、今後も引き続き出土人骨の分析・研究を行う計画である。宮ノ浦遺跡が所在する佐島は、京都の石清水八幡宮の荘園であった歴史を有している。出土人骨の年代は石清水八幡宮による荘園経営開始前後と考えられ、荘園時代の歴史や生活文化を解明するうえでも、この人骨の発見は大変貴重である。

上島町では、弓削島荘遺跡の史跡指定を受けて、史跡弓削島荘遺跡の価値および歴史的な意義を広く町民に伝えることにより、地域の宝である本遺跡を未来へと継承する契機とすることを目的に、令和4年6月19日（日）に『「弓削島荘遺跡」国史跡指定記念シンポジウム』を開催した。シンポジウム後半のパネルディスカッションでは、史跡の保存・継承・活用についてパネリストによる様々な提言が行われた。提言では、弓削島と周辺海域を含めた空間を「中世荘園の世界を体験できる場」として保存・活用することや、その空間を歴史・文化・自然を包摂した「しまじゅうまるごと博物館」と見立て、学習や文化観光の場として展開していくことの将来性が示された。また、荘園遺跡と構成資産の内容をわかりやすく伝えるガイダンス施設の設置、町民参画による遺跡の保存・活用の推進の必要性も提言された。上島町原風景・塩業史を体験できる場を創出するためには遺跡の発掘調査の成果が重要であり、宮ノ浦遺跡はそれに寄与する多くの情報を有している。そして、弓削島荘遺跡や宮ノ浦遺跡のみならず、生名島、岩城島、魚島などの町内の他の島々の遺跡でも同様な調査を実施することによって、多様な上島町原風景を復元することができるであろう。さらに、このことは瀬戸内海原風景の復元へと繋がると考える。

現在、上島町では、地域の歴史・文化をだれもが学ぶことができ、地域づくりに寄与するような「上島町にふさわしい資料館」を設置するための準備を進めている。町内の遺跡から出土した考古資料（埋蔵文化財）は、歴史的・学術的な価値を与えることによって、将来にわたって保存・活用されなくてはならない。特に、今次の宮ノ浦遺跡の発掘調査で出土した人骨については、分析・研究の進展によって、歴史的・学術的な位置付けがされ、地域の宝として保存・活用されることが期待されている。

発見・調査によって文化財としての価値や範囲が明らかにされた重要な遺跡は、保存・整備・活用の過程を経て、将来にわたって地域の宝として継承される必要がある。宮ノ浦遺跡についても、地域での保存・活用方法を検討する段階に入っている。

（有馬啓介）

【参考文献】

- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 柴田昌兄 1994「第Ⅳ章 考察」『多々羅製塩遺跡－多々羅大橋関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』埋蔵文化財発掘報告書52 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌兄 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 谷若倫郎ほか編1996『糸大谷遺跡－来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集－』埋蔵文化財発掘調査報告書第63集 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎ほか編1999『馬島亀ヶ浦遺跡 馬島ハゼヶ浦遺跡－来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集－』埋蔵文化財発掘調査報告書第79集 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 廣田秀久ほか編1997『四村額ヶ内遺跡発掘調査報告書』今治市埋蔵文化財調査報告書第33集 今治市教育委員会

圖 版



1. 宮ノ浦遺跡遠景（西から）



2. 全景（南から）

図版 2



1. 5トレンチ3号遺構（北から）



2. 5トレンチⅣ層縄文土器出土状況（北から）



3. 5トレンチ東壁・北壁（一部）



4. 5トレンチⅣ層縄文土器出土状況（東から）



1. 17トレンチ北壁



2. 17トレンチ南壁



3. 17トレンチ東壁



4. 17トレンチ西壁



5. 17トレンチⅢ層古式土師器・製塩土器（西から）



6. 17トレンチⅣ層縄文土器出土状況（東から）

図版 4



1. 18トレンチ北壁



2. 18トレンチ東壁（一部）



3. 18トレンチ南壁



6. 18トレンチⅡ-5層製塩土器出土状況（北から）



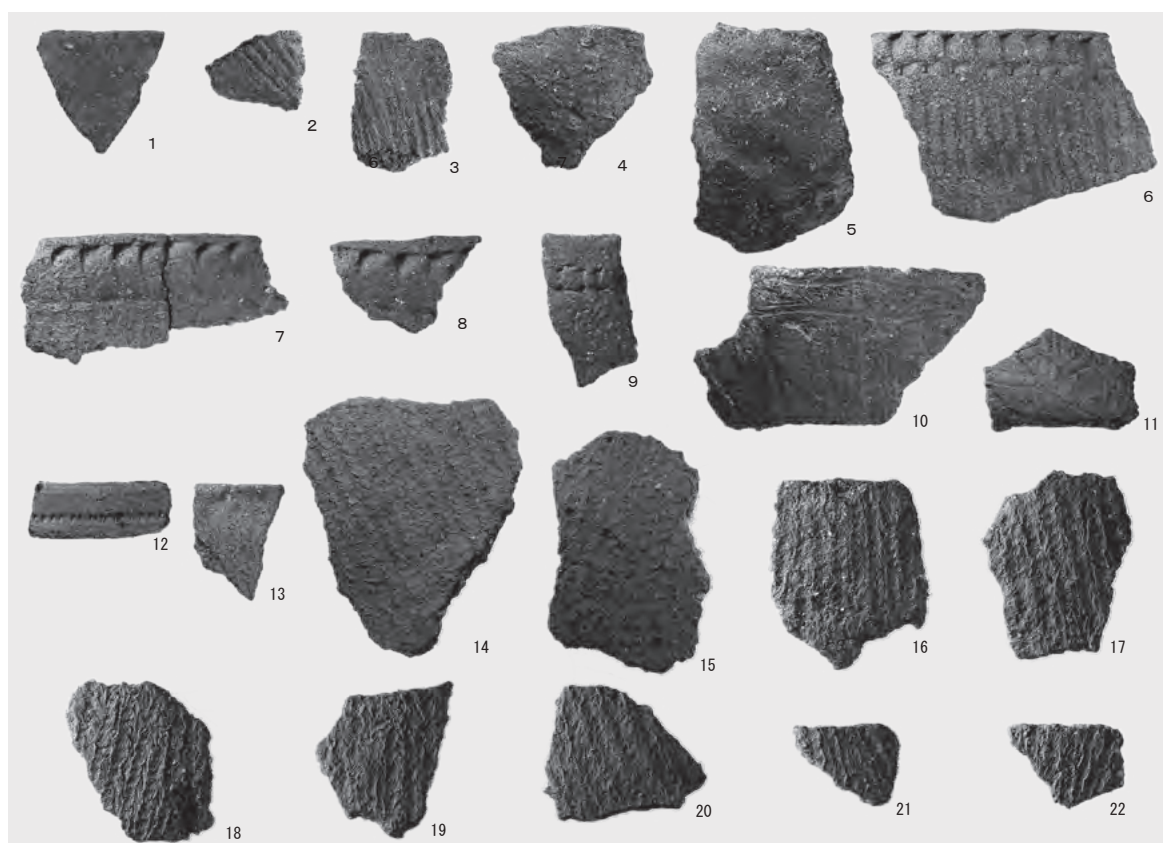
4. 18トレンチ1号墓（西から）



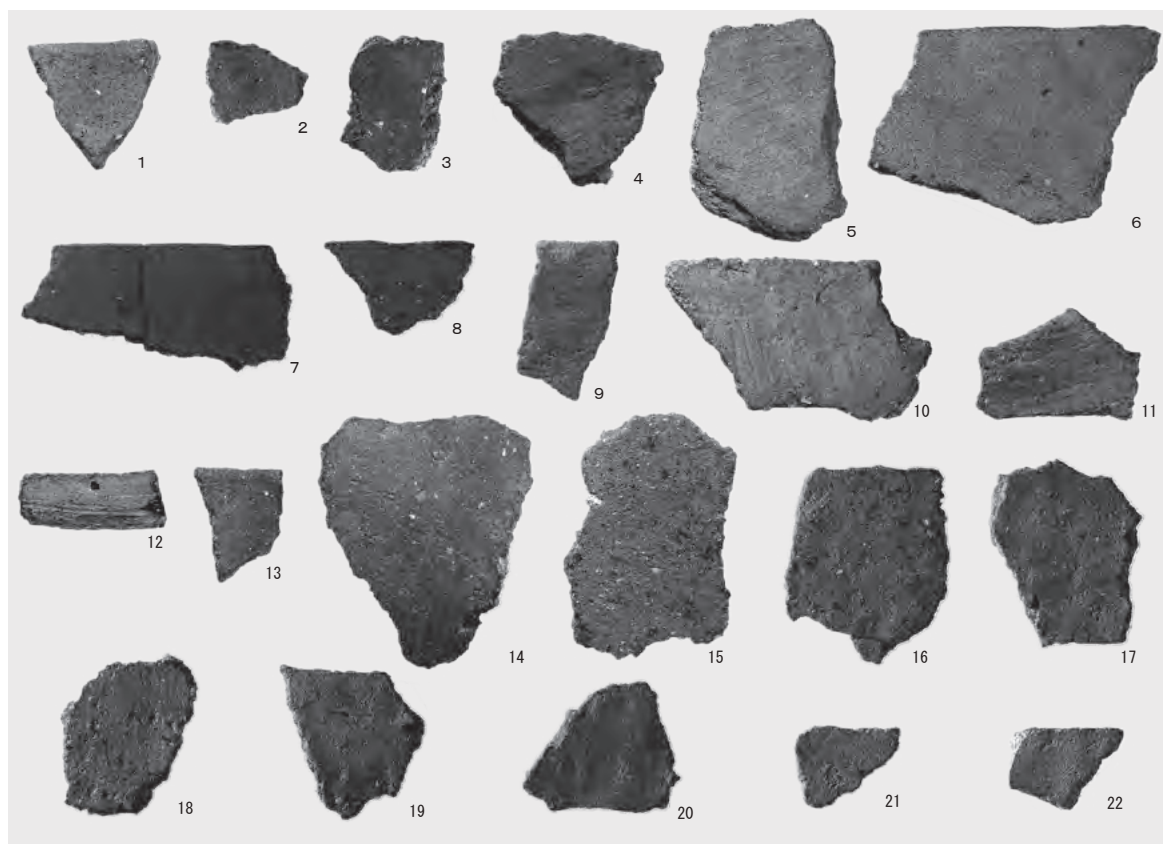
5. 18トレンチ1号墓副葬土器（西から）



7. 18トレンチⅡ-5層製塩土器出土状況（北から）

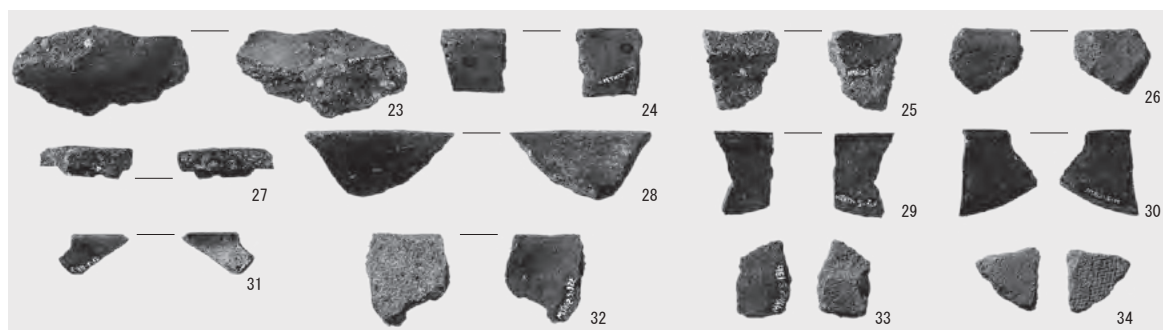


5トレンチ出土縄文土器(表面)

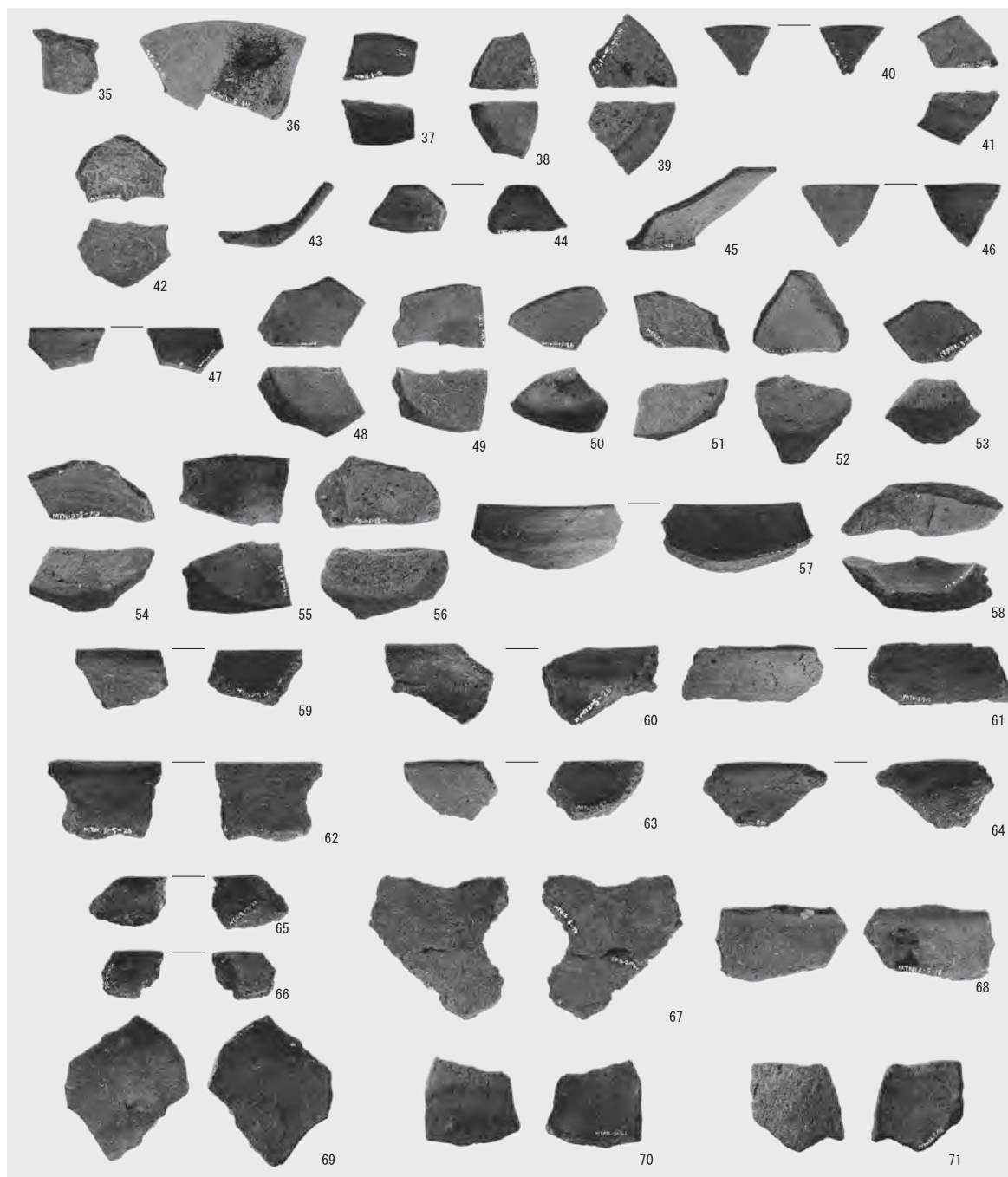


5トレンチ出土縄文土器(裏面)

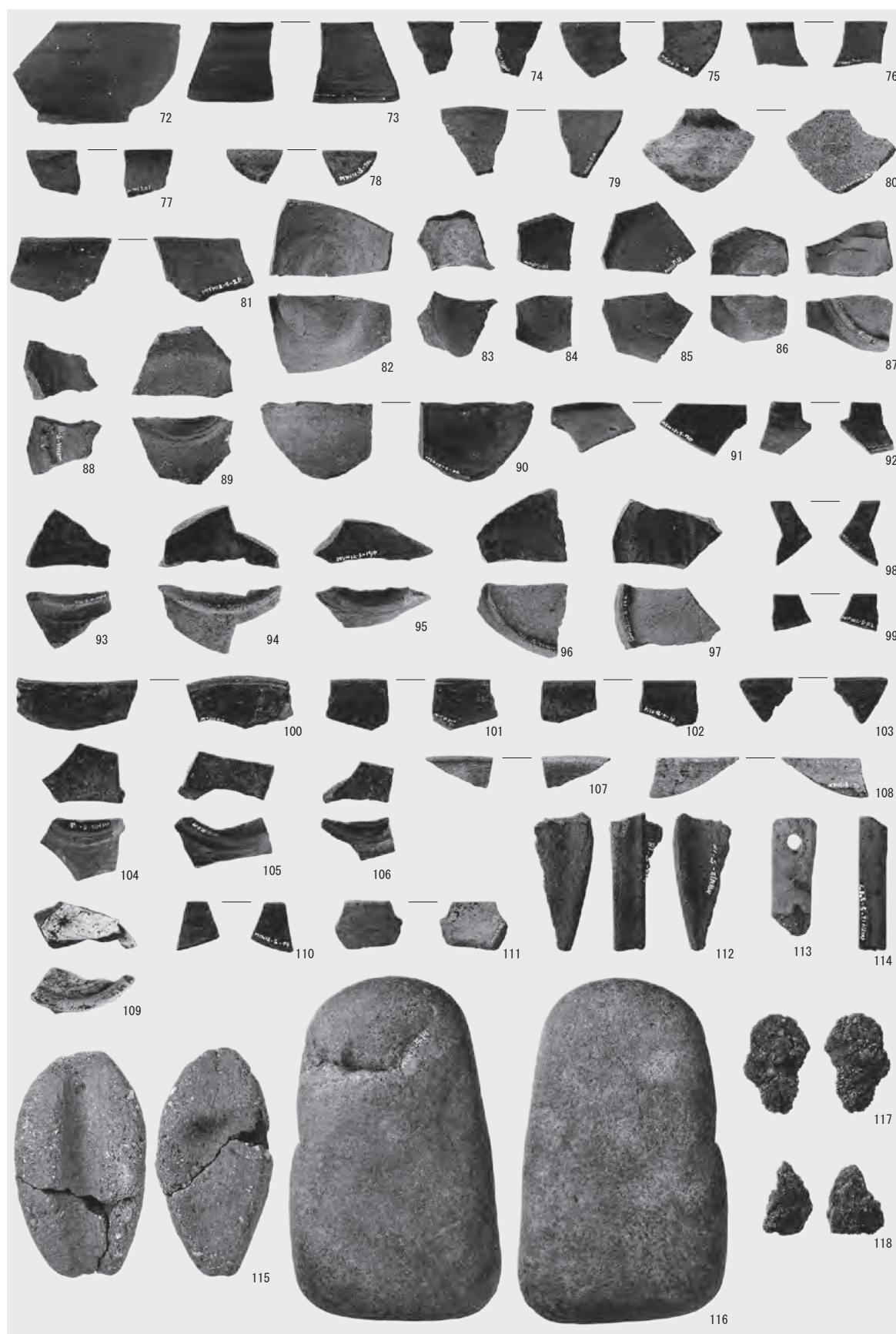
図版 6



5トレンチ遺構出土遺物

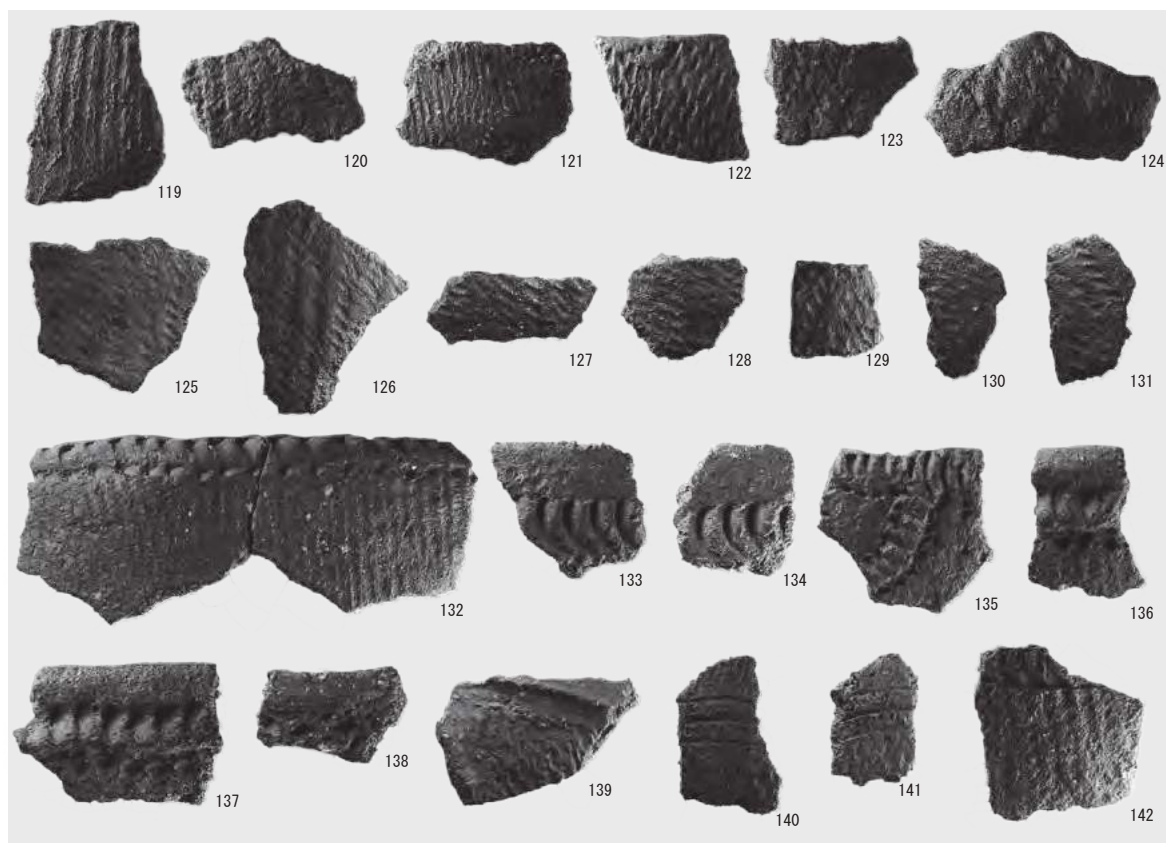


5トレンチ包含層出土遺物1

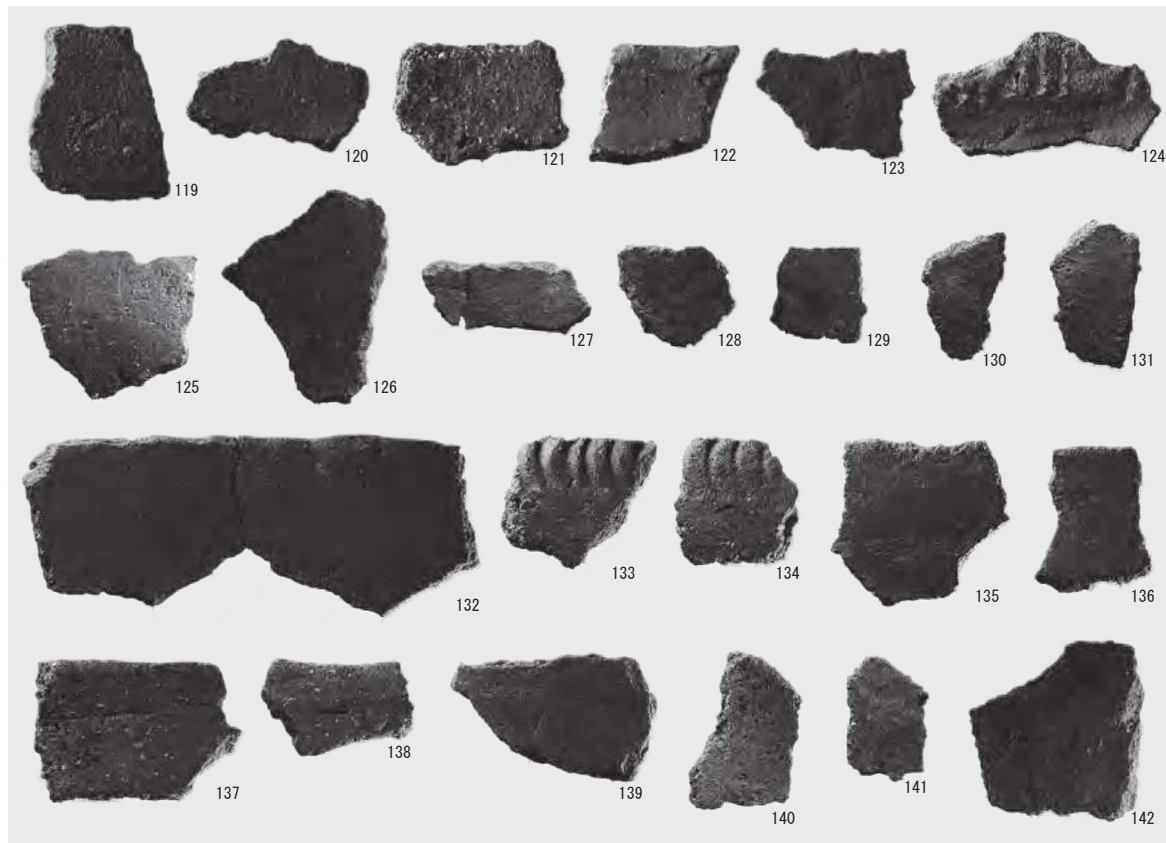


5トレンチ包含層出土遺物2

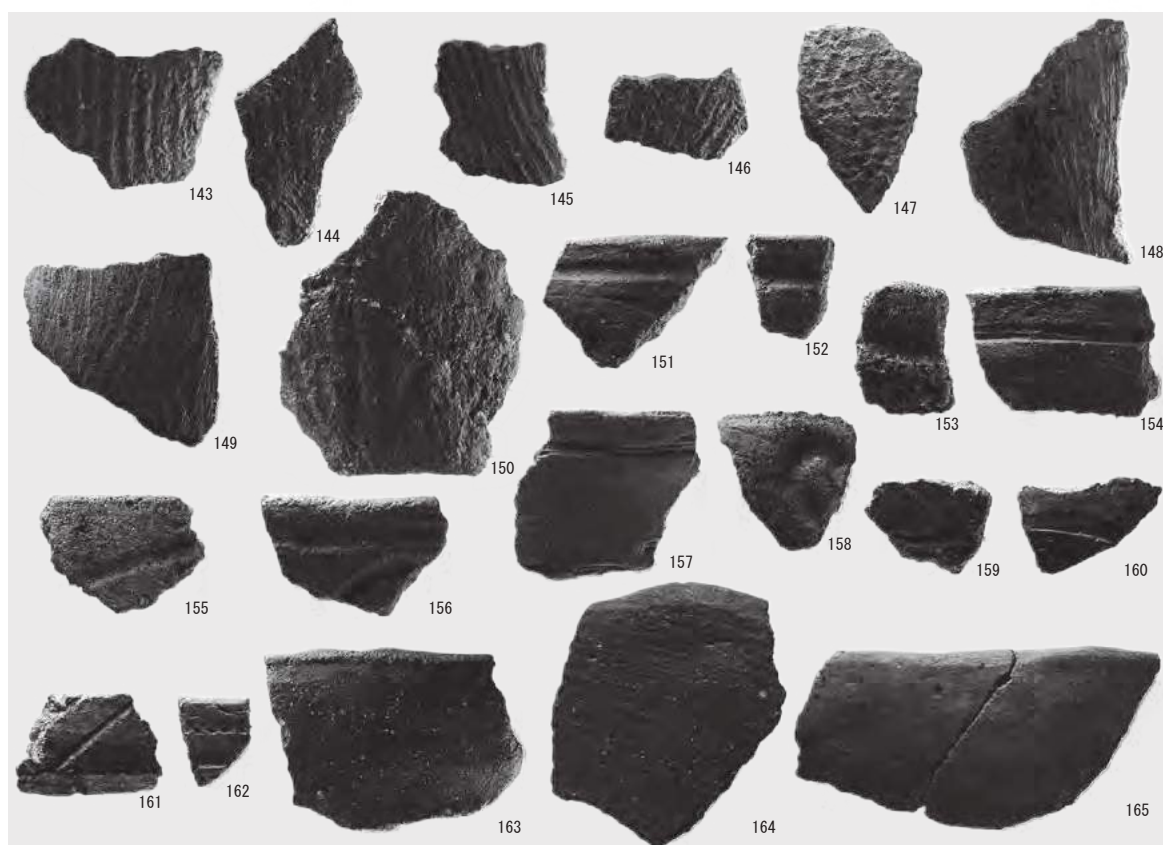
図版 8



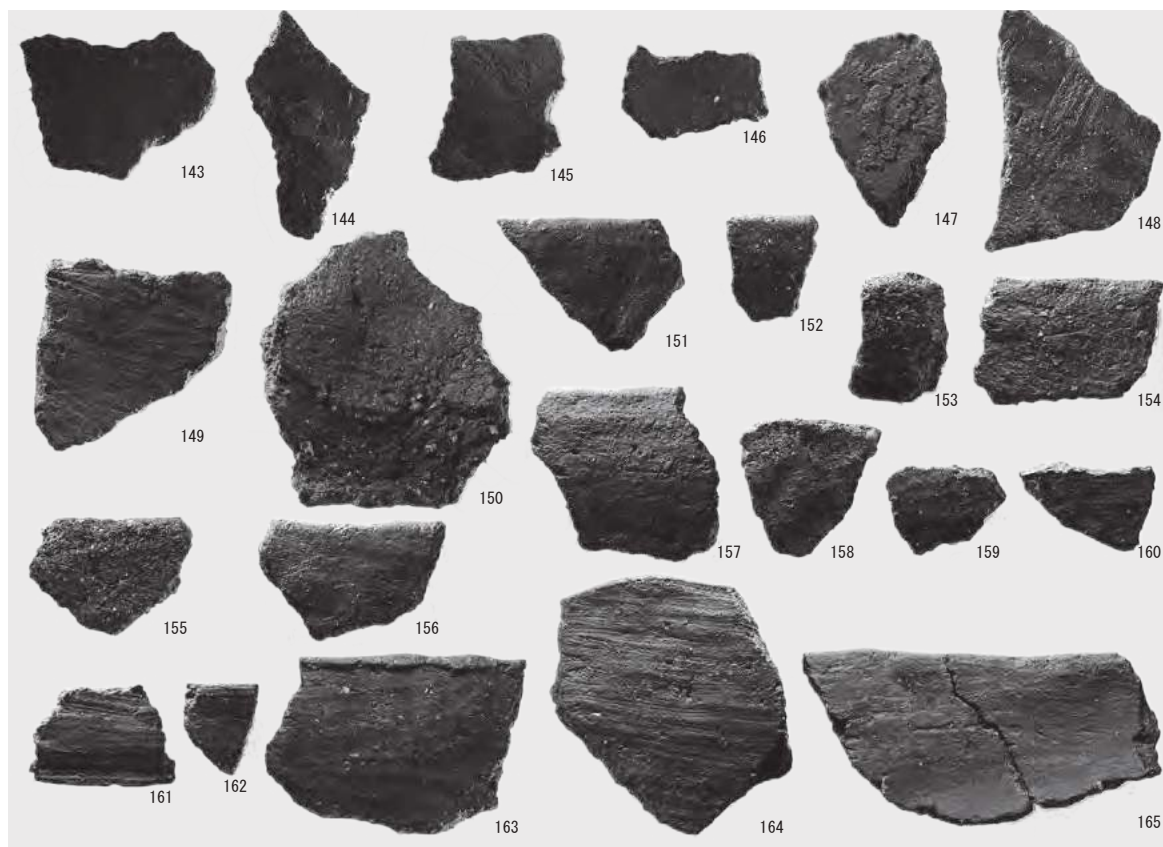
17 トレンチ出土縄文土器 1（表面）



17 トレンチ出土縄文土器 1（裏面）

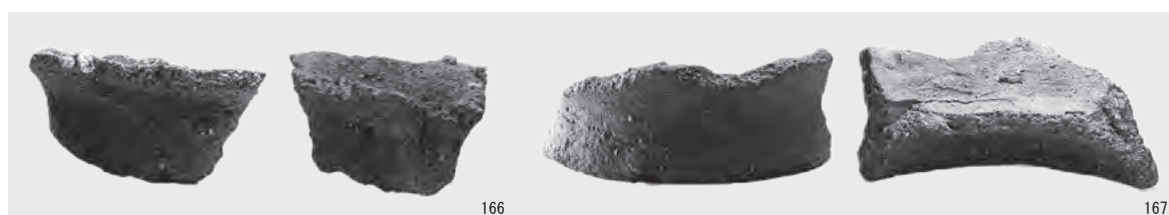


17 トレンチ出土縄文土器 2 (表面)



17 トレンチ出土縄文土器 2 (裏面)

図版10



166

167

17トレンチ出土縄文土器3



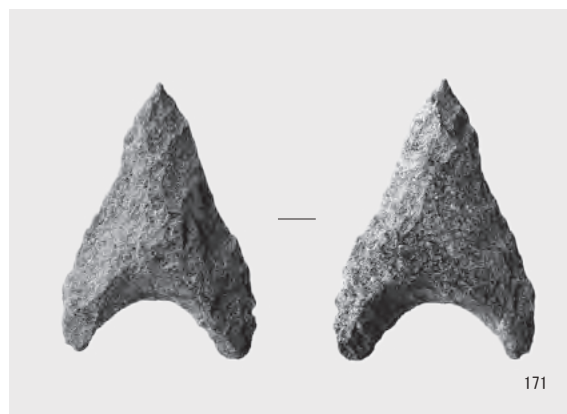
168



169

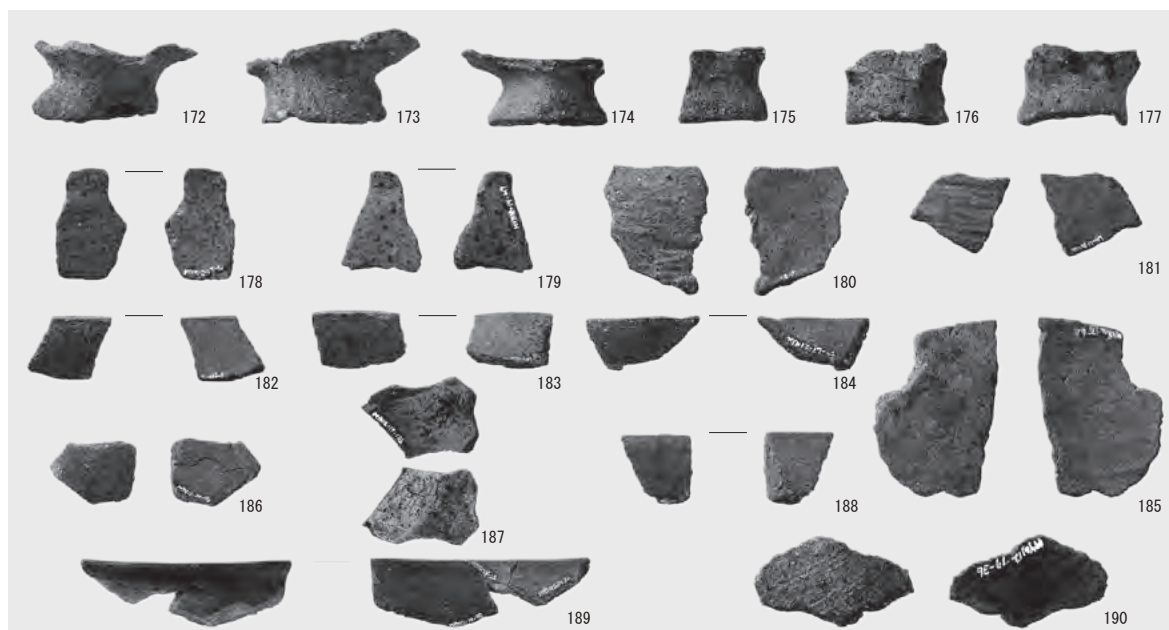


170



171

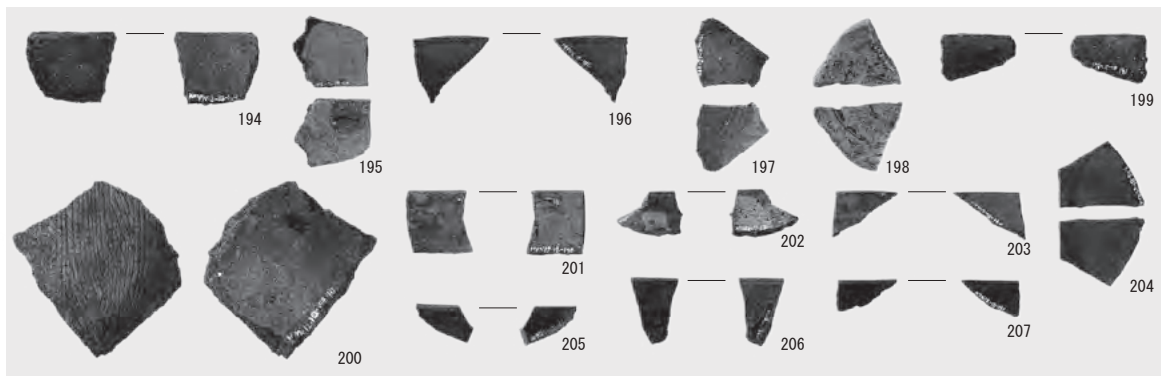
17トレンチ出土石器



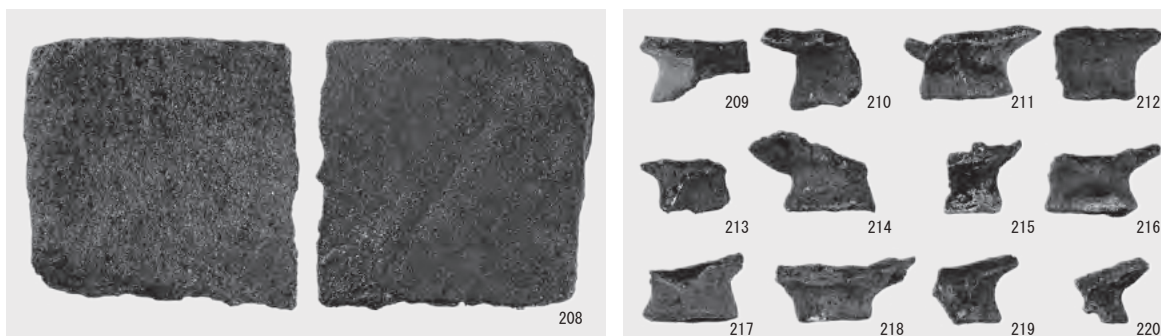
17 トレンチ出土遺物



18トレンチ 1号墓副葬品

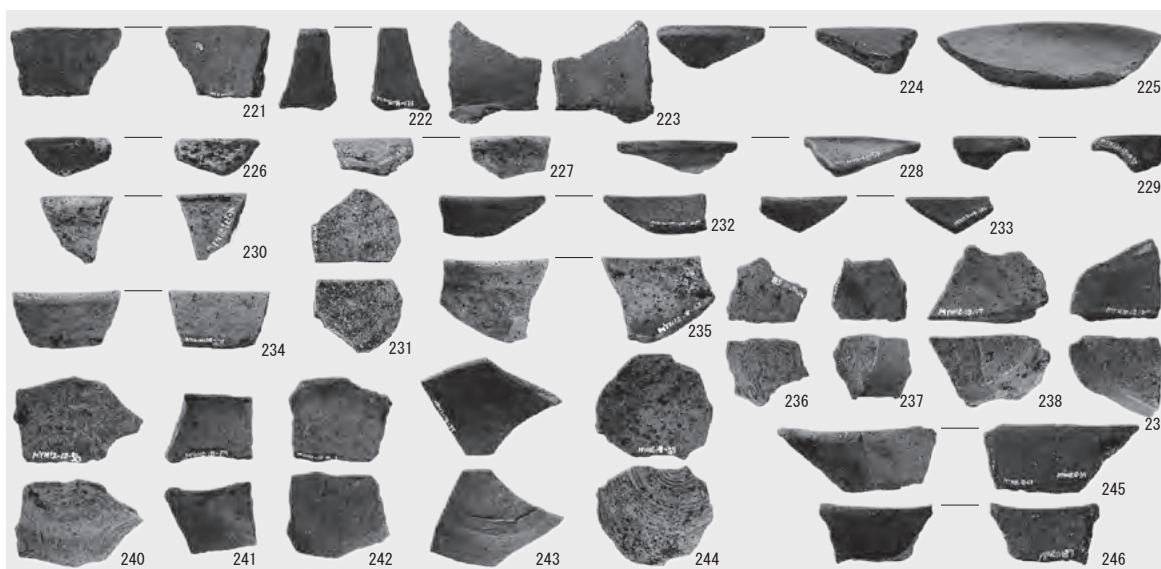


18トレンチ 1号墓埋土出土遺物



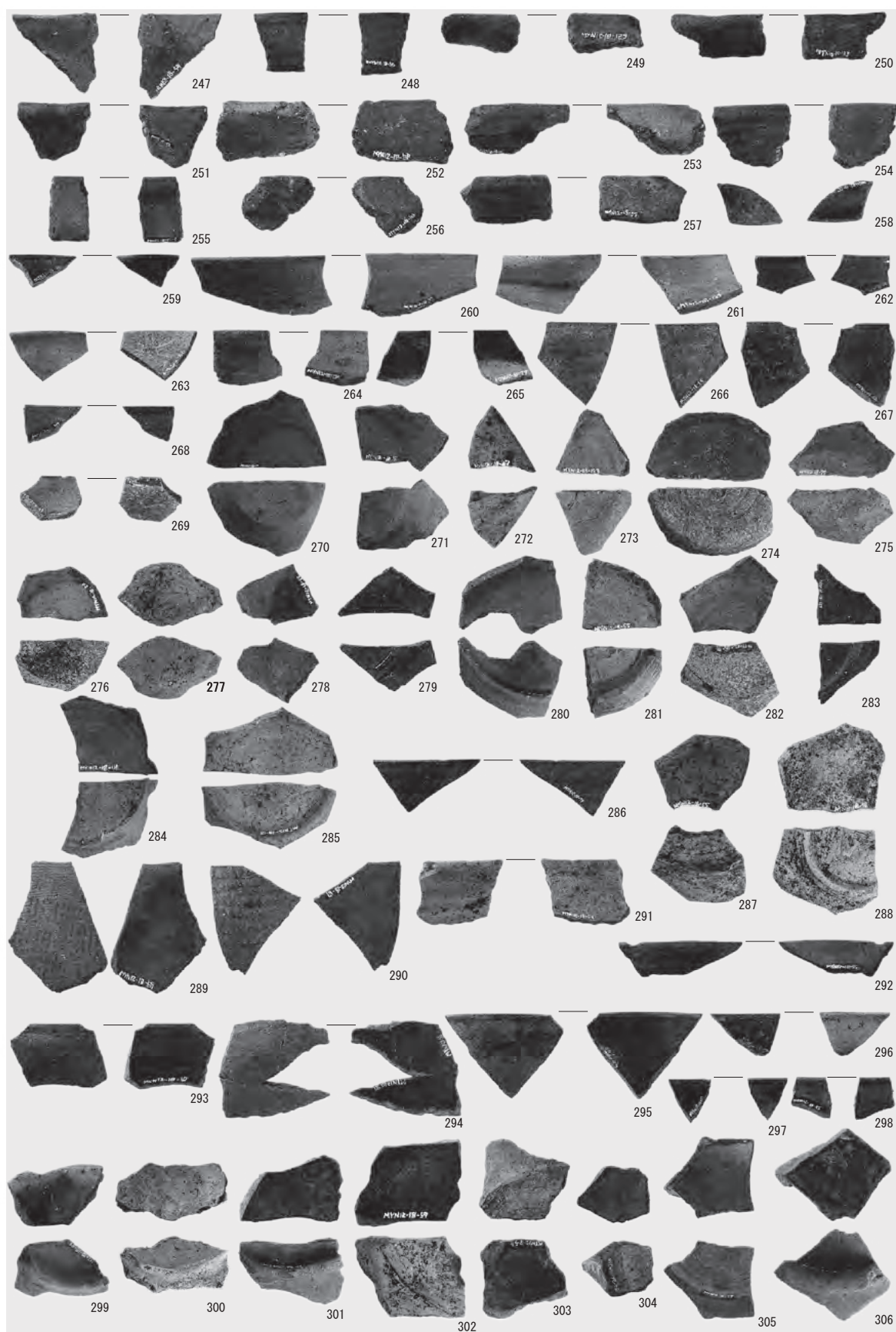
18トレンチ 1号遺構出土遺物

18トレンチ出土脚台式製塩土器

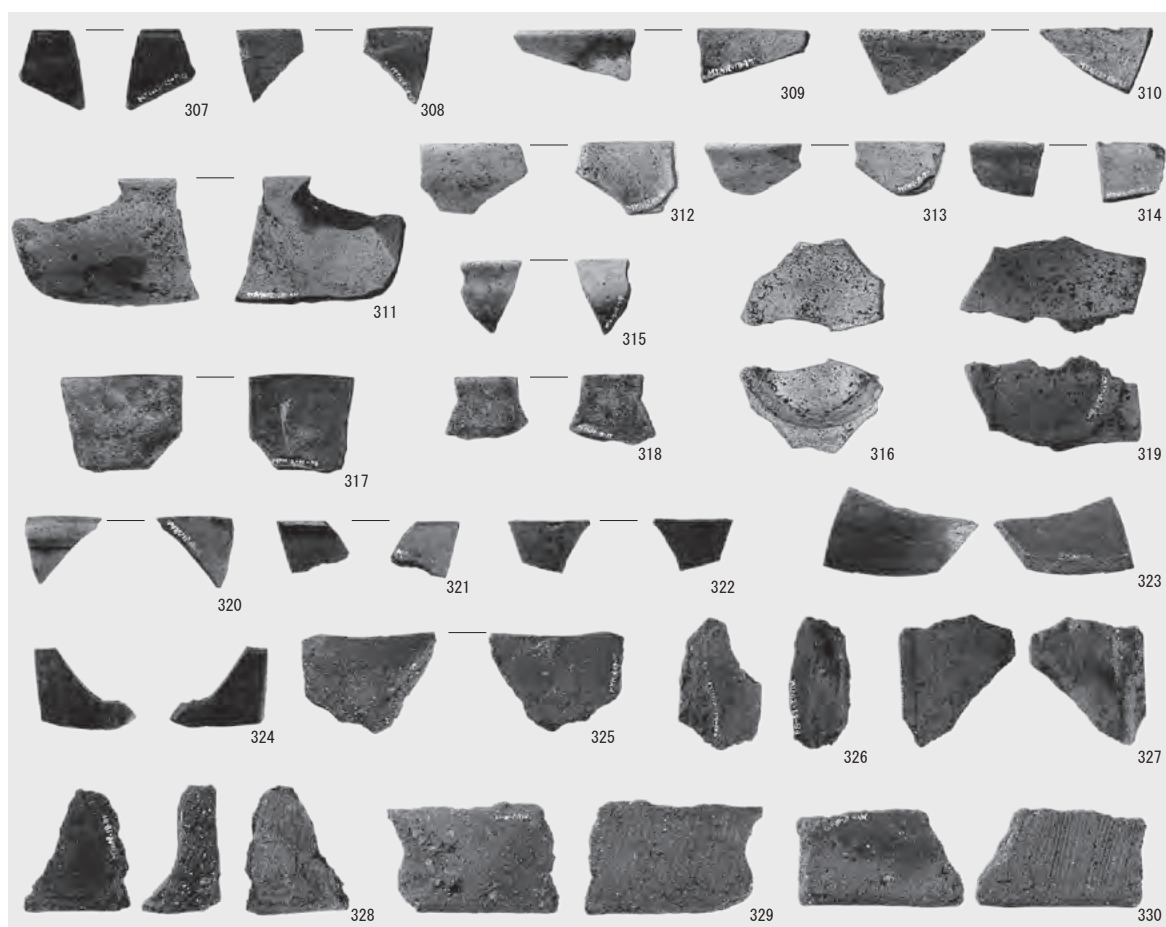


18 トレンチ包含層出土遺物 1

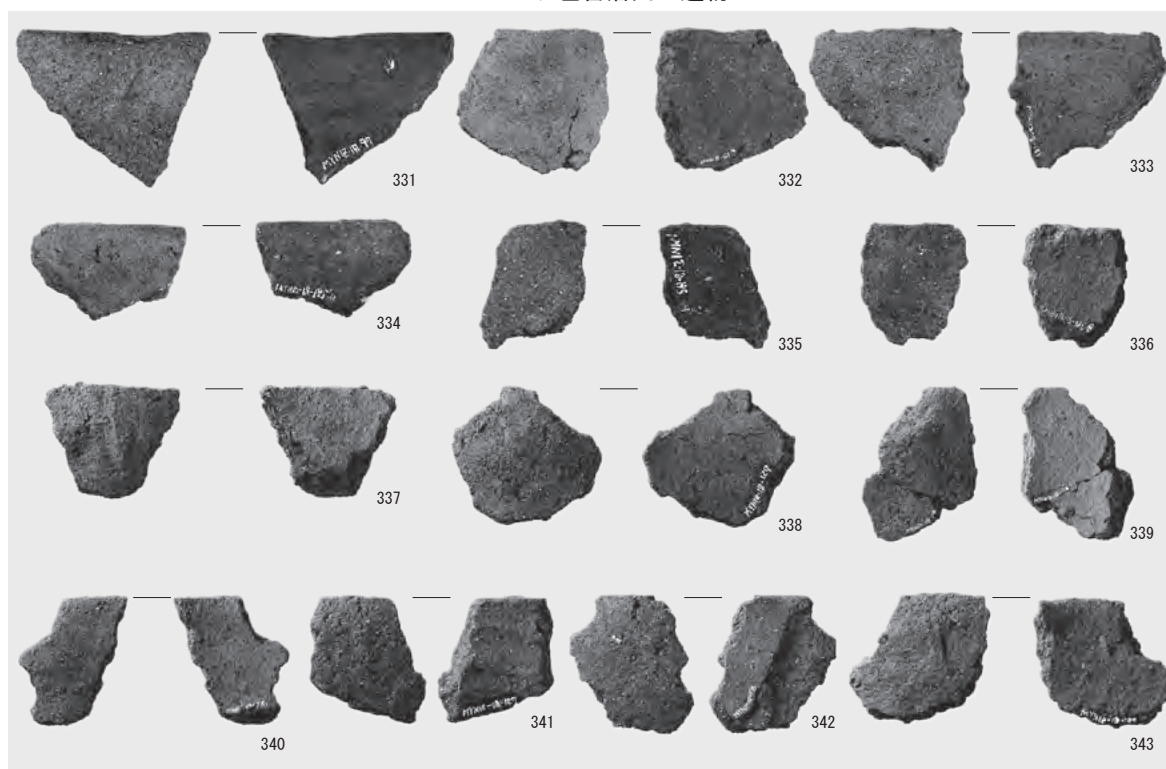
図版12



18 トレンチ包含層出土遺物 2

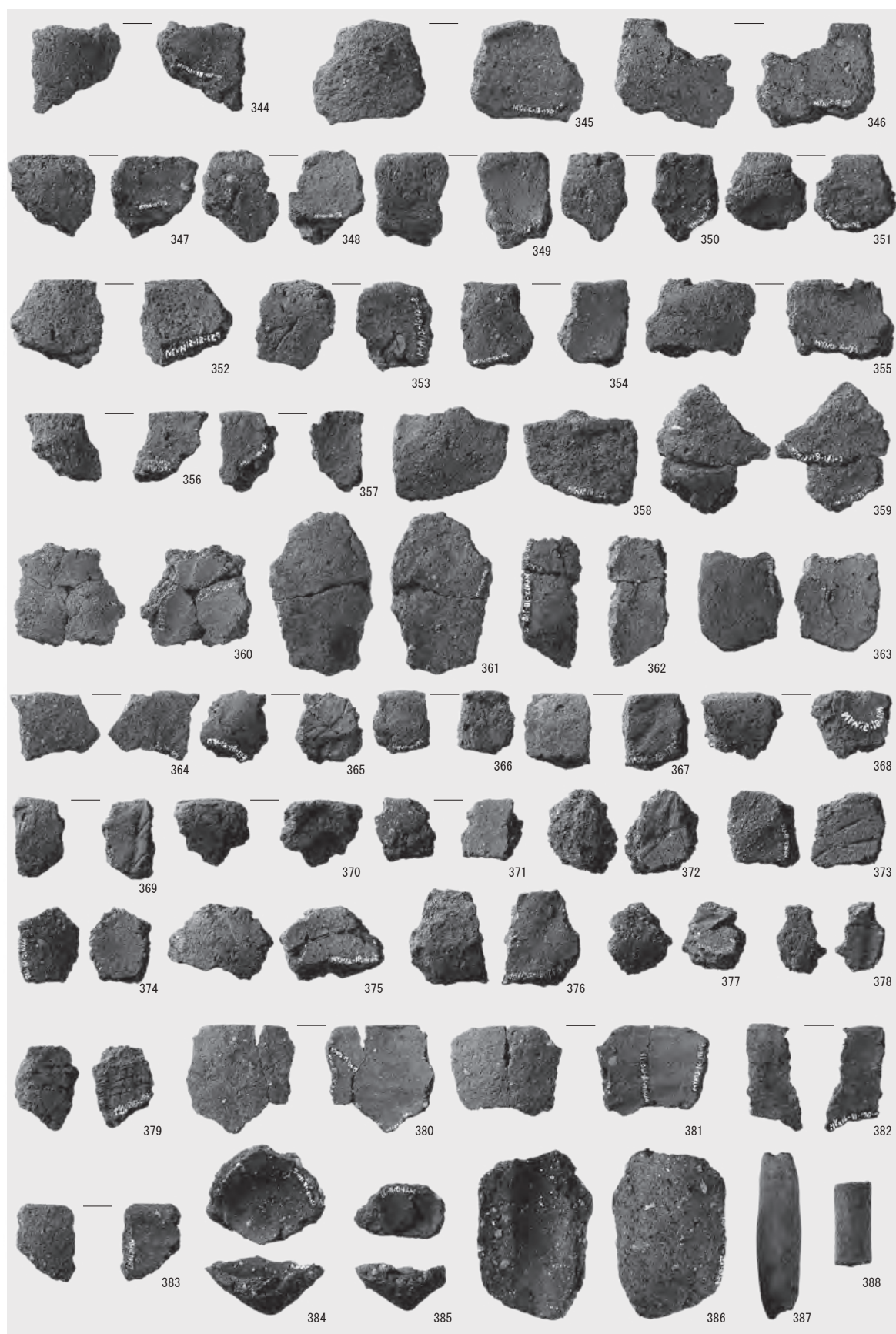


18 トレンチ包含層出土遺物 3



18 トレンチ出土製塩土器 1

図版14



18 トレンチ出土製塩土器2・土錘

報告書抄録

ふりがな	えひめけんおちぐんかみじまちょう みやんないせき							
書 名	愛媛県越智郡上島町 宮ノ浦遺跡Ⅶ							
副 書 名	第12次発掘調査概報							
シリーズ名	上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	10							
編著者名	(編者) 有馬啓介、大塩啓一郎 (著者) 足立達朗、有馬、江本晃季、大塩、笹田朋孝、ブズレン・サミ、鄭宗鎬、永田權、中野伸彦、伴井嘉正、福本佳織、藤田一希、舟橋京子、古江七海、益田千遥、松澤樹生、村上恭通、米元史織							
編集機関	上島町教育委員会							
所 在 地	〒794－2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2070							
発行年月日	2023年 3 月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやんな いせき 宮ノ浦遺跡	えひめけん おちぐん 愛媛県越智郡 上島町 ゆげさしま 弓削佐島	38356		34° 14′ 42″	133° 11′ 30″	2022 0804～19	26㎡	保存目的調査
	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落 製塩 散布地	縄文時代 古墳時代 古代 中世		カマド状遺構 土坑墓	縄文土器、石鏃、製塩土器、古式土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、施釉陶器、貿易陶磁器、土錘、土製品、鉄製品、鉄滓、自然遺物			縄文時代早期前半以前の撚糸文土器が出土、古代のカマド状遺構、中世初頭の土坑墓等を検出
要約	Ⅱ区5、17、18トレンチで発掘調査を行い、中世初頭の土坑墓、古代末ごろのカマド状遺構、土坑などを検出した。土坑墓には伸展葬で埋置された人骨に、土師質土器杯1点と刀子2点が副葬されていた。人骨の初歩的な考古学的分析と形質人類学的分析を行った。中世初頭の瀬戸内海島嶼部でほぼ完形の人骨が出土した稀有な事例であり、今後の研究の進展が期待される。カマド状遺構は掻き出し口と被熱部からなり、被熱部は方形を呈し、製塩に関連する遺構の可能性がある。古代の製塩土器は集中して大量に出土し、内面にきめ細かな布目痕をのこすものもある。縄文時代の包含層では層位と土器の対応関係や包含層の形成と旧地形の関係を確認した。古代の製塩土器の出土する層の広がりや生産施設の様相、縄文時代の包含層の広がりやの把握などは次年度の課題である。							

愛媛県越智郡上島町
宮ノ浦遺跡Ⅶ
— 第12次発掘調査概報 —

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第10集)

2023年3月27日発行

編集・発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地
印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7-1-8
